

貝類

① 名古屋市における貝類の概況

名古屋市に生息している（していた）貝類は、レッドデータブックなごや2004（名古屋市動植物実態調査検討会監修，2004）の名古屋市産貝類目録に73種が掲載されている。同様にレッドデータブックなごや2010（名古屋市動植物実態調査検討会監修，2010）の名古屋市産貝類目録には、外来種、国内移入種を含め92種が掲載されている。レッドリストに掲載されており目録に掲載されていない種が18種存在するため、これをあわせるとレッドデータブックなごや2010では110種が掲載されたことになる。今回の調査では、現地調査（文献調査を含む）により40種が目録に新たに追加された。ドブガイについてはヌマガイとタガイに分けた（計算上はヌマガイとタガイを追加しドブガイを削除した）。これにより名古屋市産貝類目録の更新されたリストは149種である。その内訳は、海産（汽水性種を含む）70種、淡水産24種、陸産55種である。これらのうち、今回レッドリストに新たに追加されるのは、海産（汽水性種を含む）8種、淡水産9種、陸産23種である。

海産（汽水性種を含む）種については、レッドデータブックなごや2010において、水深20mまでの潮下帯が調査され最新データが整っているため、今回は河口域から潮間帯を中心に現地調査をおこなった。潮下帯の種については文献などによる追加情報を加筆した。名古屋市で自然海岸が残されているのは、庄内川河口・新川河口から藤前干潟のみであり、潮下帯に生息する種を除けば海産種のほとんどはこれらの地域に生息している。特に庄内川河口域には大規模なヨシ原湿地（塩性湿地）が残っており、このような特異な環境にのみ生息する稀少種が多く見られる。今回の調査では、ヨシ原湿地の転石下からナラビオカミミガイを名古屋市内から新たに発見した（早瀬ほか，2014）。ヨシ原湿地周辺には砂泥干潟が広範囲に露出し、砂泥底に生息する種をあわせれば、庄内川河口域の貝類相は比較的豊かである。一方、藤前干潟では庄内川や新川、日光川から流入する淡水の影響を強く受け、低い塩分濃度でも生息できる広塩性の種しか生息できないと考えられる。また、砂質部分は少なく強熱減量の値の高い泥質が優占することから（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難であり、貝類相を貧弱にしている。このような状況で、例えば藤前干潟のカキ礁（マガキ礁）を構成するウネナシトマヤガイは、確実に個体数が減少しており準絶滅危惧に追加した。オキシジミは年により個体数の消長が著しく変化し、激減することがあることから（川瀬ほか，2009）準絶滅危惧に追加された。

淡水産種については、これまでに水田・水路や溜池の調査が充分に行われていなかったため、名古屋市内のこのような環境を出来る限り幅広く調査した。特に水田ではいわゆる微小種を捕獲するためにメッシュの細かい篩やフィッシュネットを使用することにより、ヒラマキミズマイマイ、ヒメヒラマキミズマイマイ、ヒラマキガイモドキやウエジマメシジミを新たに確認することができた。特に中川区の水田・水路において、市内から絶滅した可能性の高かったマルタニシの生貝を10年あるいは20年ぶりに再発見できたことは特筆すべき事項である（川瀬・石黒，2015）。しかしながら、市内の大部分の水田・水路では汚濁耐性種や汚濁指標種である

ヒメタニシ、スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）、サカマキガイが多産することが多い。また、2009～2012年には名古屋市内15ヶ所の溜池において、淡水生物調査や外来魚駆除などが行われ一部の溜池については池干し調査も行われた。その結果、これまで確認されていなかった溜池からもヌマガイやオオタニシの記録が増えた（川瀬・野呂，2013）。一方、イシガイは再発見されず、明らかな外来種であるシジミ類（川瀬・市原，2013）やハブタエモノアラガイが新たに発見された。

陸産種（陸産貝類）については、守山区など調査が充分に行われていない地域での重点的な調査が実施されたことや（川瀬，2012a,2013c；川瀬ほか，2014a,b；川瀬・村瀬，2014）、市民参加型（参加者456名）による名古屋市陸貝一斉調査（市内全16区33地点）が開催されたことにより（川瀬，2012b,2013a,b；川瀬ほか，2013）、今回新たに23種を目録に追加することとなった。市内に広く分布し比較的個体数の多い陸産貝類は、ナミコギセル、トクサオカチョウジガイ、ホソオカチョウジガイ、オカチョウジガイ、ウスイロシタラ、ウラジロベッコウ、ヒメコハク、コハクガイやイセノナミマイマイである。市内に残された自然度の高い雑木林は少なく、相生山緑地、名古屋城外堀、熱田神宮、庄内川河畔林など神社や公園を含む特定の地域のみで生き残っている陸産貝類が存在する。特に守山区からは、ビロウドマイマイ属の一種（川瀬ほか，2014b）、ニッポンマイマイ、コベソマイマイ、ヤマタニシなどが新たに発見された。いずれも名古屋市内では生息域が限られており、各地の生息個体数も少なく稀少種である。新たに熱田神宮から発見されたシリオレギセル（川瀬，2012a）は明らかな国内移入種である。他には国内移入種としてウスイロオカチグサやコハクオナジマイマイが、外来種としてノハラナメクジやチャコウラナメクジが記録されている。

最後に、レッドデータブックなごや2004（名古屋市動植物実態調査検討会監修，2004）において、移入種である可能性が高いとされたヒクギセルのDNA分析を行ったところ、名古屋市に生息するヒクギセルは絶滅のおそれのある地域個体群（LP: Threatened Local Population）であることが判明した（川瀬・森山，未発表）。ヒクギセルは静岡県以東、関東地方、伊豆諸島に分布するが、飛び地分布として名古屋市熱田区にも生息している。特に熱田神宮公園の断夫山古墳では大きな個体群が残されており、生物地理学的に重要である。今回は関東地方のサンプルを十分に集められなかったため、各種の解説への掲載を控えたが、関東地方各地のデータを追加分析し別途報告する予定である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

本誌掲載のレッドリスト掲載種は、絶滅4種、絶滅危惧ⅠA類27種、絶滅危惧ⅠB類8種、絶滅危惧Ⅱ類9種、準絶滅危惧32種、情報不足3種の全83種である。海産（汽水性種を含む）種では、絶滅3種、絶滅危惧ⅠA類22種、絶滅危惧ⅠB類2種、絶滅危惧Ⅱ類6種、準絶滅危惧20種、情報不足1種、淡水産種では、絶滅1種、絶滅危惧ⅠA類5種、絶滅危惧ⅠB類3種、絶滅危惧Ⅱ類1種、準絶滅危惧2種、陸産種（陸産貝類）では、絶滅危惧ⅠB類3種、絶滅危惧Ⅱ類2種、準絶滅危惧10種、情報不足2種である。

今回新たに追加されたのは、絶滅危惧ⅠA類が2種である。このうちタガイは従来のドブガイから分かれた種である。本誌では従来ドブガイとして扱われてきた種を、ヌマガイとタガイに独立させた。DNA分析によっても2種に分かれることを確認した。今回の調査ではタガイの生息を確認することが出来なかったが、愛知県教育センター（1967）では市内にタガイの記録

が複数あることから今回の掲載に至った。ナラビオカミミガイは庄内川河口のヨシ原湿地の転石下からオカミミガイとともに発見された。マシジミは絶滅危惧Ⅱ類からランクアップされた。

絶滅危惧ⅠB類は2種であり、ヌマガイは従来のドブガイから分かれた種である。レッドデータブックなごや2004（名古屋市動植物実態調査検討会監修，2004）に掲載されているドブガイはヌマガイである可能性が高く、現在市内で生貝を確認できるイシガイ科二枚貝はヌマガイだけである。ウエジマメシジミは南区や天白区の水田から発見されたが市内の生息地は限られており個体数も少ない。

絶滅危惧Ⅱ類にはヒゼンキビとビロウドマイマイ属の一種の合計2種が加わったほかオオタニシが準絶滅危惧からランクアップされた。

準絶滅危惧は最も追加種が多く、海産（汽水性種を含む）5種、淡水産2種、陸産10種の合計17種である。従来ムシヤドリカワザンショウとされていた種は、太平洋側には分布せず誤同定であることが明らかになりヒナタムシヤドリカワザンショウに改められた。海産種ではカキウラクチキレモドキが庄内川河口域のカキ礁から発見されたが個体数は極めて少ない。また、イソシジミ、マテガイ、ウネナシトマヤガイ、オキシジミは以前から生息が確認されていたが、個体数が確実に減少しているなどの理由から準絶滅危惧に追加された。淡水産種では市内全域の水田や水路で微小種が詳細に調査されたことにより、ヒラマキミズマイマイとヒラマキガイモドキが発見されたが分布には偏りがあり個体数も多くはない。一方でヒメヒラマキミズマイマイは市内各地の水田に見られ個体数も比較的多いため、レッドリスト種の対象とならなかった。陸産種では市内全16区の詳細な調査が行われたことにより、既に知られていたミジンヤマタニシ、ヒダリマキゴマガイ、ヒメカサキビやウメムラシタラガイの微小種の生息地や個体数が少ないことが分かり準絶滅危惧に追加された。守山区などから最近新たに発見されたヤマタニシ、コベソマイマイ、ニッポンマイマイなどの大型種も生息地や個体数が非常に少なく同様に準絶滅危惧に選定した。以前より生息が知られている大型種のオオケマイマイは、名古屋城外堀を除き他地域では個体数が極めて少なく、分布も限局的であることから準絶滅危惧に追加された。

情報不足には分類学的研究の遅れているオオウエキビを新たに追加した。

（執筆者 川瀬基弘）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各貝類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（貝類）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁編，1998）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁編，1998）に準拠した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右の上枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 6 貝類」（環境省，2014）の全国でのカテゴリーも併記した。

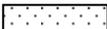
【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形 態】

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごと、一部は沿岸部に着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域は  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 ヒラマキガイ科>

カワネジガイ *Camptoceras hirasei* Walker, 1919

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧I類

【選定理由】

河川の下流域や平野部など低地の池沼や潟湖など止水環境の水面付近から水深1m程度まで生息し、沈水植物の茎や落葉などに付着する(紀平ほか, 2003; 増田・内山, 2004)。しかし、河川下流域の環境がよく保全されていた1960年代にすでに本種は、生息地が少なく珍しい種と認識されていた(愛知県科学教育センター, 1967)。1970年後半より本種の記録された場所を再調査した例があるが(中山, 1978; 木村, 1994)、再発見されていない。レッドデータブックなごや2004で絶滅と評価され、その後も発見されないことから絶滅と判断した。

【形態】

非常に特異的な形態で、殻は著しく細長く、左巻きで螺管ははずれて巻く。殻高10mm、殻径3mm程度。殻表は細かい成長脈を刻み、半透明な汚白色である。生時は付着物で薄く覆われている。

【分布の概要】

【市内の分布】

1929年に北区浄心(東海自然環境調査研究会, 1993)での生息記録がある。戦後すぐの西区での生息情報がある(原田一夫氏私信)。

【県内の分布】

木曽川水系五条川の須ヶ口付近(絶滅)。豊川水系豊橋市蒲池(絶滅)。

【国内の分布】

本州、四国。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境/生態的特性】

河川の下流域や平野部など低地の池沼や潟湖など止水環境の水面から水深1m程度まで生息し、沈水植物の茎や落葉などに付着する(紀平ほか, 2003; 増田・内山, 2004)。

【過去の生息状況/絶滅の要因】

現在市内の生息地はない。全国的な減少要因として、池沼や河川、用水路、湿地等の開発、水質汚濁、標本業者・収集家による乱獲等があげられる(阿部・福田, 2010)。

【保全上の留意点】

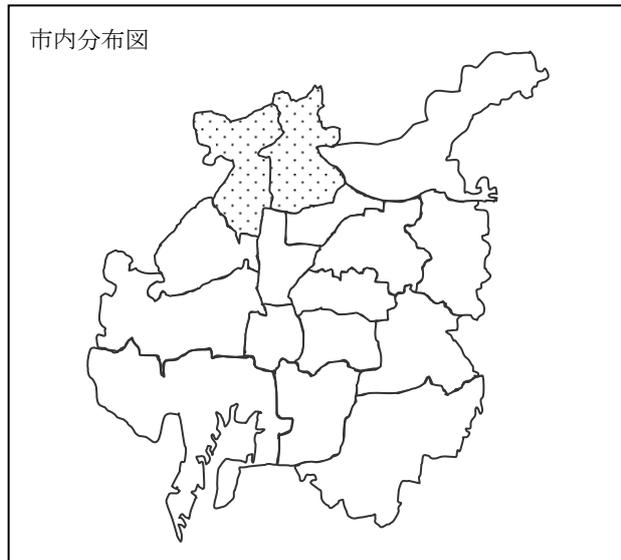
池沼や河川、湿地等の原形をとどめない改修や水の汚濁をなくし、県外の数少ない生息地においては、現状を維持することが望ましい。

【特記事項】

消長の著しい特性をもつ。インドには形態が著しく類似した *Camptoceras terebra* が分布する(増田, 2005)。

【引用文献】

阿部 司・福田 宏, 2010. 絶滅危惧種カワネジガイの岡山県における新産地. *Molluscan Diversity*, 2(2):37-41.
 愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159pp. ピーシーズ, 東京.
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
 増田 修, 2005. カワネジガイ. 環境省(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—6 陸・淡水産貝類, p.79. 自然環境研究センター, 東京.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.
 中山修一, 1978. 名古屋貝類談話会第7回淡水貝観察調査会の記. かきつばた, (4):4-5.



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <フネガイ目 フネガイ科>

ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、かつて東京湾以南の閉鎖性の内湾に広く分布していたが、現在では淡路島と有明海・八代海北部・伊万里湾でのみ生息が確認されている(和田ほか, 1996; 山下, 2012)。また、本種は1960年代には衣浦湾(知多湾奥)、汐川干潟などの内湾奥で比較的普通に生息していた(愛知県科学教育センター, 1967)が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか(1996)では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長5~6cm、殻高4cm程度で殻は厚く、よく膨らむ。殻表にはまばらに強い結節を備えた強い肋が20本ほどある。肋間は肋より幅広い。殻は白色であるが生時には灰褐色の殻皮で覆われる。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区藤前干潟や庄内川河口干潟で古い死殻がごく稀に確認される。

【県内の分布】

汐川干潟や名古屋市港区で古い死殻が確認されたのみであり、県内からは絶滅した。

【国内の分布】

国内では、現在上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島以南、インド洋、太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥部・河口域の干潟泥底に生息する。潮間帯から水深10mに浅く潜ってすむ。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

上述したような潮間帯の環境は失われているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅に至ったと考えられる。

【特記事項】

日本本土には、9500~7500年前の温暖期に分布を広げたが、関東以北では1000年前までに消滅した。伊勢湾・三河湾・高知県浦戸湾では1930~60年代に消滅した(山下, 2012)。

名古屋市南区鶴里周辺の完新統(蜂矢・田中, 1998)、名古屋港浚渫地の半化石(河合・千葉, 1996)や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群(川瀬, 2013)からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 蜂矢喜一郎・田中利雄, 1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
 河合秀高・千葉正己, 1996. 名古屋港13号地浚渫地より産出した貝類化石(1)二枚貝・角貝. 化石の友, (43):21-25.
 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)~鶴飼修司コレクションの貝類化石~. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 山下博由, 2012. ハイガイ. 日本ペントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.110. 東海大学出版会, 秦野.

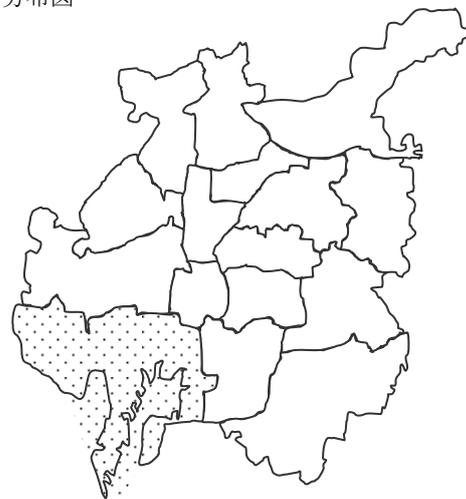
【関連文献】

水産庁・水産資源保護協会, 1994. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(I), 123pp.



ハイガイ
愛知県三河一色、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

イチョウシラトリ *Tellina (Serratina) capsoides* Lamarck, 1818

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧I類

【選定理由】

日本では、北海道以南から記録があるが、過去50年ほどの確実な生息地の北限は相模湾である(山下・木村, 2012)。相模湾では1960~70年代に消滅した(池田ほか, 2001)。本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種である。近年の詳細な調査の結果、

かつて日本の広い範囲に分布していたが、現在では三重県英虞湾、瀬戸内海、宮崎県、福岡県、熊本県などにある程度の個体群が生き残っている(山下・木村, 2012; Yamashita et al., 1997)。本種は1960年代には衣浦湾や汐川干潟でも生息が確認されていたが(愛知県科学教育センター, 1967)、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか(1996)では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長4cm、殻は丸みを帯びた三角形で膨らみが弱い。殻はやや厚く白色、規則的な板状の成長脈で覆われる。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区藤前干潟で古い死殻がごく稀に確認されたに過ぎない。

【県内の分布】

汐川干潟や名古屋市港区で確認されたのみである。愛知県内からは絶滅した。

【国内の分布】

国内では、現在上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸沿岸、東南アジア、北オーストラリア、メラネシア、インド洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”を参照。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

泥干潟の自然消滅や埋め立てにより上述したような潮間帯の環境は失われているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統からは本種の化石記録があり、クイチガイサルボウ、ハイガイ、イセシラガイ、ウラカガミ、イヨスダレ、カニモリ、ヘナタリ、ウミニナ、イボウミニナなどと共産している(蜂矢・田中, 1998)。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 蜂矢喜一郎・田中利雄, 1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
 池田 等・倉持卓司・渡辺政美, 2001. 相模湾レッドデーター貝類一, 104 pp. 葉山しおさい博物館, 神奈川.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 山下博由・木村昭一, 2012. イチョウシラトリ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.129. 東海大学出版会, 秦野.
 Yamasita, H., M. Okamoto, M. Harato and H. Fukuda, 1997. The present status and conservation values of endangered mollusks in tidal flats and estuaries of Japan -1. *The Yuriyagai*, 5(1/2):101-116.



イチョウシラトリ
 熊本県松島町, 2002年3月30日, 市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ナタマメガイ科>

アゲマキ *Sinonovacula lamarcki* Huber, 2010

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧I類

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、三河湾、瀬戸内海、有明海、八代海に分布していたが、三河湾、瀬戸内海では消滅し、有明海、八代海も危機的な状況である(山下, 2012; 和田ほか, 1996)。近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか(1996)では危険にランクされている。

【形態】

殻長 10cm、殻は前後に長い長方形で、殻はやや薄い。殻の前後端は丸みがあり両殻の間は開口している。生時の殻表は殻頂部を除いて灰褐色の殻皮で覆われる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口干潟で生息姿勢を維持したまま死滅した個体群が、靱帯や殻皮が保存されたまま半化石としてシルト層から大量に見つかる(早瀬ほか, 2014)。

【県内の分布】

汐川干潟と名古屋市港区藤前干潟で死殻のみが確認された。愛知県内からは絶滅した。

【国内の分布】

“【選定理由】”参照。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸沿岸の内湾に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の河口域や干潟の泥底に棲息し、大型個体は 1m もの生息孔を掘る。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

1960年代には衣浦湾(知多湾奥)、汐川干潟などの内湾奥で生息が確認されていた(愛知県科学教育センター, 1967)が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、汐川干潟では三河大橋の建設と前後して絶滅した(原田一夫氏私信)。上述したような潮間帯の環境は失われているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

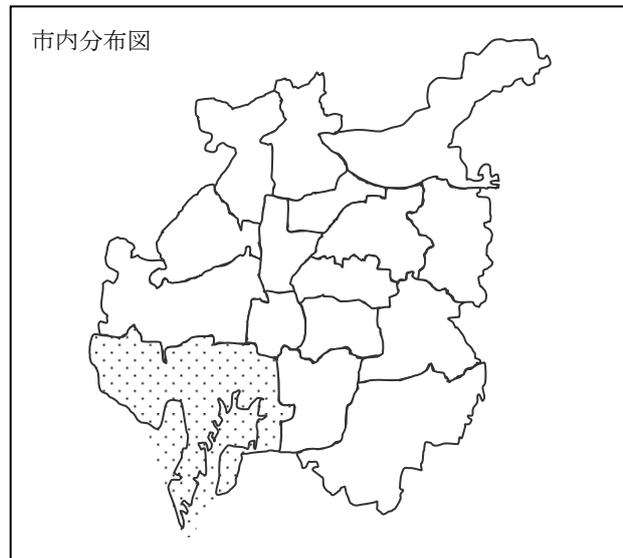
本種に使われてきた *Sinonovacula constrictus* Lamarck, 1818 は、*Sinonovacula constrictus* Bruguière, 1792 の一次同名となるので、Huber (2010) によって新名が与えられた(山下, 2012)。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves, 901pp. Conch Books, Hackenheim.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 山下博由, 2012. アゲマキ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.172. 東海大学出版会, 秦野.

【関連文献】

奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 佐藤正典(編), 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <古腹足(オキナエビス)目 ニシキウズ科>

イボキサゴ *Umbonium (Suchium) moniliferum* (Lamarck, 1822)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	絶滅危惧 I A類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の砂泥干潟にかつてはごく普通に多産した種で、伊勢湾、三河湾でも1960年代には広い範囲で多産した(愛知県科学教育センター, 1967)。愛知県でも干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。また汐川干潟のように広大な干潟が残っている場所でも、生貝が見られなくなっている(藤岡・木村, 2000)。三浦半島では絶滅し、三河湾・伊勢湾でもほぼ絶滅状態である(木村・山下, 2012)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻径約1.5cmの低いそろばん玉型で、殻は厚く周辺は丸い。外洋の砂浜に生息するキサゴと酷似するが殻が小さく、臍部の滑層が大きい点で区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾でも1960年代には広い範囲で多産したが、近年生貝を採集できない。

【国内の分布】

東北地方～九州。浜名湖や瀬戸内海には健全な個体群が残っている。

【世界の分布】

朝鮮半島南部。

【生息地の環境／生態的特性】

藤前干潟では古い死殻が採集されたが、生きた個体はまったく採集されていない。名古屋市内では絶滅した可能性が高い。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県下では近年生貝を採集できない。死殻さえ多くないので、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

上述したような干潟環境を破壊しないことはいうまでもなく、周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

東京湾の盤州、富津干潟では健全な個体群が維持されているが、元々の個体群であるか否かは検討を要する(木村・山下, 2012)。

名古屋港浚渫地の半化石(河合・蜂矢, 1999)や愛知県田原市高松の更新統(川瀬, 2013)からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.
 河合秀高・蜂矢喜一郎, 1999. 名古屋港浚渫地(金城埠頭)産貝類化石(2)巻貝(その1). 化石の友, (46):20-25.
 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一・山下博由, 2012. イボキサゴ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.17. 東海大学出版会, 秦野.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.



イボキサゴ
静岡県浜名湖、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 タニシ科>

マルタニシ *Cinpaludina chinensis laeta* (Martens, 1860)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は、海に近い平野部の水田や用水路などにかつては食用にするほど多産し、最も親しみのある淡水貝であった(紀平, 1990)。近年では水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化のため生息地、生息数とも著しく減少した。木村(1994)では、5地点のみで生息が確認されたにすぎず、そのいずれでも生息数が少ない。名古屋市内では守山区志段味地区で1990年頃まで生息記録があるが(酒井, 2002)、その後は生貝を確認できず絶滅した可能性が高かった。しかし、2013年に中川区から再発見された(川瀬・石黒, 2015)。

【形態】

成貝では殻高6cmに達するが、通常3~4cm程度。各螺層は丸く膨れ、縫合は深くくびれる。殻は薄く壊れやすい。殻の表面に縫い跡のような微小なくぼみの列がある。蓋は革質で赤褐色。

【分布の概要】

【市内の分布】

期待された北区、守山区の水田(酒井, 2002)では確認できず、中川区の水田から発見された(川瀬・石黒, 2015)。

【県内の分布】

知多半島先端部の休耕田、新城市や豊田市の特定地域の水田や水路に生息している。

【国内の分布】

北海道南部~九州、沖縄諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境/生態的特性】

かつての水田に多産したため、水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化などの影響の少ない水田を含めた低湿地には、現在も比較的多くの個体が生息する。

【現在の生息状況/減少の要因】

上述したような生息地がほとんど残されていない。

【保全上の留意点】

護岸工事、用水路の改修、農薬散布には注意が必要である。水田などの低湿地の保全とその水質の保全が必要である。

【特記事項】

市内では10年或いは20年ぶりにマルタニシが再発見されたが(川瀬・石黒, 2015)、発見された中川区江松西町・富田町では個体数が極めて少なく、大量のヒメタニシと混生していた。

【引用文献】

- 川瀬基弘・石黒鏞三, 2015. 名古屋市内で再発見されたマルタニシ. なごやの生物多様性, 2:33-34.
- 紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.
- 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
- 酒井 類, 2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた, (28):15-17.

【関連文献】

- 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.
- 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか編, 新城市の自然誌-虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
- 高柳菜友子, 2014. 矢作川上中流域に生息する淡水産貝類. 矢作川研究, (18):5-11.



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 エゾマメタニシ科>

マメタニシ *Parafossarulus mauchuricus japonicus* (Pilsbry, 1901)

【選定理由】

本種は、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布しているが、生息場所は狭く限定されている。小型種のためか生息情報は少ない。木村(1994)では、愛知県下の1地点のみで生息が確認されたにすぎないが、元々生息地が少なかった可能性も否定できない。市内では中区名城濠、昭和区鶴舞公園、中川区松葉公園で多産したと報告されているが(愛知県科学教育センター, 1967)、現在これらの地点では生息を確認できず市内から絶滅した可能性も高い。

【形態】

成貝では殻高1cmに達する。殻は細長く、各螺層はやや膨れ、数条の強い螺肋がある。縫合は深くくびれる。殻質は薄く半透明。蓋は石灰質で表面は白色。

【分布の概要】

【市内の分布】

名城濠、鶴舞公園、松葉公園(愛知県科学教育センター, 1967)での記録があるが、現在これらの3地点では生息を確認できない。

【県内の分布】

豊橋牛川町の豊川水系用水路(木村, 1994)、須ヶ口、立田、弥富(田中, 1959)。

【国内の分布】

北関東以西の本州、四国、九州。日本固有亜種。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境/生態的特性】

本種は平野部の水田や用水路、小河川などに広く分布するが、生息場所は狭く限定的である。水の流れのほとんどない水草のよく茂った場所に生息することが多い。近年の水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などのため、生息地、生息数とも著しく減少したと考えられるが、元々生息地が少なかった可能性も否定できない。

【現在の生息状況/減少の要因】

2012~14年の市内の水田や溜池調査では本種を確認できなかった。名古屋市内では既に絶滅している可能性が極めて高い。

【保全上の留意点】

護岸工事、用水路の改修、農薬散布には注意が必要である。
小河川、用水路そのものとその水質の保全が必要である。

【引用文献】

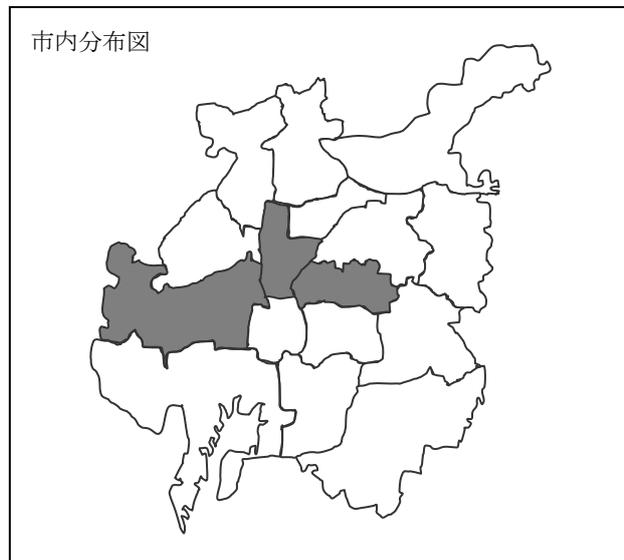
愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
田中守彦, 1959. 愛知県産淡水貝目録, 14pp, (謄写).

【関連文献】

紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.
紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.
増田 修, 2005. マメタニシ. 環境省(編). 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 6 陸・淡水産貝類, p. 317. 自然環境研究センター, 東京.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



貝類

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 サザナミツボ科>

サザナミツボ *Elachisime ziczac* Fukuda et Ekawa, 1997

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	絶滅危惧 I B類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は最近記載された微小種で内湾奥に生息することが知られている (Fukuda and Ekawa, 1997)。軟体部の残った個体が海岸に打ち上げられて、三河湾、伊勢湾の4ヶ所から複数採集されていたが (田中・河合, 1998; 河合, 1998)、愛知県内で生きた個体が採集された記録はなかった。今回、名古屋市内の庄内川河口域より少数ながら生きた個体が採集された。泥質干潟上の転石の下面に生息していた。生息範囲も非常に狭く、護岸工事等の改変で容易に生息場所が消失してしまう可能性が高い。本種は微小種で最近記載されたことなどから、打ち上げられた死殻に関する情報も非常に少ない (田中・河合, 1998; 河合, 1998)。和田ほか (1996) では、希少とランクされている。

【形態】

殻長約 2mm 微小な卵型の貝。殻は光沢のあるガラス質。殻表にジグザグの螺溝を多数めぐらすことが特徴である。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口域。

【県内の分布】

南知多町内海、美浜町布土。

【国内の分布】

宮城県亘理郡鳥の海 (鈴木ほか, 2009)、浜名湖、三河湾、伊勢湾、的矢湾、瀬戸内海、玄界灘など、陸奥湾、男鹿半島～南西諸島 (奄美大島、沖縄島)。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は河口域の特殊な生息環境に生息し、生息場所も限定的で狭い。生息場所自体も護岸工事や埋め立てなどで容易に改変もしくは消失する可能性の高い場所である。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、河口域の護岸工事では河口側の改変を伴わないように留意することが必要である。また内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

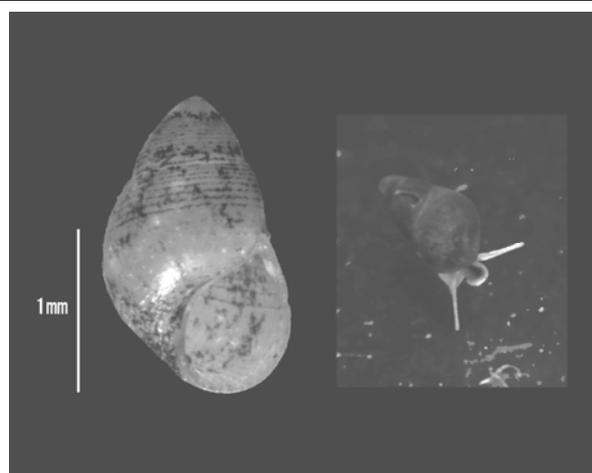
レッドデータブックなごや2010が本種の愛知県初の生きた個体の採集記録である。

【引用文献】

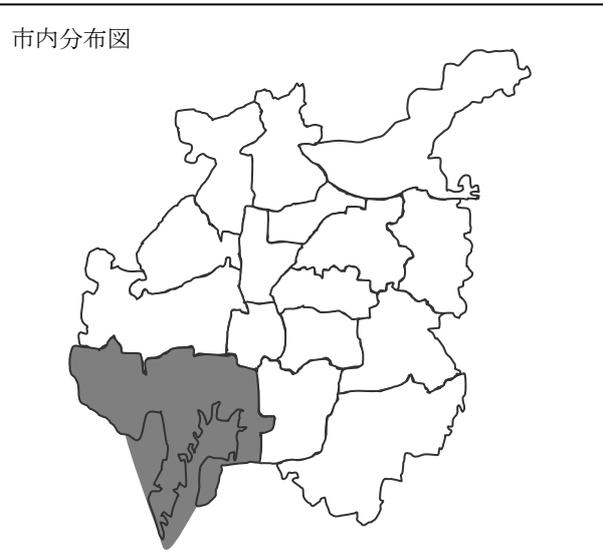
Fukuda, H. and K. Ekawa, 1997. Description and anatomy of a new species of the Elachisinidae (Caenogastropoda: Rissosoidea) from Japan. *The Yuriyagai*, 5(1/2):69-88.
 河合秀高, 1998. 内湾性稀少種サザナミツボの新産地. *かきつばた*, (24):16-17.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子, 2009. 干潟生物調査ガイドブック～東日本編～, 120pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.
 田中利雄・河合秀高, 1998. 愛知県渥美半島西ノ浜の打上げ貝. *豊橋市自然史博物館研究報告*, (8):33-36.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. *WWF Japan Science Report 3*, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

福田 宏, 2012. サザナミツボ. *日本ペントス学会 (編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑*, p.40. 東海大学出版会, 秦野.



サザナミツボ
庄内川河口域、2008年7月13日、木村昭一 撮影



市内分布図

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 カワザンショウガイ科>

ヨシダカワザンショウ *Angustassiminea yoshidayukioi* Kuroda, 1959

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地とそれより上部の陸上植生にかけて分布する。ヨシ原湿地やその上部へ連続する陸上植生は護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。市内でも特にヨシ原湿地の陸上に近い部分は堤防工事などによる生息地の破壊が進行しており、庄内川河口域の非常に狭い範囲でわずかに本種の生息が確認されたにすぎない。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻高約 3mm の微小種。カワザンショウガイ科は小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は貝殻の光沢が強いこと、肉眼ではわかりにくい、臍孔が狭いが明らかに開いている点で、市内に生息するカワザンショウガイ科他種と区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口域のヨシ原湿地に分布する。

【県内の分布】

上述したように県内での生息場所は著しく減少したと考えられる。木村・木村(1999)では7ヶ所生息地があった。カワザンショウガイ科貝類は生息地には群生する 경우가多いが、本種の個体数はどの生息地でも少ない。

【国内の分布】

東京湾～九州にかけて分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生にかけての落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

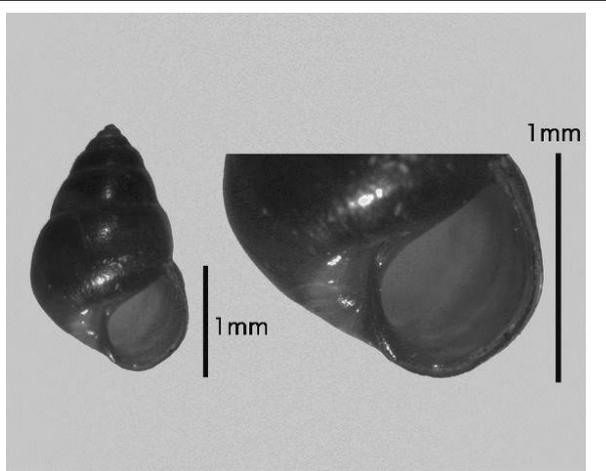
もはや名古屋市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える(早瀬ほか, 2014)。

【引用文献】

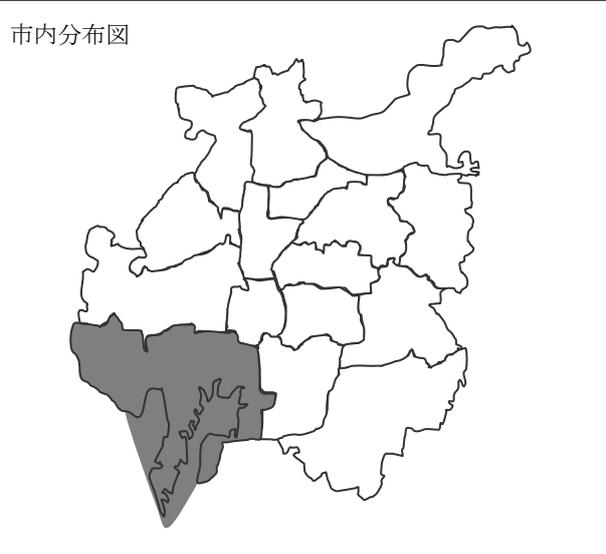
早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

福田 宏, 2012. ヨシダカワザンショウ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.46. 東海大学出版会, 秦野.
 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp, 東海大学出版会, 秦野.



ヨシダカワザンショウ
 庄内川河口域, 2009年9月18日, 木村昭一 撮影



市内分布図

貝類

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 ウミニナ科>

ウミニナ *Batillaria multiformis* (Lischke, 1869)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種の属するウミニナ科貝類は、愛知県にホソウミニナ、ウミニナ、イボウミニナの3種があり、ともに内湾の泥干潟の表면에生息している。東京湾や三浦半島では、ホソウミニナ以外の2種に著しい減少傾向が認められる(木村・福田, 2012; 黒住, 2000; 池田ほか, 2001)。愛知県でも干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。愛知県下では、まだ健全な個体群が残されている場所があるが、名古屋市内では藤前干潟で死殻がわずかに採集されるに過ぎない。

【形態】

殻高3cm 殻径1cm程度の塔型で殻は厚く、よく成長した個体の殻口は肥厚し、内唇の滑層は肥厚する。ホソウミニナに似るが殻が太く、内唇の滑層が肥厚する点で区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟で死殻がわずかに採集されるに過ぎなく、近年生貝が全く採集されず、絶滅した可能性が高い。

【県内の分布】

汐川干潟、東幡豆、福江、吉良、矢作川河口など10ヶ所程度。

【国内の分布】

北海道南部～九州まで。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”を参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。また、生息場所が直接改変されなくても減少する例が確認されており(黒住, 2000; 池田ほか, 2001) 注意を要する。

【保全上の留意点】

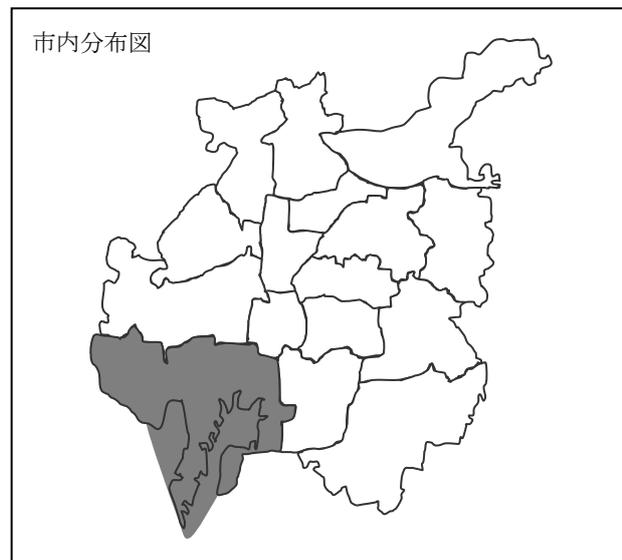
泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【引用文献】

- 池田等・倉持卓司・渡辺政美, 2001. 相模湾レッドデーター貝類一, 104pp. 葉山しおさい博物館, 神奈川.
- 木村昭一・福田 宏, 2012. ウミニナ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.31. 東海大学出版会, 秦野.
- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相, 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
- 水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(II), 131pp.
- 黒住耐二, 2000. 貝類. 千葉県の上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—動物編, pp.359-399. 千葉県環境部自然保護課.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

- 早瀬善正ほか, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, 32:11-33.



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 ウミニナ科>

イボウミニナ *Batillaria zonalis* (Bruguiere, 1792)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて日本各地の内湾域にごく普通に棲息していたが、浜名湖、伊勢湾では少数の死殻は見られるが現在生息が確認できず、三河湾でも汐川干潟の狭い範囲に生息が確認できるに過ぎない(木村・福田, 2012)。本種はウミニナと比べても著しく生息地が少なく、近年生息数が減少している。和田ほか(1996)では、絶滅寸前(日本本土)とランクされている。名古屋市では藤前干潟や庄内川河口で古い死殻が稀に採集されるに過ぎない。

【形態】

殻高約4cm、殻径約1cmの高い塔型で殻は厚く、螺層にやや強い肋を持つ。殻口外唇が湾入する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

藤前干潟で古い死殻が稀に採集されるに過ぎない。近年、市内では生貝が全く採集されず、絶滅した可能性が高い。

【県内の分布】

汐川干潟では、まだ健全な個体群が存在する。また、愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、死殻は多くの干潟で確認される。

【国内の分布】

北海道南部～琉球列島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、インド、太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように泥干潟の表面に生息するが、ウミニナ科3種(ウミニナ、イボウミニナ、ホソウミニナ)の中では最も干潟の先端部(沖合の部分)に分布し、ヨシ原湿地周辺の干潟の陸地に近い部分には生息しない(木村・木村, 1999)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような泥干潟が、護岸工事などで失われ生息地が減少している。また、生息場所が直接改変されない場合でも、生貝が見られなくなってしまう場所も多い。

【保全上の留意点】

泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【引用文献】

- 木村昭一・福田 宏, 2012. イボウミニナ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.31. 東海大学出版会, 秦野.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

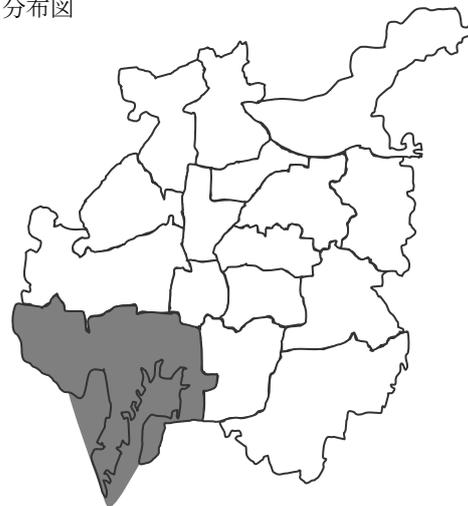
【関連文献】

- 藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.
 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.



イボウミニナ
三重県紀伊長島町、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 フトヘナタリ科>

ヘナタリ *Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata* (Gmelin, 1791)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。名古屋市では、藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎない。

【形態】

殻高約3cmの塔型で、体層は幅広く、強い縦張肋がある。よく成長した個体の殻口は肥厚し、外唇は下部が水管部へのびる。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎない。生息が確認できなく、絶滅した可能性も高い。

【県内の分布】

汐川干潟では大きな個体群が残されている。県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在7ヶ所である。生息場所では群生し、個体数は多い。

【国内の分布】

房総半島北長門海岸～南西諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、インド、西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥部の河口汽水域砂泥底の中・低潮帯表層を匍匐する(福田・木村, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地やそれより下部の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

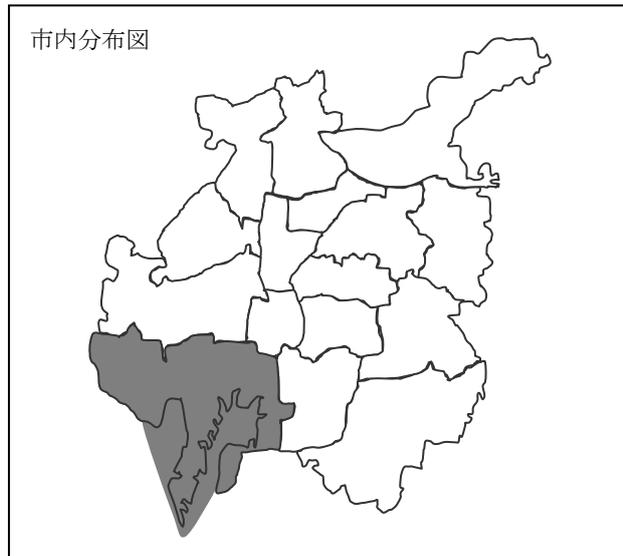
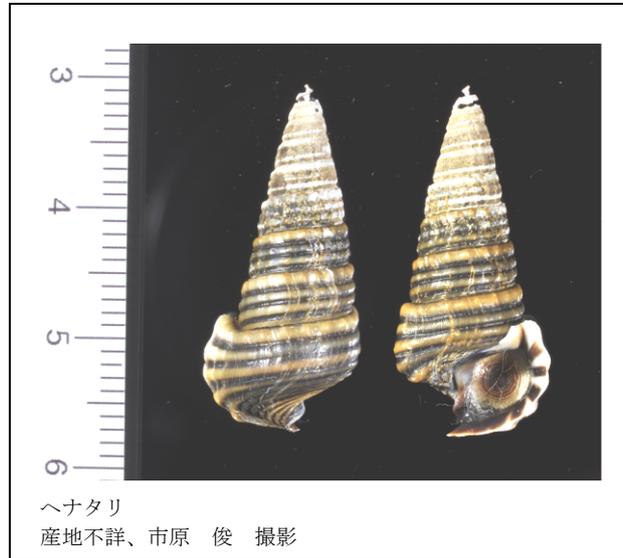
名古屋市南区鶴里周辺の完新統(蜂矢・田中, 1998)、愛知県刈谷市港町と城町の完新統(矢野ほか, 2010)からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

福田 宏・木村昭一, 2012. ヘナタリ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.29, 東海大学出版会, 秦野.
 蜂矢喜一郎・田中利雄, 1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
 矢野一生・田中利雄・牧口貴久, 2010. 愛知県三河地方境川水系の護岸工事に伴って産出した完新世化石. 化石の友, (55):26-36.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.
 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘, 2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物, 3:9-49. 西三河野生生物研究会.



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 フトヘナタリ科>

カワアイ *Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis* (K. Martin, 1899)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて各地の内湾域にごく普通に生息していたが、各地で激減し、三河湾では汐川干潟の狭い範囲で生息が確認できるに過ぎない(木村・福田, 2012)。愛知県下で最も干潟環境が保全さ

れている汐川干潟でも個体数の著しい減少がみられる(藤岡・木村, 2000)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。名古屋市内では藤前干潟で古い死殻が稀に見つかる。

【形態】

殻高約3cmの塔型で、よく成長した個体の殻口は肥厚し、ヘナタリと近似しているが、外唇の下部は水管部へ延びることはない。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎず、生息が確認できない。絶滅した可能性が高い。

【県内の分布】

木村・木村(1999)では7ヶ所の生息地があったが、汐川干潟でも激減しており2001年8月の調査では3個体しか生息を確認できていない。県内でも絶滅寸前と考えられる。

【国内の分布】

東京湾(絶滅)以南～琉球列島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、インド、太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

県下では、ヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。ヘナタリと同所的に分布しているが、本種は著しく個体数が減少している。

【現在の生息状況／減少の要因】

ヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が、護岸工事などで失われ生息地が減少している。生息場所が新たに改変されていない場所でも個体数が著しく減少しているが、原因は不明である。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、ホソウミニナ、イボウミニナ、ヘナタリなどとともに、本種の化石が発見されている(川瀬, 2013)。

【引用文献】

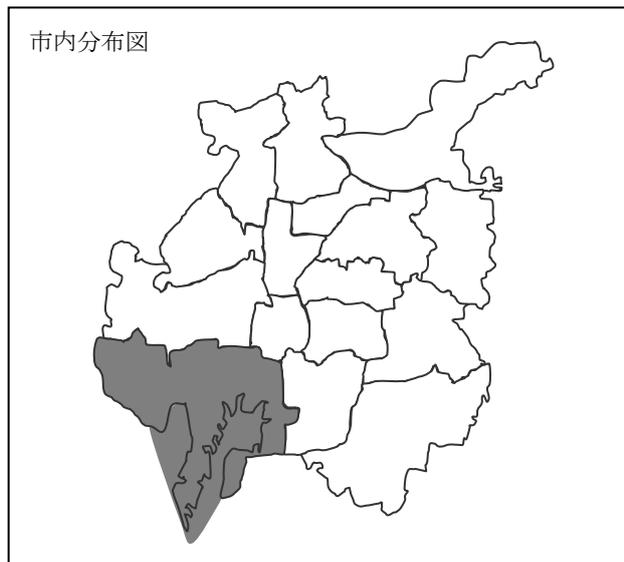
藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.
 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)〜鶴飼修司コレクションの貝類化石〜. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一・福田 宏, 2012. カワアイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.30. 東海大学出版会, 秦野.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.



カワアイ
岡山県、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆 者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <異旋目 タクミナ科>

タクミナ *Eucharilda sinensis* (Fischer, 1867)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	絶滅危惧 I A類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。県内で本種は日間賀島南沖水深 2m から 10m の砂泥底より、死殻がわずかに採集されているが、生貝は採集されていない(木村, 1996)。2008、2009 年に行った調査で名古屋港沖合の泥底より新鮮な死殻が少数採集された。和田ほか(1996)では、現状不明(絶滅寸前)とランクされている。

【形態】

殻高約 1cm、淡褐色、細長い円錐型の貝。螺層の周辺には強く角張った螺肋が 4 本並ぶ。縫合部分は深くくびれる。肋間には規則的な縦肋が並ぶ。

【分布の概要】

【市内の分布】

金城ふ頭造成時(1970年代)にサンドポンプによって新鮮な死殻が採集され(河合, 2009)、2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合からも死殻がわずかに採集された。

【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されておらず、死殻も稀産。

【世界及び国内の分布】

房総半島以南に分布する。

【世界及び国内の分布】

中国大陸沿岸、熱帯インド、西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では、近年生貝を採集できない。死殻でさえ稀であり、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

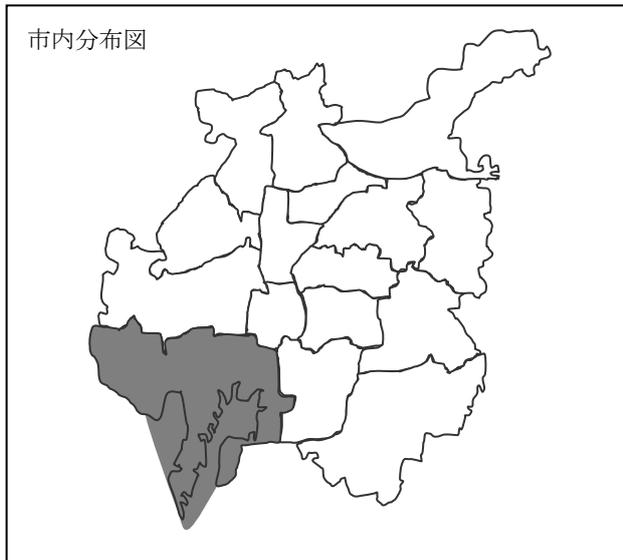
名古屋港浚渫地の半化石(河合, 2000)や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群(川瀬, 2013)からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

河合秀高, 2000. 名古屋港浚渫地(金城埠頭)産貝類化石(3)巻貝(その2). 化石の友, (47):46-49.
 河合秀高, 2009. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝. かきつばた, (34):20.
 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.



(執筆 者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <異旋目 イソチドリガイ科>

イソチドリ *Amathina tricarinata* (Linnaeus, 1767)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地に棲む二枚貝類（タイラギ、イタボガキ）に外部寄生する。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。県内では本種は、日間賀島南沖水深 2~10m の砂泥底より、死殻がわずかに採集されているが、生貝は採集されていない（木村, 1996）。2008、2009 年に行った調査で名古屋港沖合の泥底より殻皮の残った新鮮な死殻が少数採集された。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻長約 1.5cm。殻頂の巻いた笠型の貝。殻頂部から前縁部にかけて 3 本の強い明瞭な肋が走る。殻は白色であるが、黄褐色の厚い殻皮に覆われる。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合からも死殻がわずかに採集された。

【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていなく、殻皮の残った比較的新鮮な死殻が日間賀島南沖より数個体採集されたにすぎない。

【世界及び国内の分布】

房総半島以南。

【世界及び国内の分布】

インド、西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では、近年生貝を採集できない。宿主であるタイラギ、イタボガキも著しく減少しているため、危機的な生息状況といえる。近年採集されるタイラギの殻上には移入種のシマメノウフネガイの大型個体が多数付着しているため、種間競争の結果、同じ様な場所を生息場所とする、イソチドリが減少した可能性がある。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

フィリピンなど南方に生息する個体と日本産個体では貝殻の形態に差異があり、同種か否か検討を要する。愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬, 2013）。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

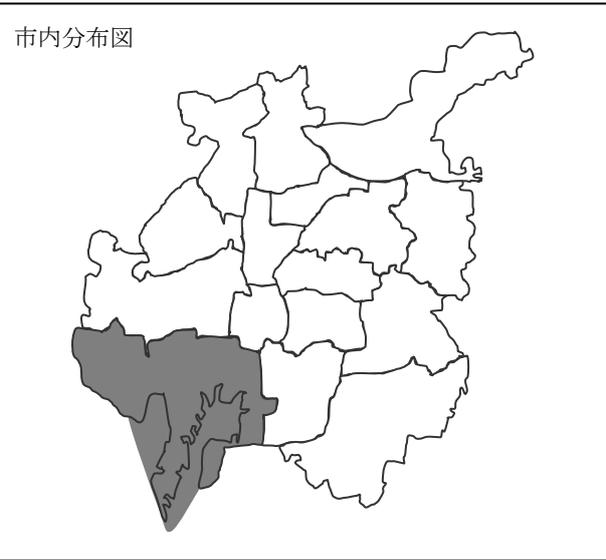
奥谷喬司（編）, 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	絶滅危惧 I A類
環境省2014	絶滅危惧 I 類



イソチドリ
中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊 撮影



市内分布図

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 オカミミガイ科>

キヌカツギハマシイノミガイ *Melampus (Melampus) sincaporensis* Pfeiffer, 1855

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に分布する。愛知県ではヨシ原湿地が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。健全な個体群は汝川干潟と新堀川河口でのみ保存されている(木村・木村, 2002)。名古屋市内では庄内川河口域で早瀬(1998)によって生息が確認されたが、それ以後生息が確認できない。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻高約1cm。殻は卵形で殻表は褐色の殻皮で覆われる。殻には褐色から黒色の色帯があり、その幅や本数は個体によって異なる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口域で早瀬(1998)により2個体生息が確認されたが、それ以後生息が確認できない。この生息地での絶滅が危惧される。

【県内の分布】

三河湾の汝川干潟と新堀川河口の2ヶ所で確認された(木村・木村, 2002)。愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられるが、矢作川河口域から新たに記録されている(木村, 2012)。

【国内の分布】

三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘、有明海、八代海(日本ベントス学会, 2012)。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、シンガポール。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥部の河口域に発達したヨシ原湿地内の高潮帯の泥上、朽ち木表面や落葉の下に生息する。健全な個体群の生息地はヨシ原から連続する陸上植物も残されている場合が多い(日本ベントス学会, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

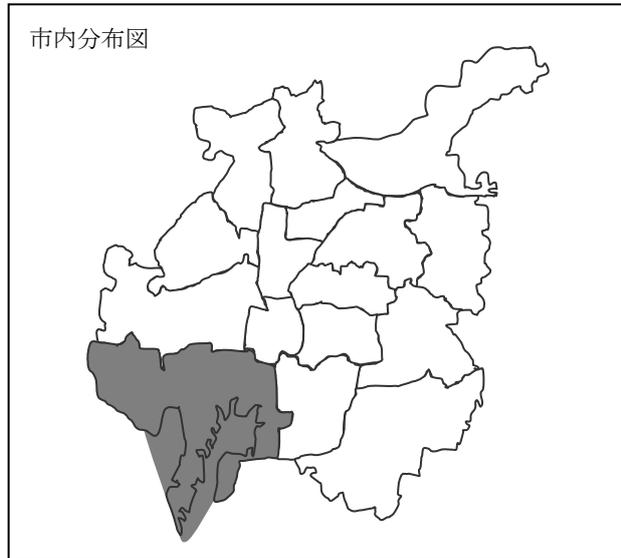
ヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全する必要がある。

【特記事項】

三浦半島で絶滅したため、現在では三河湾が本種の分布域の東限である(日本ベントス学会, 2012)。

【引用文献】

早瀬善正, 1998. キヌカツギハマシイノミガイ庄内川河口に生息。かきつばた, (24):12.
 木村昭一, 2012. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相。三河生物, 3:1-8, 2pls. 西三河野生生物研究会。
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相。日本ベントス学会誌, 54:44-56。
 木村昭一・木村妙子, 2002. 新堀川河口塩性湿地の貝類相。かきつばた, (28):13-14。
 日本ベントス学会(編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック, 284pp. 東海大学出版会, 秦野。
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状。WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京。



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 オカミミガイ科>

オカミミガイ *Ellobium chinense* (Pfeiffer, 1855)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に分布する。本県だけではなく全国的にヨシ原湿地が護岸工事や埋め立て等で著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。県内では健全な個体群は汐川干潟でのみ保存されている。市内では1932年に採集された熱田区産の標本が現存しているが、2009年の調査で再発見されるまで、長年にわたって生息が確認されていなかった。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻高約3.5cm、殻径約1.5cm。殻は卵形で殻表は褐色の殻皮で覆われる。殻口は白く肥厚し、耳状を呈する。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口域のヨシ原湿地。

【県内の分布】

木村・木村(1999)では3ヶ所で生息を確認し、その後新たに2ヶ所で生息を確認した(木村, 1999)。しかし、汐川干潟以外では絶滅が危惧される。2002年に渥美半島三河湾流入河川河口部で生息地を確認したが生息数は非常に少なかった(木村・木村, 2002)。

【国内の分布】

三河湾～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地内の朽ち木や落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と連続する上部の陸上植生を破壊しない。

【特記事項】

東京湾から三浦半島の個体群は絶滅し、本県は現在の分布の東限である。

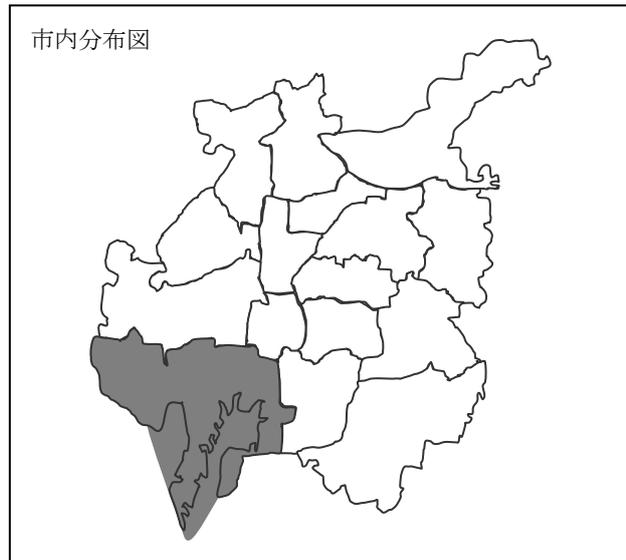
Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ433-14、登録標本の採集地: 庄内川河口ヨシ原湿地。

【引用文献】

木村昭一, 1999. 佐奈川河口域観察会報告. かきつばた, (25):14-17.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 木村昭一・木村妙子, 2002. 新堀川河口塩性湿地の貝類相, かきつばた, (28):13-14.
 水産資源保護協会, 1997. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅳ), 126pp.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類5種. かきつばた, (39):31-36.
 木村昭一, 2012. オカミミガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.95. 東海大学出版会, 秦野.



貝類

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 オカミミガイ科>

ナラビオカミミガイ *Auriculastra duplicata* (Pfeiffer, 1854)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

2013年に名古屋市から初めて発見された種で(早瀬ほか, 2014)、名古屋市内でオカミミガイの生息地として唯一知られている狭い範囲のヨシ原湿地内で発見された。本種は三河湾を分布の東限域とし、三河湾、伊勢湾ではオカミミガイより生息地、個体数ともに著しく少ない。本調査の確認個体は主に幼若個体であったことから、当地の個体群は近年になって新規加入した個体のみで形成されている可能性もある。国内全域においても本種が定着できる環境は減少傾向にあり、都市化の進んだ名古屋市内に本種の定着可能な環境がcaろうじて残されている。

【形態】

殻長 9mm 前後。短い紡錘形、厚質、臍孔は閉じ、縫帯はない。螺層はドーム状。縫合は波打ったようになる。殻皮は光沢のある緑褐色で、平滑。外唇はほとんど肥厚しない。内唇に1歯、軸唇に強い2歯をもつ。オカミミガイの幼貝に似るが、本種の縫合下は成長線だけで平滑であるのに対して、オカミミガイの幼貝では小顆粒列がある。

【分布の概要】

- 【市内の分布】
庄内川河口のヨシ原湿地の転石下。
- 【県内の分布】
矢作川河口域、汐川河口域。
- 【国内の分布】
三河湾～九州。
- 【世界の分布】
中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

庄内川河口部に見られるヨシ原湿地の埋れ石下より確認された。埋没石の周囲に地下茎が伸び僅かな空間を形成するマイクロハビタットにおいて生息が確認された。

【現在の生息状況／減少の要因】

当地の個体群は近年になって新たに侵入した個体のみで形成されている可能性があるものの、市内のヨシ原湿地は堤防工事により減少しており、本種の生息地の破壊が原因。

【保全上の留意点】

名古屋市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える(早瀬ほか, 2014)。

【引用文献】

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.

【関連文献】

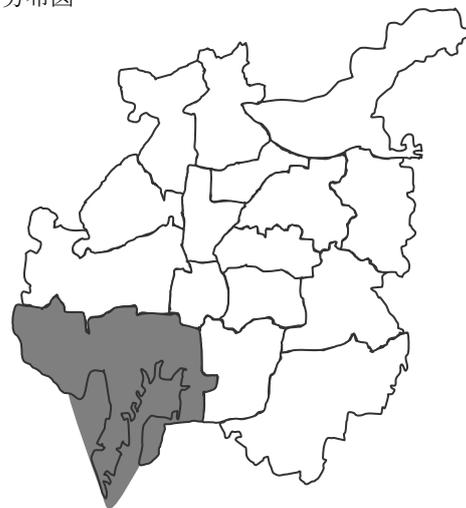
木村昭一, 2010. コラム: 庄内川河口のヨシ原湿地の貝類とその保全. 生き物から見た名古屋の自然 なごやの環境指標種 100 (改訂版), pp.102-103. 三菱 UFJ 環境財団, 東京.
木村昭一, 2012. ナラビオカミミガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.92. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 川瀬基弘)



ナラビオカミミガイ
港区庄内川河口、2013年4月27日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <イシガイ目 イシガイ科>

タガイ *Anodonta japonica* Clessin, 1874

【選定理由】

紀平ほか (2003) では、ドブガイ *Anodonta woodiana* にはドブガイ型、ヌマガイ型、タガイ型の 3 型があるとされており、レッドデータブックなごやではドブガイ *Anodonta woodiana* として扱われてきた (名古屋市動植物実態調査検討会, 2004)。しかし最近の研究ではドブガイは、タガイ *Anodonta japonica* とヌマガイ *Anodonta lauta* の 2 種に分けられている (近藤, 2008)。2009 年より名古屋市内の主要な溜池を調査したところ、生息が確認された大型二枚貝は全てヌマガイであり、タガイは死殻すら確認できなかった (川瀬, 2010; 川瀬・野呂, 2013 など)。名古屋市内にはタガイとしての古い記録があるが (愛知県教育センター, 1967)、現在では死殻すら見つからないので市内からは絶滅した可能性も否定できない。

【形態】

殻が長卵形で膨らみが弱く、中型で通常の殻長は 10cm を超えない。殻表は黒褐色で、殻頂付近には同心円状の皺がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区野並橋、緑区鳴子池、千種区東山新池、千種区法生池、西区中小田井、中区名城濠、昭和区鶴舞公園、中川区富田町伏屋など (愛知県教育センター, 1967)。

【県内の分布】

豊田市や新城市の溜池や水路 (川瀬ほか, 2011; 川瀬, 2014)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布し、溜池や用水路の砂泥～泥底に生息する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

溜池や用水路の砂泥～泥底に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】” 参照。

【保全上の留意点】

本種が生き残っている可能性のある溜池を保全することが不可欠。

【特記事項】

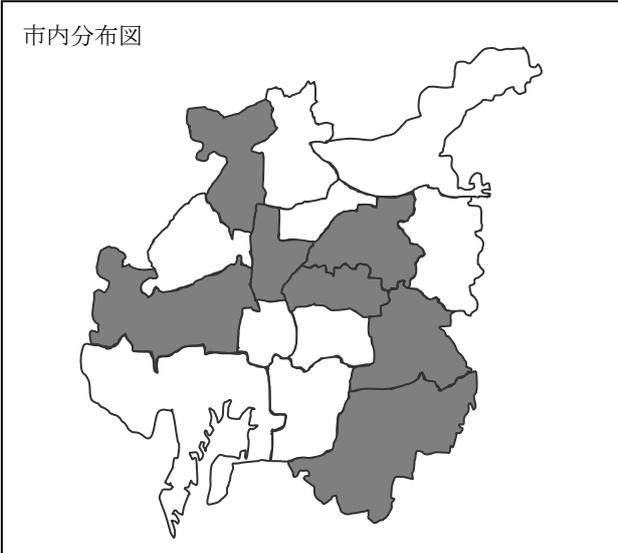
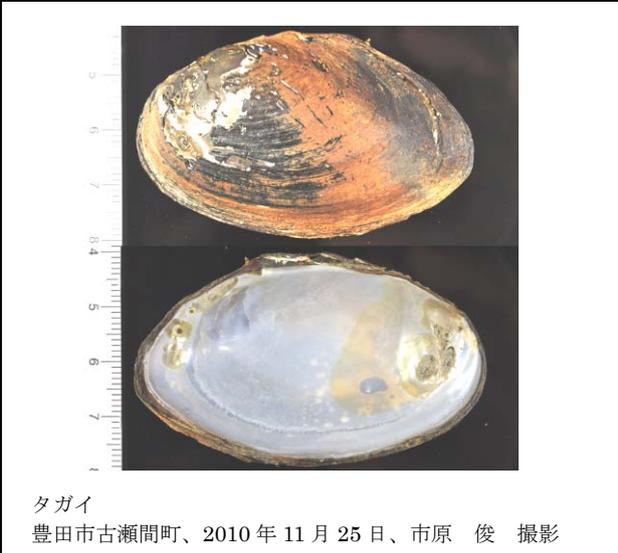
DNA 分析の結果、タガイとヌマガイを別種として区別した (川瀬・森山, 未発表)。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 川瀬基弘, 2010. 3 貝類. なごやため池生きもの生き生き事業報告書, pp.69-72. 名古屋ため池生物多様性保全協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか (編), 新城市の自然誌—昆虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, 48:9-16.
 川瀬基弘・野呂達哉, 2013. 名古屋市におけるヌマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた, (38):56.
 紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.
 近藤高貴, 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第 3 号, 69 pp, 日本貝類学会, 東京.
 名古屋市動植物実態調査検討会監修, 2004. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2004 — 動物編一, 368pp. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室, 名古屋.

カテゴリー

名古屋市 2015	絶滅危惧 I A 類
愛知県 2015	準絶滅危惧
環境省 2014	リスト外



(執筆 者 川瀬基弘)

貝類

貝類 <イシガイ目 イシガイ科>

イシガイ *Unio douglasiae nipponensis* (Martens, 1877)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。愛知県下ではこのような場所はほとんど失われてしまったため、1960年代には広い分布をもち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。

【形態】

中型で通常、殻長6cm程度であるが、湖沼産の個体は大型になる傾向がある。殻長に比べて殻高が小さく輪郭は細長い方形。殻長部分には弱いさざ波状の彫刻がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

北区、守山区に限られた場所に生息していたが(酒井, 2002)、本調査では溜池、河川、水路ともに発見出来ず絶滅寸前である。

【県内の分布】

1960年代中頃までは日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されている(愛知県科学教育センター, 1967)。木村(1994)や川瀬ほか(2011)には矢作川水系や豊田市内の溜池での確認記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥底で水質の良い環境を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は失われており絶滅が危惧される。

【保全上の留意点】

水質を保全し、護岸工事には注意が必要である。イシガイ科貝類は、グロキジウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できないため、他の淡水生物を含む生息環境全体の保全が必要である。

【特記事項】

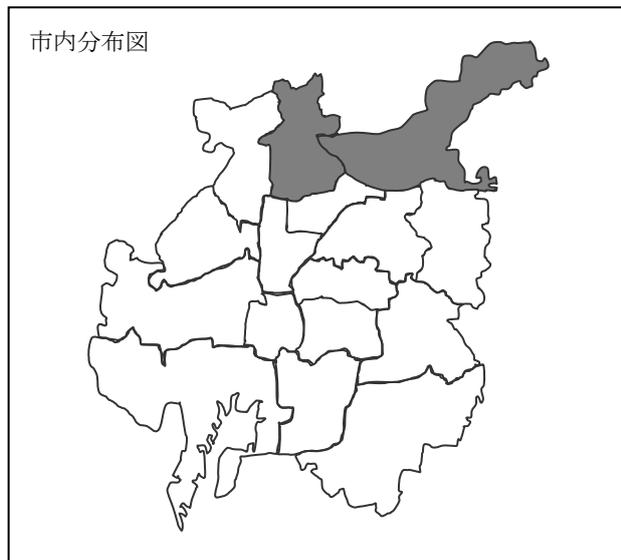
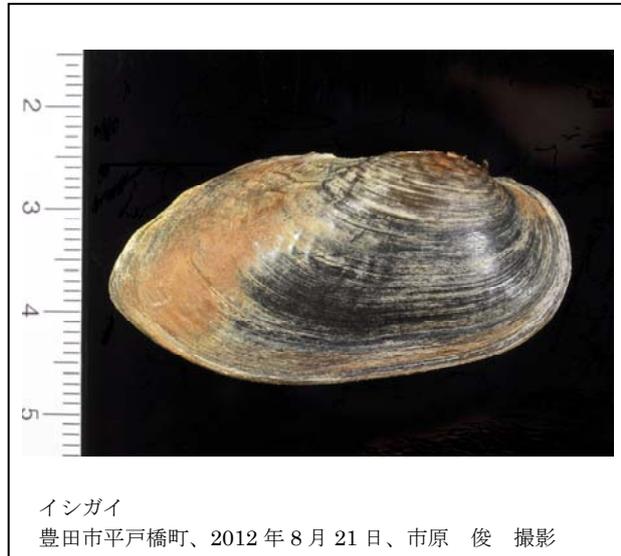
市内での生息が期待された守山区、北区の溜池では発見できなかった。また、市内でヌマガイが生息する溜池(川瀬・野呂, 2013)においても本種を発見できなかった。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.
 川瀬基弘・野呂達哉, 2013. 名古屋市におけるヌマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた, (38):56.
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究集報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
 酒井 類, 2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた, (28):15-17.

【関連文献】

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.
 高柳茉友子, 2014. 矢作川上中流域に生息する淡水産貝類. 矢作川研究, (18):5-11.



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 カワホトトギスガイ科>

マゴコロガイ *Peregrinamor oshimai* Shoji, 1938

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	絶滅危惧 I A類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は河口域の干潟から潮下帯の砂泥底に生息するアナジャコ類の頭胸部腹面に足糸で付着する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。このような状況から本種も明らかに生息場所、生息数とも激減していると考えられる。本種はすでに三重県側の伊勢湾からは生息記録があるが（木村・山本, 1990）、愛知県ではレッドデータブックなごや2010が初記録である。和田ほか（1996）では、絶滅寸前とランクされている。

【形態】

貝殻は両殻を合わせて背面から見るとハート型で、和名はその外形および付着部位になむ（庄司, 1938）。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約6mの泥底に生息していたアナジャコ類の頭胸部腹面に付着した1個体のみが採集された。藤前干潟にもアナジャコ類は多産するが、今まで本種が採集された記録はない。

【県内の分布】

上述の名古屋市内の記録のみである。

【国内の分布】

模式産地は東京湾で（庄司, 1938）、伊勢湾、瀬戸内海、九州の内湾域に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

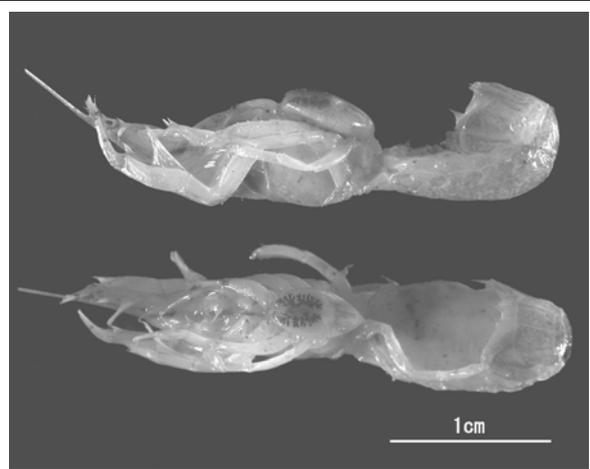
東京湾からは原記載（庄司, 1938）以来採集記録はなく、名古屋市が現在知られている分布の東限である。

【引用文献】

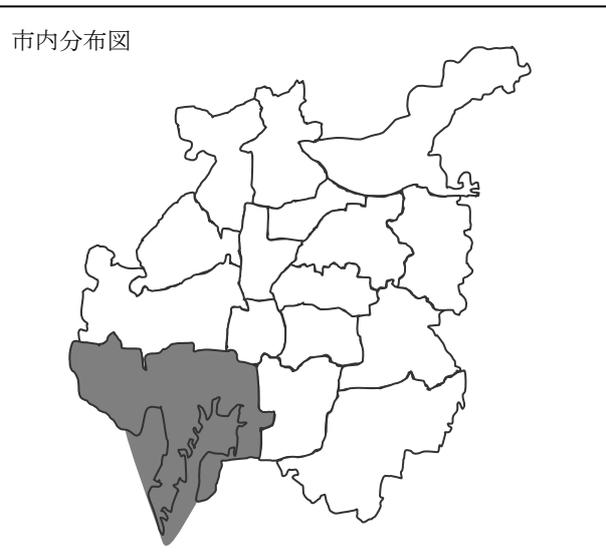
木村昭一・山本妙子, 1990. マゴコロガイを伊勢湾で採集. ちりぼたん, 21(1/2):12-13.
 庄司幸八, 1938. 珍しい共棲二枚貝マゴコロ貝. Venus, 8(3/4):119-127.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

木村昭一・山下博由, 2012. マゴコロガイ. 日本ベントス学会（編）. 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.162. 東海大学出版会, 秦野.
 奥谷喬司（編）, 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 佐藤正典（編）, 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック～全国版（南西諸島を除く）～, 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.



マゴコロガイ
 名古屋港沖水深6m、2008年10月9日、木村昭一 撮影



市内分布図

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 ツキガイ科>

イセシラガイ *Anodonta bialata* (Pilsbry, 1895)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に深く潜って生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化してきて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻が少数採集されるものの、近年生貝の採集記録がなかったが(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)、2008年に名古屋港沖で行ったドレッジ調査で生貝2個体が採集された。和田ほか(1996)では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長約5cmで球形に両殻共によく膨れる。殻は薄く脆い。殻は黄白色であるが、生きている時や新鮮な死殻には茶褐色の薄い殻皮がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約6mの泥底より幼貝ではあるが生きた個体が2個体採集された。

【県内の分布】

上述したように、名古屋港以外では現在生息が確認できない。

【国内の分布】

北海道南部～沖縄。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、アンダマン海、インド。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統(蜂矢・田中, 1998)、愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群(川瀬, 2013)からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

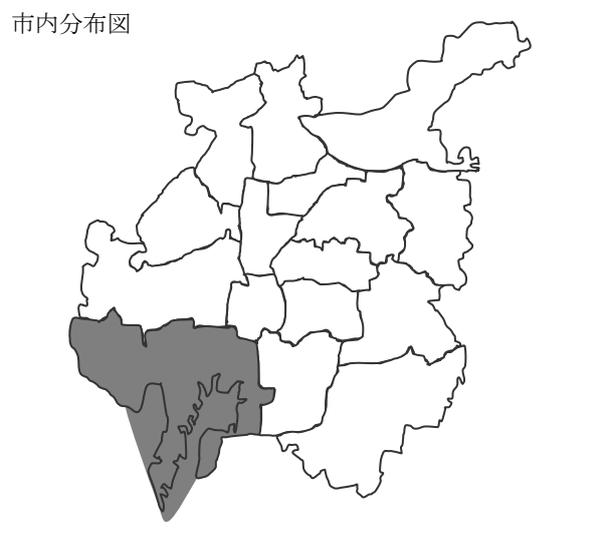
蜂矢喜一郎・田中利雄, 1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
 中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 山下博由, 2012. イセシラガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.116. 東海大学出版会, 秦野.



イセシラガイ
 熊本県天草市, 2009年4月、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 バカガイ科>

ヤチヨノハナガイ *Raeta pellicula* (Deshayes, 1854)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	絶滅危惧 I A類
環境省2014	絶滅危惧 I 類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖で死殻が採集されたが、生貝は採集されない(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。和田ほか(1996)では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長約4cmで殻は白色で薄くやや膨らみ、殻皮は光沢が強い。前縁は丸く、後縁は狭く裁断状。内湾の貧酸素層の発達する海底に多産するチヨノハナガイと近似するが、本種は殻が大型で、輪肋が多く密で、光沢が強いので、区別は明確である。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジと潜水調査で名古屋港沖合からも死殻がわずかに採集された。

【県内の分布】

2010年に南知多町千鳥ヶ浜で離棄状態の複数の死殻を確認している。

【国内の分布】

兵庫県～九州。

【世界の分布】

中国、フィリピン、東南アジア、紅海など。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。生貝が採集されないのが、危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

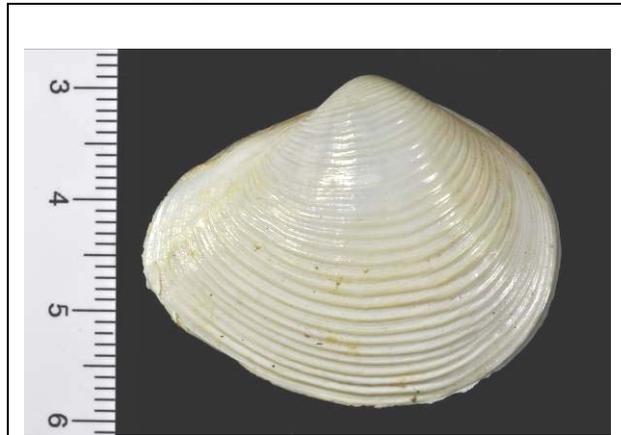
前述のとおり、2010年前後に南知多町千鳥ヶ浜において離棄状態ではあるが比較的状态の良い死殻が複数打ち上がったことから、この周辺海域に少なからず本種が棲息している可能性がある。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物, 研究集報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
 中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

福田 宏, 2012. ヤチヨノハナガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.143. 東海大学出版会, 秦野.
 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.



ヤチヨノハナガイ
愛知県三河一色、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

アオサギガイ *Psammotreta (Pseudomitis) praeupta* (Salisbury, 1934)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	絶滅危惧 I A類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、生息数とも激減している。本種は知多湾南部で底引き網によりわずかな死殻が採集されて以来（中山, 1980）、採集記録がない。近年、三河湾湾口部、知多半島伊勢湾側をドレッジにより調査したが、死殻も採集できなかった（木村, 1996；木村, 2000）。名古屋港沖から 2008、2009 年に殻皮の残った合弁の新鮮な死殻が少数ではあるが採集された。和田ら（1996）では危険とランクされている。

【形態】

殻長約 4cm、殻は長い卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色で殻頂部はわずかに青みを帯びる。後背縁は短く直線的。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合から新鮮な死殻がわずかに採集された。

【県内の分布】

上述したように、生息場所、生息数が減少し、近年では名古屋港沖以外では死殻すら採集されていない。

【世界及び国内の分布】

房総半島～九州。

【世界及び国内の分布】

東南アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。近年名古屋港沖以外では死殻さえ採集されず、危機的生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

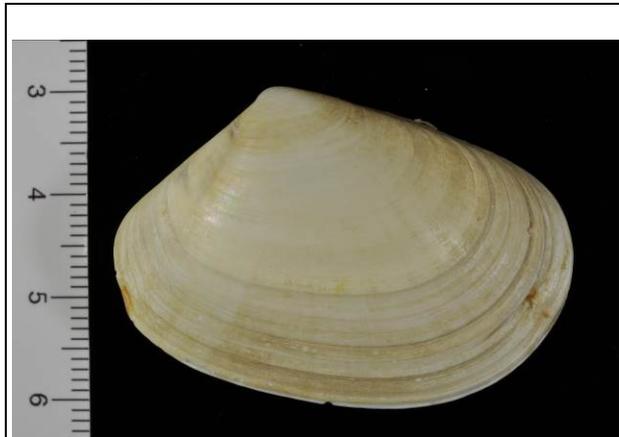
愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬, 2013）。

【引用文献】

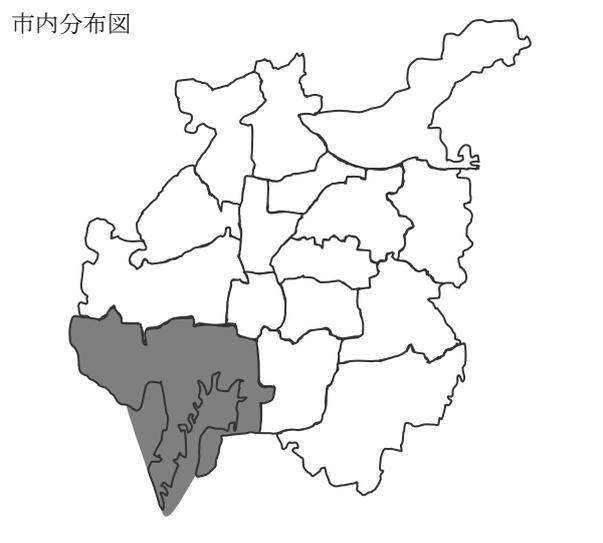
川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物, 研究彙報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた, (26):18-20.
 中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

奥谷喬司（編）, 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 佐藤正典（編）, 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 秦野.



アオサギガイ
産地不詳、市原 俊 撮影



市内分布図

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 ハナグモリ科>

ハナグモリ *Glauconome chinensis* Gray, 1828

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、近年東京湾や瀬戸内海沿岸の都市近郊では激減している(和田ほか, 1996)。本種は県内内湾域に広く分布していたと思われるが、地味で小型種のためか、生息状況に関する記録はない(愛知科学教育センター, 1967)。伊勢湾奥の金城ふ頭(現在)が埋め立て地であった頃、殻皮の残った死殻が採集されたが(河合, 2009)、現在県内では死殻が採集される場所も確認されていない。和田ほか(1996)では危険にランクされている。

【形態】

殻長2cm、殻は前後に長い楕円形で、膨らみはやや強い。殻はやや薄く、黄褐色の厚い殻皮を被る。

【分布の概要】

【市内の分布】

金城ふ頭造成時(1970年代)にサンドポンプによって新鮮な死殻が1個体のみ採集されたが(河合, 2009)、その後死殻すら採集されていない。

【県内の分布】

上述したように、現在生息が確認できない。

【国内の分布】

房総半島～瀬戸内海～有明海、八代海、沖縄島、西表島に分布するが生貝が確認できない地域も多い。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、フィリピン。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような内湾奥部の干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。現在死殻さえ採集できないので、危機的生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

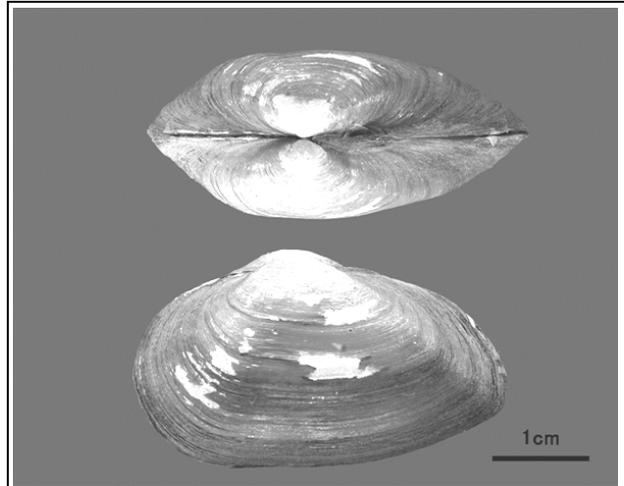
山下(2012)によれば、銚子、相模湾、三河湾、伊勢湾、浦戸湾では、消滅または現状不明となっている。東京湾には2ヶ所の生息地がある。瀬戸内海東部では現存生息地は少なく、西部の周防灘に生息地が多い。

【引用文献】

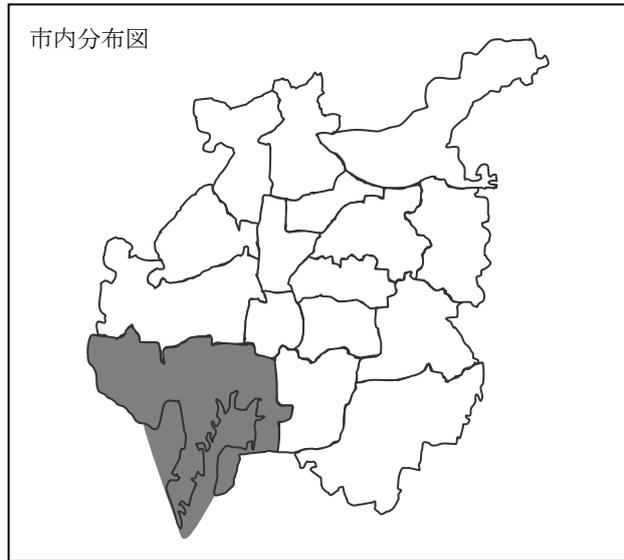
愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 河合秀高, 2009. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝. かきつばた, (34):20.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 山下博由, 2012. ハナグモリ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.139. 東海大学出版会, 秦野.

【関連文献】

奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 東京.



ハナグモリガイ
名古屋港金城ふ頭、1970年代、木村昭一 撮影



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 シジミ科>

マシジミ *Corbicula leana* Prime, 1864

【選定理由】

マシジミは愛知県の平野部の河川、湖沼にごく普通に生息していた淡水二枚貝であった(愛知県科学教育センター, 1967; 木村, 1994)。しかし、1990年代にカネツケシジミ(タイワンシジミの黄色型)が愛知県にも移入、定着し、マシジミ分布域の多くで、移入したカネツケシジミと置き換わっていることが確認された(原田, 2000; 木村, 2002)。名古屋市でも2008年にカネツケシジミの生息が確認された。1980年代ですでにマシジミの生息場所が少なかった名古屋市内では現在、主な河川からマシジミの生息が確認できない。

【形態】

殻長30mm程度の三角形に近い形をした二枚貝。殻表の成長脈はやや荒く、殻の色彩は黄褐色から黒色。カネツケシジミの典型的な個体は殻表の色彩が鮮やかな黄色で内面は白色になるので区別は明確であるが、マシジミかタイワンシジミ類か同定が困難な個体も多く出現する。

【分布の概要】

【市内の分布】

1980年代の守山区での記録(酒井, 2002)の他、2014年に中川区の水路で発見した。

【県内の分布】

かつて県内各地に普通に生息していたが近年は激減している。

【国内の分布】

東北~九州、四国、奄美大島(国内移入の可能性あり)(増田・内山, 2004)。

【生息地の環境/生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況/減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

タイワンシジミが移入した水域での対策はないが、移入していない生息地を早急に発見し、タイワンシジミが侵入しないように措置を講ずる必要がある。

【特記事項】

遺伝子分析の結果は、殻形態に基づく同定結果でマシジミ(またはタイワンシジミ)と同定できる個体には必ずしも対応しない。

マシジミとタイワンシジミを同種とする見解もある(山田ほか, 2010)。

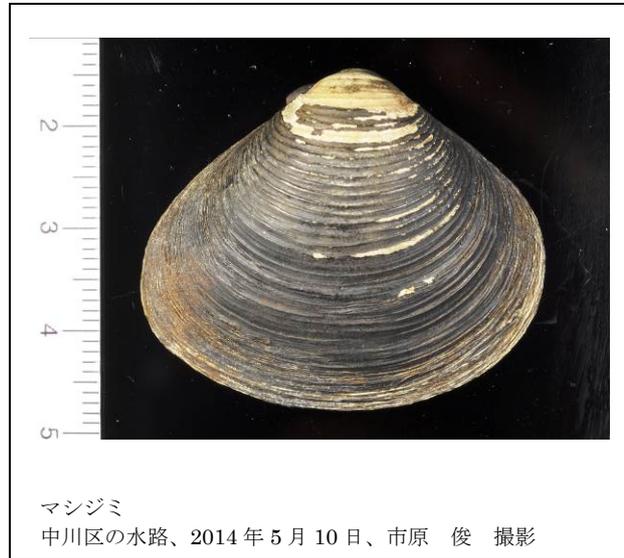
Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ432-14、採集地: 守山区竜巻池、DNA分析: 名古屋市立大学大学院。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 原田一夫, 2000. タイワンシジミが愛知県に侵入. かきつばた, (26):10.
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2002. 豊田市におけるカネツケシジミの繁殖例. かきつばた, (28):18-19.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.
 酒井 類, 2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた, (28):15-17.
 山田充哉・石橋 亮・河村功一・古丸 明, 2010. ミトコンドリア DNA のチトクローム b 塩基配列および形態から見た日本に分布するマシジミ, タイワンシジミの類縁関係. 日本水産学会誌, 76(5):926-932.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マルスダレガイ科>

ウラカガミ *Dosinorbis (Phacosoma) penicilata* (Reeve)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に深く潜って生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻が少数採集されるが、近年生貝の採集記録がなかった（中山，1980；木村，1996；木村，2000）。その後、2008年に名古屋港沖で行ったドレッジ調査で生貝2個体が採集された。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長6cm、殻はやや角張った円形で殻質は厚いが、膨らみは弱い。殻は白色から淡褐色で、殻表には、密な輪肋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約6mの泥底より生貝(幼貝)2個体が採集された。2009年の潜水調査では新鮮な合弁の死殻が多数採集された(生貝の記録無し)。

【県内の分布】

上述のとおり名古屋港のみ。

【国内の分布】

陸奥湾以南～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。現在名古屋港以外では古い死殻が少数得られるのみで、危機的生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合・千葉，1996）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

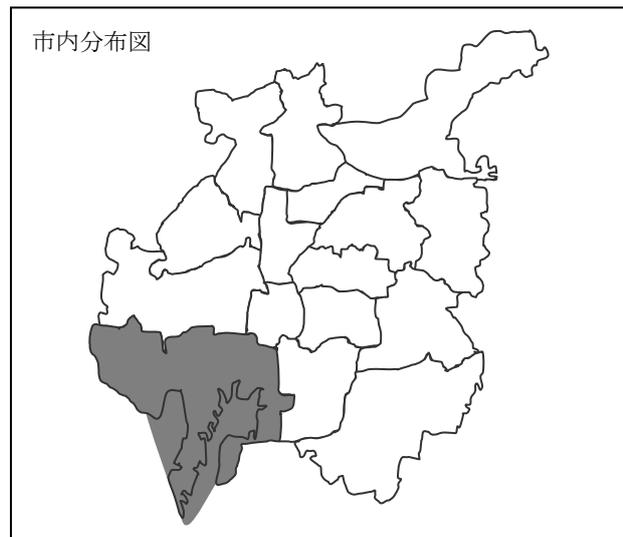
蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
 河合秀高・千葉正己，1996. 名古屋港13号地浚渫地より産出した貝類化石(1)二枚貝・角貝. 化石の友, (43):21-25.
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
 中山 清，1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

木村昭一，2012. ウラカガミ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.149. 東海大学出版会, 秦野.



ウラカガミ
 韓国順天市, 2009年6月22日、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マルスダレガイ科>

ハマグリ *Meretrix lusoria* (Roding, 1798)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は分布域全域で著しい減少が報告されており、瀬戸内海、有明海の極一部や天草などに健全な生息場所が残されているが、その他では非常に稀な種となってしまった(和田ほか, 1996)。愛知県内でも本種は1960年代には三河湾奥部の前芝付近、福江湾で多産し、食用にされていたが(愛知県科学教育センター, 1967)、近年では死殻すらほとんど採集できない。和田ほか(1996)では危険にランクされている。このように絶滅が危惧されたが最近では県内のいくつかの干潟で時々生貝が発見されるようになった。全国的にも回復しているようである。名古屋市内では、2013年に庄内川河口で生貝が確認されたが生息個体数は極めて少ないため絶滅危惧ⅠA類とした。

【形態】

殻長8cmに達するやや大型な種。殻は丸みを帯びた三角形で、殻はよく膨れるが薄い。殻の色彩は濃い褐色から灰褐色まで個体変異が多く、模様も変異する。シナハマグリ(中国・韓国からの輸入品)は殻全体に丸みが強く、殻の模様は褐色の稲妻模様のある個体が大部分で色彩の変異も少ない。



ハマグリ
庄内川河口、2008年12月11日、市原 俊 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

2013年に庄内川河口で生貝が確認された。

【県内の分布】

2010年に矢作川河口や南知多町で複数の生貝を確認した。

【国内の分布】

陸奥湾～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島南部。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内の干潟から潮下帯は環境が著しく悪化しているため、かつて多産し食用にされていた本種の生息場所は、現在ほとんど確認できない。大型種であるのに、死殻の確認できる場所すら非常に少ない。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

藤前干潟で時々発見されるようになったが、継続調査が必要である。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30):14-20.
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31):29-31.



市内分布図

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <オオノガイ目 オオノガイ科>

ヒメマスオガイ *Cryptomya busoensis* Yokoyama, 1922

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖（木村，1996；木村，2000）、蒲郡市三谷地先人工干潟（木村，2004）で死殻が少数採集されたが、生貝は確認されていない。2008年に名古屋港沖で行ったドレッジ調査で生貝が少数採集された。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻長約2cmで、殻は卵形で膨らみはやや強い。殻は白色で薄く脆い。殻の後端は裁断状で開く。殻頂下にさじ状の弾帯受けがある。外套線はほとんど湾入しない。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約2~6mの砂泥底より生きた個体が少数採集された。

【県内の分布】

上述したように、名古屋港沖合以外では近年全く生貝が採集されていない。

【国内の分布】

北海道~九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。名古屋港沖合以外では死殻も少ないので危機的生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県原子市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

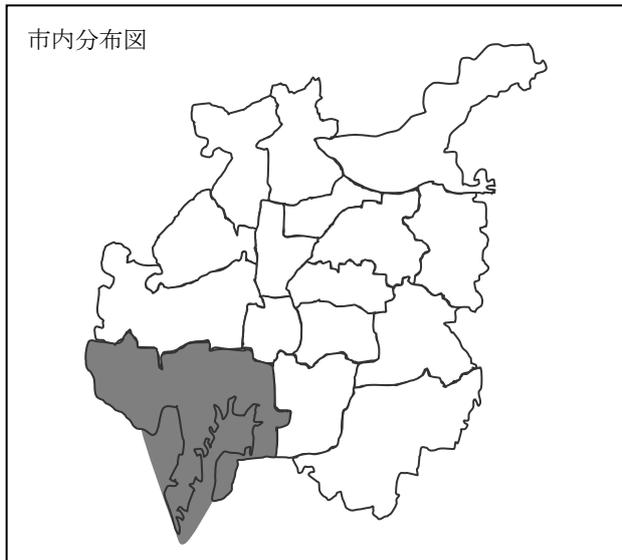
川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.
 木村昭一，2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた，(30):14-20.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京。

【関連文献】

木村昭一，2012. ヒメマスオガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.166. 東海大学出版会，秦野。
 奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野。
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009. 干潟生物調査ガイドブック～東日本編～，120pp. 日本国際湿地保全連合，東京。



ヒメマスオガイ
中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊 撮影



市内分布図

貝類

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <オオノガイ目 オオノガイ科>

クシケマスオガイ *Venatomya truncata* (Gould)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	絶滅危惧 I B類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾の砂泥干潟に生息する。愛知県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種はかつて伊勢湾周辺の海岸に死殻が多く打ち上げられ、生貝も普通に生息していたが、近年 20 年間でその生息場所、生息数とも激減した。本県側の伊勢湾や三河湾では生貝はおろか、死殻すら採集できる場所もほとんどない。2008年2月知多半島内海海岸で軟体部の入った本種が寒波で打ち上げられた。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では 2008 年に名古屋港沖で死殻が少数採集されている。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや 2010 の評価区分に従った。

【形態】

殻長約 2cm で、殻は卵形で膨らみは弱い。殻は白色で薄く、殻表には細い放射肋が密に走る。弾帯受は小さく、外套線湾入はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約 2~6m の砂泥底より殻皮の保存された合弁の死殻が少数採集された。

【県内の分布】

上述したように、現在上述の内海海岸を除きほとんど生息が確認できない。

【国内の分布】

伊勢湾~九州、南西諸島。

【世界の分布】

インド、太平洋、紅海。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。現在ほとんど生息が確認されず、危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

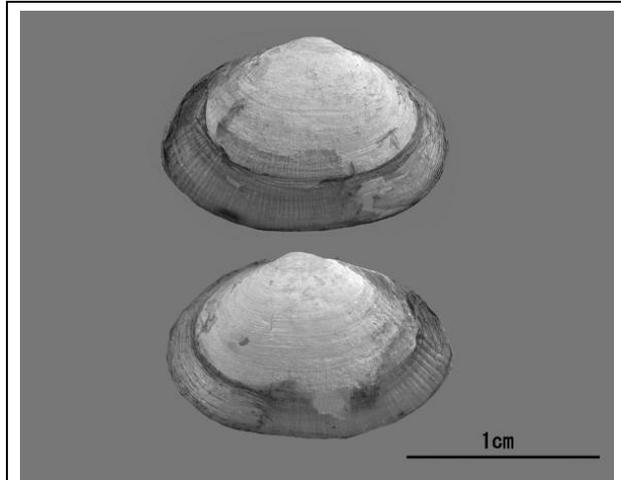
内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

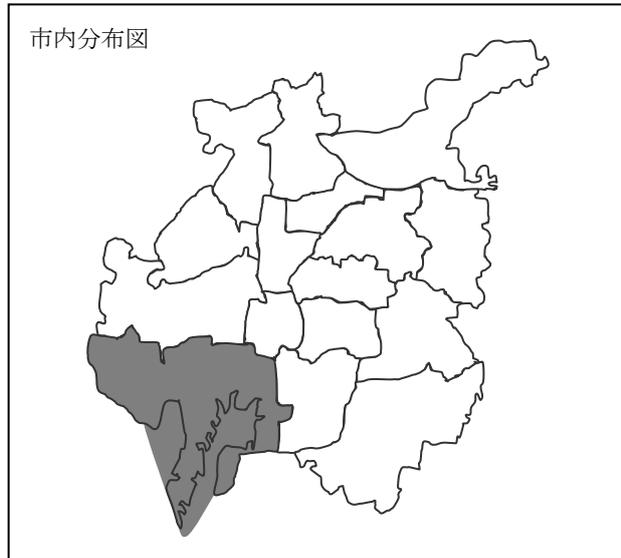
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 木村昭一, 2012. クシケマスオガイ. 日本ベントス学会 (編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.166. 東海大学出版会, 秦野.
 名古屋市動植物実態調査検討会監修, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-, 316pp, 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 名古屋.
 奥谷喬司 (編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子, 2009. 干潟生物調査ガイドブック~東日本編~, 120pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.



クシケマスオガイ
 名古屋港水深6m、2008年10月9日、木村昭一 撮影



市内分布図

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <オオノガイ目 ニオガイ科>

ウミタケ *Barnea (Umitakea) japonica* (Yokoyama, 1920)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に生息する。かつては房総半島以南の内湾から記録されていたが、有明海以外での最近の記録はきわめて少ない(和田ほか, 1996)。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は伊勢湾では1997年3月に三重大学実習船勢水丸のベントス調査によって湾口部(水深12m)で死殻の破片が1個体採集されたにすぎない。三河湾では近年、生貝が2個体採集された(西, 2010)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で比較的新鮮な死殻片がわずかに採集された。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻長約8cm、殻は極めて薄く膨らみは強い。殻は白色で生きている時はやや厚い殻皮を被る。殻の前端は丸みを帯び、後端は斜めに裁断状で両端とも大きく開く。後域にはやや長く強い棘が並ぶ。



ウミタケ
中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合から殻皮の残った比較的新鮮な死殻片がわずかに採集された。

【県内の分布】

上述したように、近年三河湾で2個体生貝が採集されたが、殻皮の残った死殻が採集される場所は名古屋港沖だけである。

【国内の分布】

日本各地。

【世界の分布】

ロシア、朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも著しく減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある(川瀬, 2013)。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 西 浩孝, 2010. 三河湾で絶滅危惧種の二枚貝ウミタケの生息を確認. 豊橋市自然史博物館研究報告, (20):15-17.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

- 佐藤正典(編), 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.
 山下博由・木村昭一, 2012. ウミタケ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.166. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <新腹足目 コロモガイ科>

オリイレボラ *Trigonostoma scalariformis* (Lamarck, 1822)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されていなかった(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。2006、2007年に知多半島先端部の数地点でドレッジ調査の結果、少数の生貝と比較的多くの新鮮な死殻が採集された。しかし、生息範囲は狭く、個体数は少ないので予断を許さない。和田ほか(1996)では、現状不明(絶滅寸前?)とランクされている。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で生貝が少数個体のみ採集された。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻はこの属としては大型でやや細く、臍孔は狭く開くが、軸唇の滑層によって部分的にふさがれる。縦肋は強いが、肋間は平滑で螺旋肋は弱い糸状か不明瞭。蓋はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深 2~6m の砂泥底から生貝が少数個体ではあるが採集された。

【県内の分布】

上述したように県内の潮下帯では、近年生貝は少数しか採集されない。

【国内の分布】

房総半島~九州西岸。

【世界の分布】

黄海、インド、太平洋。

【生息地の環境/生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況/減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため、本種の生息場所、生息数ともに減少し、生貝が採集されることは稀である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
 中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

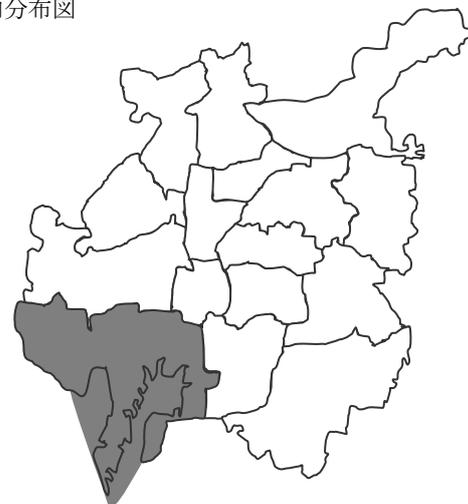
【関連文献】

- 木村昭一・福田宏, 2012. オリイレボラ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.74. 東海大学出版会, 秦野.
 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 佐藤正典(編), 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子, 2009. 干潟生物調査ガイドブック~東日本編~, 120pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.



オリイレボラ
千葉県房総半島、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 モノアラガイ科>

モノアラガイ *Radix auricularia japonica* Jay, 1857

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧

【選定理由】

本種は平野部の池沼や水田、川の淀みなどの水草や礫に付着している(紀平, 1990)。近年では水質汚濁、農薬散布、水路の改修のため生息地、生息数とも著しく減少した。木村(1994)では、4ヶ所のみで生息が確認されたにすぎず、そのいずれでも生息数が少ない。今回の調査では名古屋市北区の水田で僅かな個体が見つかっただけである。

【形態】

殻高20mm程度で、殻口が著しく広がり、殻口高は殻高の7~8割程度を占める。軸唇は多少ねじれる。殻表面には細かい成長脈がみられる。蓋はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

今回の調査では北区の水田で僅かな個体が見つかっただけである。

【県内の分布】

県下での生息場所は著しく減少し、生息数も少ない。名古屋市の調査期間中に新城市(川瀬, 2014)と豊田市から本種を発見した。

【国内の分布】

北海道~九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境/生態的特性】

“【選定の理由】”参照。

【現在の生息状況/減少の要因】

“【選定の理由】”参照。

【保全上の留意点】

護岸工事、水路の改修、農薬散布には注意が必要である。平野部の湖沼や河川下流域の水質の保全が必要である。

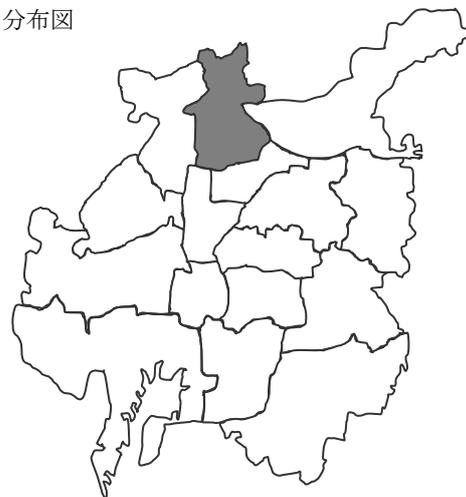
【特記事項】

今回得られた個体は、最近分布を広げている外来種の可能性もある。似て非なる個体の場合、殻形態だけでの識別は困難である。増田(2005)は、近似した外来種との置換や交雑の危険性を指摘している。例えば大量に見つかる岐阜市では外来種の可能性がある(岐阜市役所自然共生部自然環境課, 2014)。また、豊田市では5年間の調査で生息していなかった水路において2013年に本種が突然発生しており、移入種の可能性が高い。



モノアラガイ
豊田市中金町、2012年6月1日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



【引用文献】

岐阜市役所自然共生部自然環境課, 2014. 岐阜市の自然情報, 238pp. 岐阜市役所, 岐阜.
川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新城市の自然誌-昆虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究集報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
増田 修, 2005. モノアラガイ. 環境省(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-6 陸・淡水産貝類, p.320. 自然環境研究センター, 東京.

【関連文献】

紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 キセルガイ科>

ナミギセル *Stereophaedusa japonica japonica* (Crosse, 1871)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は本州、四国、九州北部に広く分布するキセルガイで、各地に地域変異個体群があり、多くの亜種が記載されている。標準和名の通り普通種とされているが、愛知県内では分布は限定的で(野々部ほか, 1984)、生息地点数は少なく、生息範囲も狭い。特に名古屋市内では八事丘陵の南西部に位置する瑞穂区内のごく一部の自然林のみに生息が確認されていた(守谷, 2004)が、宅地開発等によりその生息が危ぶまれる。

【形態】

殻は中形で、殻高 26mm、殻径 7mm、12層。やや棍棒型で淡黄～紫褐色。殻口は卵形で全縁、白色。外唇は厚くひろがり反転する。上板は斜位で内唇にいたる。下板は顕著に発達し、弓状に湾曲し、上板に近づいている。下軸板は弱く唇縁に現れる。主襞は長く、その下に上腔襞が少し斜めにあり、それより短い下腔襞がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

瑞穂区の 2ヶ所でのみ生息が記録された(守谷, 2004)。東区木ヶ崎(矢田川左岸)で2014年9月10日に生貝が新たに発見された。

【県内の分布】

上述したように、東三河部を中心に生息地があるが、生息地点数は少なく、生息範囲も狭い。例えば近年全域的な調査が行われた豊田市や新城市では、本種の生息は極めて限られており滅多に見つからない。

【国内の分布】

本州、四国(北部)、北九州。多くの地方型や異名がある。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

古い自然林の保全が望まれる。

【特記事項】

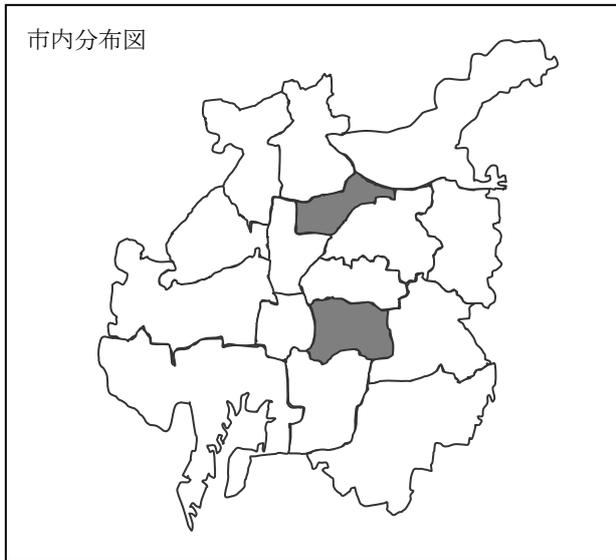
2012年に名古屋市内の陸産貝類の一斉調査が行われたが、ナミギセルはいずれの地点でも発見されなかった。

【引用文献】

守谷茂樹, 2004. 名古屋市内の陸産貝類の現況, かきつばた, (29):25-31.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343 pp. 保育社, 大阪.
川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
川瀬基弘, 2013. なごやで探そう!カタツムリ, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編). 新城市の自然誌—昆虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市内に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 オカモノアラガイ科>

ナガオカモノアラガイ *Oxyloma hirasei* (Pilsbry, 1901)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

平野部から丘陵地の安定した水田、湿地周辺のマコモなどの挺水植物の茎や葉に付着している。近年、このような生息環境自体が激減しているため、本種の生息地、生息数は減少している。名古屋市では西区の小水路周辺の湿地で採集された標本が保存されている(豊橋市自然史博物館所蔵)が、近年、西区ではその生息が確認されていない。2013年に北区喜惣治新田で生貝が発見された。

【形態】

殻はとても薄く、やや光沢のある黄褐色の半透明。卵形～紡錘形で体層は長い。殻高10～13mm程度。殻口が著しく長く広がり殻口高は殻高の8割程度を占める。淡水産のモノアラガイなどに似ているが、眼が触角の先端についていることで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

北区喜惣治新田の水田で発見された。

【県内の分布】

川瀬(2012)の報告後に豊田市各地から発見されているが個体数は少ない。新城市からも発見された(川瀬, 2014)。

【国内の分布】

関東地方～九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から丘陵地の安定した水田、湿地周辺のマコモなどの挺水植物の茎や葉に付着している。陸産貝類であるが、水辺に最も近い位置に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

野々部ほか(1984)によれば、当時は名古屋市内の水田にも普通に見られた。しかし近年は、上述したような安定した環境自体が減少し、本種は激減している。

【保全上の留意点】

生息環境全体の保全が必要である。

【特記事項】

早瀬(2008)は、静岡市清水区において本種個体群の連続的な観察、計測を行い、本種の生活史には、春型と夏型があり、それぞれに寿命が異なることを解明し以下のように考察をしている。一見、無意味な発育状態の差が、湿地という不安定な環境において、突然の増水や濁水など環境の急激な変化に対して、卵や稚貝に対する被害を一部に食い止める生存戦略ではないかと考えられている。

【引用文献】

早瀬善正, 2008. 静岡市清水区能島遊水地におけるナガオカモノアラガイの生活史. 兵庫陸生生物, (60):151-157.
 川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新城市の自然誌, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類. 豊橋市自然史博研報, (21):31-43.



ナガオカモノアラガイ
 豊田市松平町、2013年5月13日、西尾和久 撮影



市内分布図

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 オナジマイマイ科>

ヒルゲンドルフマイマイ *Trishoplita hilgendorfi* (Kobelt, 1879)

【選定理由】

名古屋市の熱田神宮が古くから著名な産地である(愛知県科学教育センター, 1967)。その他、愛知県内では定光寺、石巻山、嵩山などに分布するが、石巻山、嵩山に分布する個体群はオオヒルゲンドルフマイマイとして区別されることがある。チャイ

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

殻高約1cm、殻径約1.5cmの低円錐形で、体層は丸く膨らみ、周辺に弱い角がある。殻の色彩は淡黄色から黄褐色で、殻質は薄く、殻表に薄い殻皮を持つ。産地によって殻の色彩、周辺角の強さなど殻の形態は変異する。



ヒルゲンドルフマイマイ
 天白区荒池、2011年6月17日、川瀬基弘 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

熱田神宮の他に、熱田神宮公園(熱田区)、木ヶ崎公園周辺(東区)、荒池(天白区)からも発見された(川瀬, 2012; 川瀬, 2013)。

【県内の分布】

定光寺、石巻山、嵩山などに分布する。近年、知多半島南部の非石灰岩地でも生息が確認された(早瀬, 2001)。

【国内の分布】

伊吹山系、鈴鹿山系の石灰岩地に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境/生態的特性】

よく茂った二次林内の低木の樹上(活動期)に生息する。

【現在の生息状況/減少の要因】

上述したような安定した二次林の減少が原因と思われる。

【保全上の留意点】

分布域の二次林の保全に留意する。

【特記事項】

名古屋市一斉調査などにより、木ヶ崎公園周辺(東区)、荒池(天白区)ほか新たな生息地が確認されたが、いずれの地点においても生息個体数は少ない(川瀬, 2012; 川瀬, 2013)。

【引用文献】

- 愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
- 早瀬善正, 2001. 知多半島に生息するヒルゲンドルフマイマイ. かきつばた, (27):10-11.
- 川瀬基弘, 2012. 名古屋市内で確認されたシリオレギセルとヒルゲンドルフマイマイ. かきつばた, (37):52.
- 川瀬基弘, 2013. なごやで探そう!カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- 木村昭一, 2002. 熱田神宮の貝類相. かきつばた, (28):24-25.

【関連文献】

- 川瀬基弘, 2013. II-7 なごや生きもの一斉調査2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <イシガイ目 イシガイ科>

ヌマガイ *Anodonta lauta* Martens, 1877

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧I B類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種を含むイシガイ科二枚貝は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で、比較的水質の良い場所を生息場所としている。名古屋市内ではこのような環境の改修や汚染が進み、グロキジウムの寄主となるヨシノボリなどが外来魚に捕食されるなど、本種は激減した。

【形態】

殻は卵形で膨らみ、大型個体の殻長は20cmを超える。殻表は緑褐色で、殻頂付近には同心円状の皺がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜巻池／雨池／見返ヶ池、名東区明德池、天白区大根池、千種区猫ヶ洞池（川瀬・野呂，2013）と中川区の水路。ただし明德池は死殻のみの発見であった。

【県内の分布】

豊田市（川瀬ほか，2011）や新城市（川瀬，2014）などの溜池。ヌマガイとしての記録は県内に15ヶ所以上ある。

【国内の分布】

北海道～九州の河川下流域や湖沼。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

河川下流域や平野部の用水路など、流れが緩やかな水質の良い砂泥底や平野部の溜池。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”と“【分布の概要】”参照。

【保全上の留意点】

外来魚の侵入防止、水質の保全、農薬使用の制限に加え、水路においては堆積した底質の確保と一年を通しての一定水位の確保が不可欠である。

【特記事項】

従来のだぶガイ *A. woodiana* は、近藤（2008）によりヌマガイ *Anodonta lauta* Martens, 1877 とタガイ *Anodonta japonica* Clessin, 1874 の2種に分けられた。

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号：GBJ440-14（中川区の用水路）、GBJ421-14（天白区大根池）、GBJ430-14（守山区見返ヶ池）、DNA分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

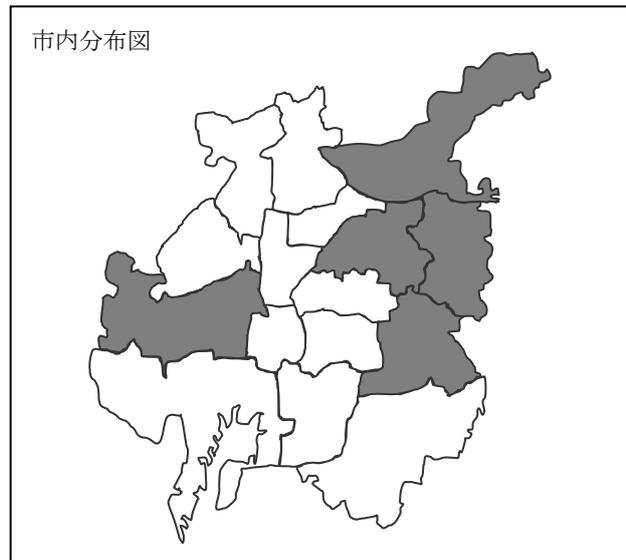
川瀬基弘，2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか（編），新城市の自然誌，pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館。
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊，2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水，(48):9-16.
 川瀬基弘・野呂達哉，2013. 名古屋市におけるヌマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた，(38):56.
 近藤高貴，2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第3号，69pp. 日本貝類学会，東京。

【関連文献】

浅香智也・鳥居亮一，2012. 油ヶ洲とその周辺の用水路の淡水二枚貝. 碧南海浜水族館年報，(25):36-40.
 木村昭一，1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報，(33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会。
 酒井 類，2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた，(28):15-17.
 田部雅昭・福原修一・長田芳和，1994. 淡水産二枚貝だぶガイに見られる遺伝的II型. *Venus*，53(1):29-35.



ヌマガイ
天白区大根池、2011年11月3日、川瀬基弘 撮影



市内分布図

（執筆者 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

サビシラトリ *Macoma contabulata* (Deshayes, 1854)

【選定理由】

本種は内湾の奥部や河口部の砂泥干潟に生息する。愛知県では干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。もともと伊勢湾の愛知県側、三河湾での記録は多くないが、近年明らかに本種の個体数が減少している。名古屋市では、藤前干潟に古い死殻が打ち上げられて採集されるが個体数は少ない（木村，2004）。2013年の調査では死殻を多数確認したが、生貝を発見できなかった。

【形態】

殻長約7cm、殻は卵形、ニッコウガイ科としては膨らみが強い。殻はやや薄く、白色、生きている時には縁辺部に薄い殻皮を被る。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の泥底下60~80cm程度に生息している個体を発見した。泥底の深いところに生息しているため、生貝を発見するのは困難である（川瀬ほか，2009）。

【県内の分布】

汐川干潟、三河一色、矢作川河口干潟。

【国内の分布】

北海道南西部~九州。

【世界の分布】

中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”を参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”を参照。

【保全上の留意点】

内湾奥の干潟環境を保全する必要がある。

【特記事項】

名古屋市港区の藤前干潟の泥底では、60~80cm程度まで潜っているので、生貝を発見するのは困難である。ただし夏の干潮時のタイドプールでは、捕食のために動き回る本種の水管を複数確認できる。この水管の下を60~80cm程度まで掘り下げると本種を発見することができた。また、庄内川河口では、靱帯と殻皮が保存された新鮮な本種の死殻を多数確認できたので、藤前干潟の泥底と同様にある程度の個体数が生き残っていると考えられる（川瀬ほか，2009）。

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬ほか，2015）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

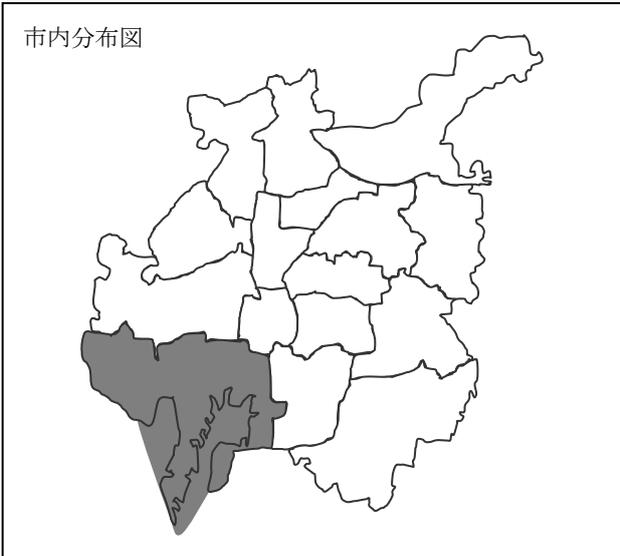
藤岡えり子・木村妙子，2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.
 川瀬基弘・市原 俊・河合秀高，2015. 中部更新統渥美層群の軟体動物化石. 瑞浪市化石博物館研究報告，(41): 51-131.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報，(19):11-20.
 木村昭一，2004. ⑧貝類. レッドデータブックなごや2004 - 動物編 -，pp.263-292. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室，名古屋.

【関連文献】

川瀬基弘，2002. 矢作川河口域における干潟の底生動物相. 矢作川研究，(6):81-98.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告，(22):31-64.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	絶滅危惧IB類
環境省2014	準絶滅危惧



（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 マメシジミ科>

ウエジマメシジミ *Pisidium (Odhneripisidium) uejii* Mori, 1938

カテゴリー

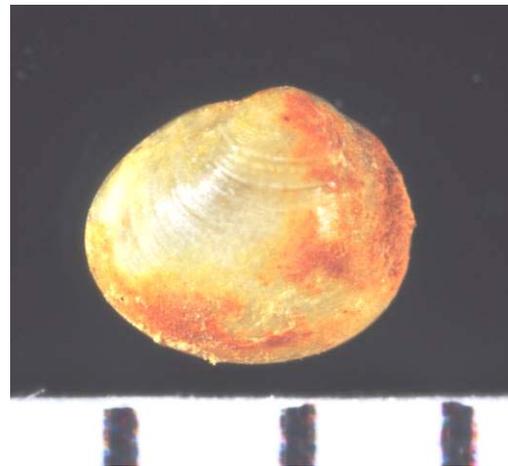
名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本属は日本国内から 20 種程度が報告されているが (Mori, 1938 ; 黒田, 1963)、非常に微小な種が多いため、各地の詳細な分布・生息状況は十分に調べられていない。豊田市や岐阜市の平野部の水田を調査したところ比較的多くの地点で見つかったが (川瀬ほか, 2012 ; 川瀬, 2014)、汚濁の進んだ水質の悪い水田ではほとんど見つからなかった。市内全域の主要な水田を調査したが、生貝は天白区の一つの水田以外では発見できなかった。発見された水田においても個体数はやや少なく、隣接する水田では本種を発見できなかった。その後、南区呼続長楽寺付近で死殻を 1 個体のみ発見したが生貝を確認できなかった。

【形態】

殻は非常に小さく、殻長 1~2mm 程度。殻は薄質の白色半透明から灰褐色で、微細な成長脈がある。殻頂は後方に位置する。鉸板が殻頂部で非常に狭くなり靱帯が殻内面に裸出する。本属は日本国内から 20 種程度が報告されているが (Mori, 1938 ; 黒田, 1963)、非常に微小な種が多いため、各地の詳細な分布・生息状況は十分に調べられていない。



ウエジマメシジミ
天白区梅が丘、2012年8月16日、市原 俊 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区梅が丘 5 付近の水田 (生貝)、南区呼続長楽寺付近 (死殻 1 個体のみ)。

【県内の分布】

豊田市、新城市、西尾市など県内各地。

【国内の分布】

各地に分布すると思われるが調査不充分。

【生息地の環境／生態的特性】

比較的水質の良い水田の泥底に生息する。唯一生貝が発見された天白区梅が丘の水田では、他にヒラマキミズマイマイやヒメモノアラガイが見つかった。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の多くの水田では汚濁耐性種のヒメタニシやスクミリンゴガイが優占し水質が悪く、このような水田には生息できないと考えられる。農薬の影響もあると考えられる。

【保全上の留意点】

水田の水質・底質の汚濁防止。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号 : GBJ427-14, 採集地 : 天白区梅が丘 5、DNA 分析 : 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘, 2014. 11 貝類. 岐阜市の自然情報~岐阜市自然環境基礎調査~, pp.197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課.
 川瀬基弘・鳥居亮一・市原 俊, 2012. 愛知県矢並湿地に生息するマメシジミ類. 平成 23 年度豊田市自然観察の森年次報告書 : 223-225, 豊田市自然観察の森, 豊田.
 黒田徳米, 1963. 日本非海産貝類目録, 71pp, 日本貝類学会, 東京.
 Mori, S., 1938. Classification of Japanese *Pisidium*. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2):254-278, pls.7-11.

【関連文献】

川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか (編). 新城市の自然誌一昆虫・動物編一. pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.



市内分布図

貝類

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <アマオブネガイ目 アマオブネガイ科>

ヒロクチカノコ *Neripteron* sp.

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、絶滅寸前(日本本土)とランクされている。名古屋市では、庄内川河口域にまとまった個体群の生息が確認されているが、その生息範囲は狭い(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)。

【形態】

殻径約2cmの半球型平巻きで螺塔が現れない。殻表は平滑で褐色。殻口は広がる。蓋は半円形で、石灰質。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内に健全な個体群が分布しているが、生息範囲は狭い。

【県内の分布】

庄内川河口、矢作川河口域。

【国内の分布】

東京湾(絶滅)、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海、琉球列島。

【世界の分布】

中国大陸南部から東南アジア、オーストラリア北部にかけて分布するが、日本本土産と同一種かどうかは注意を要する(水産資源保護協会, 1996)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようにヨシ原湿地周辺の塩沼やヨシ原内の水たまりなど直接河川水の当らない淀んだ泥干潟を好む。泥上にも生息するが、朽ち木や転石があればその下面に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD)登録番号: GBJ417-14、登録標本の採集地: 名古屋市港区藤前干潟、分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

- 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
- 木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.
- 水産資源保護協会, 1996. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅲ), 90pp.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

- 木村昭一, 2012. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相. 三河生物, 3:1-8, 2pls. 西三河野生生物研究会.
- 三浦知之, 2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 タニシ科>

オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (Martens, 1860)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

2009～2012年に市内15の溜池(守山区竜巻池/雨池/見返ヶ池、名東区明德池、天白区大根池、千種区猫ヶ洞池/東山新池等)で池干しや鋤簾により調査が行われたが、オオタニシが見されたのは守山区竜巻池と天白区大根池の2つの溜池だけであった。その他市内の水田を幅広く調査したが本種の確認は出来なかった。調査の出来ない溜池も残されているが名古屋市内での生息状況は危機的であり、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類にランクアップした。

【形態】

殻は高い円錐形でヒメタニシに似るがそれより大型で、殻底に比較的明瞭な角があるものが多い。また、マルタニシよりは体層の周縁が角張る。殻高は50～60mm程度で、環境条件がよいと80mm前後まで成長する。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜巻池と天白区大根池の2つの溜池のみ(川瀬・野呂, 2013)。

【県内の分布】

豊田市(川瀬ほか, 2011)や新城市(川瀬, 2014)などのほか、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布する。

【国内の分布】

北海道南部～九州、沖縄諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境/生態的特性】

本種は、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布し、かつては食用にするほど多産したが、近年では水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などのため、生息地、生息数とも著しく減少した。

【現在の生息状況/減少の要因】

前述の通り、名古屋市内の確実な生息地は2ヶ所のみである。

水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などの影響の少ないため池は、市内にはほとんど存在しない。

【保全上の留意点】

用水路の改修、溜池の護岸工事、農薬散布には注意が必要である。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems(BOLD)登録番号: GBJ419-14, GBJ420-14、登録標本の採集地: 天白公園大根池、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

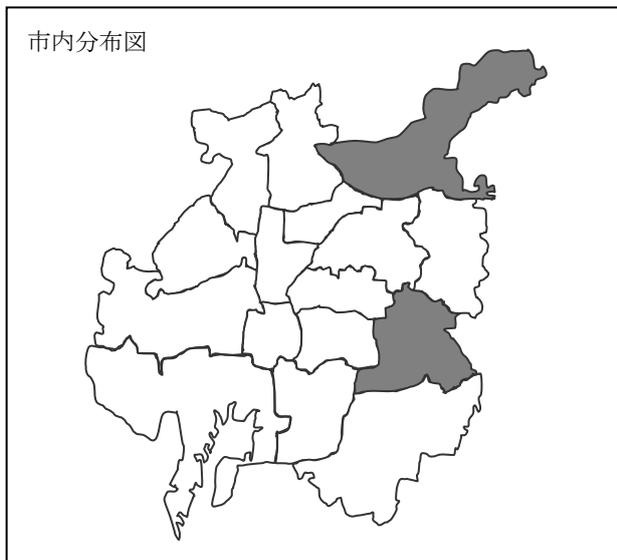
【引用文献】

川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新城市の自然誌—昆虫・動物編—, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.
 川瀬基弘・野呂達哉, 2013. 名古屋市におけるヌマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた, (38):56.

【関連文献】

紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.
 紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類. 159pp. ピーシーズ, 東京.
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

(執筆者 川瀬基弘)



貝類 <盤足(ニナ)目 ワカウラツボ科>

ワカウラツボ *Iravadia (Fairbankia) sakaguchii* (Kuroda et Habe, 1954)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺の転石や朽ち木の下に生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村, 1989; 木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、絶滅寸前とランクされている。市内では藤前干潟に健全な個体群が残っている(木村, 2001)。2013年の調査では庄内川河口干潟の流木(埋もれ木)の下からわずかながら生貝を発見した。

【形態】

殻は殻長約5mmと小型で、長卵形。臍孔はなく、蓋は革質で薄い。近似種のカワグチツボとは臍孔がない点、殻が厚い点などで区別される。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟より上部の転石地の深く埋もれた転石の下面に生息している(木村, 2001; 木村, 2010)。2013年にも確認した。

【県内の分布】

矢作川(木村, 2012)、佐奈川、汐川。

【国内の分布】

三河湾～九州。模式産地の和歌山県和歌浦では、環境破壊のため採集されず、有明海から再発見されるまで長らく幻の貝であった(木村, 1987)。

【世界の分布】

朝鮮半島南部。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県下では、上述したようなヨシ原湿地周辺の10cm以上深く埋もれた石や朽ち木の下面に付着している。稀にヨシ原群落内の小さな水たまりにたまった朽ち木や落ち葉に付着している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

泥に埋もれた転石や流木など漂着物の下面の貧酸素的環境を好むが、時に干潟軟泥の表層を匍匐していることもある。

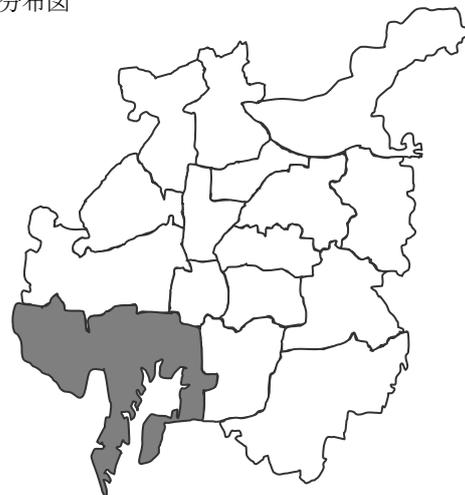
【引用文献】

木村昭一, 1987. ワカウラツボを有明海にて採集. 南紀生物, 29(2):95.
 木村昭一, 1989. ワカウラツボを汐川干潟(三河湾)にて採集. 南紀生物, 31(2):130-131.
 木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.
 木村昭一, 2010. コラム: 庄内川河口のヨシ原湿地の貝類とその保全. 生き物から見た名古屋の自然 なごやの環境指標種100(改訂版), pp.102-103. 三菱UFJ環境財団, 東京.
 木村昭一, 2012. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相. 三河生物, 3:1-8, 2pls. 西三河野生生物研究会.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.



ワカウラツボ
 福岡県、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 フトヘナタリ科>

フトヘナタリ *Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum* A. Adams, 1855

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に生息し、特にヨシ原群落内に高密度で生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。庄内川河口干潟に健全な個体群が残っているが(川瀬ほか, 2009)、分布範囲は限られている。

【形態】

殻高約4cm、殻径約1.5cmの円筒形で殻頂部分は成長にともなって欠落する。殻表は粗い布目状で殻口は反転して肥厚する。蓋は円形で革質。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口干潟に健全な個体群が残っている(川瀬ほか, 2009)。

【県内の分布】

上記のほか、矢作川河口、矢作古川河口、汐川干潟、内海、知多奥田など(鈴木ほか, 2006; 木村・木村, 1999)。特に三河湾汐川干潟では大きな個体群が残っている。

【国内の分布】

東北地方～九州、南西諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、インド・太平洋域。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようにヨシ原湿地、特にヨシ原群落内に多く生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ416-14、登録標本の採集地: 名古屋市庄内川河口。

【引用文献】

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

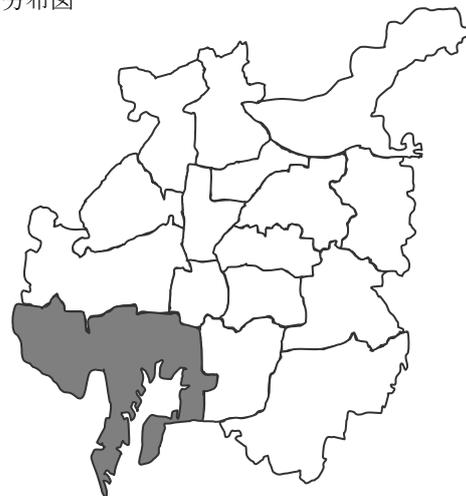
【関連文献】

木村昭一, 2004. 名古屋市より採集されたフトヘナタリの生貝. かきつばた, (30):34-35.
 木村昭一・福田 宏, 2012. フトヘナタリ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.29. 東海大学出版会, 秦野.
 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘, 2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物, 3:9-49. 西三河野生生物研究会.



フトヘナタリ
愛知県矢作川河口、2014年11月1日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <新腹足目 オリイレヨウバイ科>

ムシロガイ *Niotha livescens* (Philippi, 1849)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾からやや外洋にかけての干潟から潮下帯砂泥底に棲む。本県では内湾域の干潟から潮下帯の環境は急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種もかつては三河湾から伊勢湾にかけて普通に生息していた（愛知県科学教育センター，1967）が、近年急速に生息場所、生息数共に激減し、生貝が全く採集されていなかった（木村，1996；木村，2000）。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で生貝が少数個体のみ採集された。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻高約1.5cmの卵形の貝で、殻は厚く、大きく低い縦肋があるが、細い螺溝で横切られ、石畳状になる。殻口は丸く、内唇側に白い滑層が発達する。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深2～6mの砂泥底から幼貝ではあるが生貝が数個体、死殻が少数ではあるが採集された。

【県内の分布】

上述したように県内の内湾域では、古い死殻は比較的多く見られるが、生貝は限られた海域のみで採集される。

【国内の分布】

大槌湾～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、フィリピン、熱帯インド・西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため減少していると考えられる。しかし、近年急激に減少し生貝が見られなくなった理由については不明。本種と生息場所をほぼ同じくするアラムシロガイは内湾奥から湾口部の干潟から潮下帯にかけて現在もきわめて多産する。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

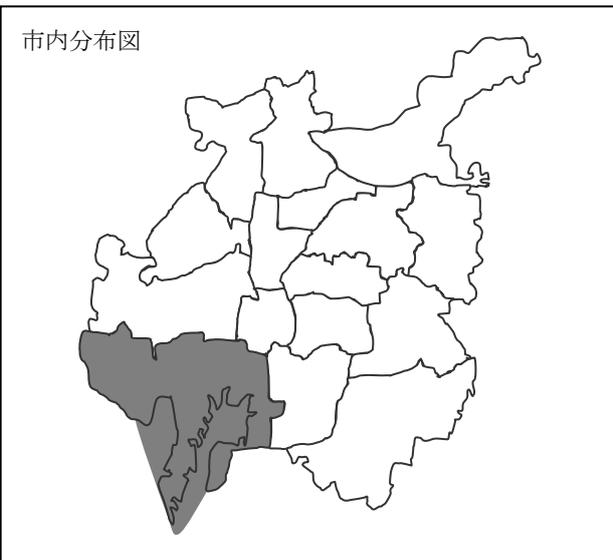
【引用文献】

- 愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会。
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.

【関連文献】

- 福田 宏，2012. ムシロガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.68. 東海大学出版会，秦野。
 奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野。
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009. 干潟生物調査ガイドブック～東日本編～，120pp. 日本国際湿地保全連合，東京。

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）



貝類 <異旋目 トウガタガイ科>

ヌカルミクチキレ (未記載種) *Seyella* sp.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は和田ほか(1996)で和名だけが提唱された未記載種である。内湾奥の泥干潟にヨコイトカケギリ(トウガタガイ科)やカワグチツボ、エドガワミズゴマツボと共に生息する。三河湾、伊勢湾の干潟から潮下帯に広く分布するヨコイトカケギリと比べて、本種は生息範囲が狭く、県内では現在汐川干潟の奥部の泥干潟でのみ生息が確認されているにすぎない(藤岡・木村, 2000)。本種は未記載種であるが、本県における前述のような生息環境は比較的調査が行われたので、生息状況は明らかになってきている。名古屋市内からも生息が確認された。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻長約 4mm の微小な細いさなぎ型の貝。殻は黄褐色で成長脈は弱く、光沢が強い。殻口軸唇には弱い襞が 1 本ある。肉眼で見るとカワグチツボとよく似ているので混同されやすい。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口域より少数ながら生きた個体が採集された。

【県内の分布】

上述したように生息場所は限られていて、生息が確認されたのは汐川干潟と庄内川河口域のみである。汐川干潟には、健全な個体群の生息が確認されている。死殻の採集記録があるのは、美浜町布土(河合, 1998)のみである。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ発見されている。三河湾、伊勢湾、瀬戸内海に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような内湾奥部の干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.
 河合秀高, 1998. 内湾性稀少種サザナミツボの新産地. かきつばた, (24):16-17.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

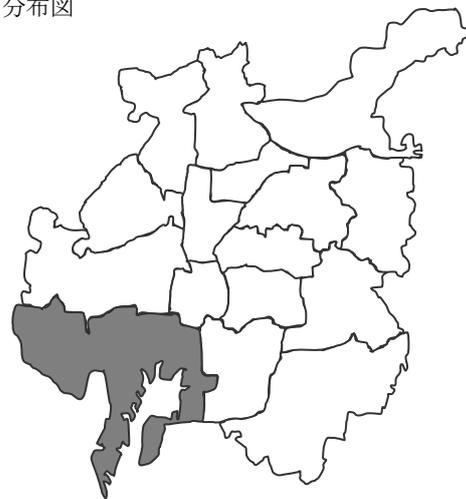
【関連文献】

福田 宏・久保弘文, 2012. ヌカルミクチキレ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.88. 東海大学出版会, 秦野.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～. 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.



ヌカルミクチキレ
 港区藤前干潟、2013年6月23日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

ヒゼンキビ *Parakaliella hizenensis* (Pilsbry, 1902)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

2012年に、市民参加型(参加者465名)による名古屋市陸貝一斉調査(市内全16区33地点)が開催され、その際名古屋市内から初めて発見された種である(川瀬, 2013a, b)。山地性種であるため(川瀬ほか, 2012)、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に生息している。発見された熱田区高座結御子神社では19種もの陸貝が発見されており、名古屋市内としては陸貝の種数が豊富で自然度が比較的高いと考えられる。一方、外来種の陸貝の個体数は市内最多であり、環境の改変が進んでいる。名古屋市内では他に本種の記録がなく、高座結御子神社においても本種の個体数は非常に少ない。

【形態】

殻径3mm程度の微小種。殻は薄く半透明で黄褐色～褐色。螺塔はやや高く円みのある円錐形。各螺層はよく膨らみ縫合はやや深い。ハリマキビよりも体層が一回り小さく、ヒメハリマキビよりも丸みをおびることで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

高座結御子神社(熱田区)。

【県内の分布】

豊田市足助地区桑田和町、野林町、室口町、箆林町、小原地区樽俣町、旭地区加塩町、坪崎町などで発見したが、各地点ともに個体数は非常に少ない。

【国内の分布】

関東～九州まで記録があるが北限の記録については詳細な情報がないため不明。

【生息地の環境／生態的特性】

山地性種であるため(川瀬ほか, 2012)、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に生息している。例えば、岐阜市内では雛倉、則松、外山、三田洞東、岩井、長良など比較的自然度の高い北部地域に生息し、市街地や平地の広がる自然度の低い南部地域では発見されていない(川瀬, 2014)。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう!カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2014. 11 貝類. 岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～, pp.197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.



ヒゼンキビ
岐阜市雛倉、2011年3月30日、川瀬基弘 撮影



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ナンバンマイマイ科>

ピロウドマイマイ属の一種 *Nipponochloritis* sp.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種が生息できるような自然度の高い環境は少ない。寺社林や緑地公園の雑木林の多くは、手入れが行き届いており、倒木や朽ち木が少なく、落葉なども定期的に清掃され、湿度を保ったリター層や腐葉土が堆積しにくくなっている。

【形態】

殻高12mm、殻径17mm程度、殻はやや球形で、黄褐色。殻表には短い殻皮毛が密にある。螺塔はほとんど平らで、縫合の間は緩やかに中高となる。次体層と体層は下降し、円形となる。殻口はわずかに斜位、広い円形、その唇縁は薄い。滑層は内唇から外側へ広がり半円状となる。ケハダピロウドマイマイより殻皮毛の密度が高い。



ピロウドマイマイ属の一種
守山区小幡、2012年10月5日、西尾和久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

八竜緑地(守山区)、小幡緑地公園(守山区)。

【県内の分布】

新城市黄柳野、岡崎市滝尻町、犬山市栗栖、豊田市和合町、豊田市稲武町など。

【国内の分布】

東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、四国地方など。

【生息地の環境／生態的特性】

山地性種であり、倒木の裏面や朽ち木の内部などに生息し、昼間に這いまわることが希で、生息数も少なく発見するのが難しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

八竜緑地(守山区)および小幡緑地(守山区)の湿度の保たれた雑木林中の倒木や朽ち木の中から発見されたが、このような良好な環境が残されているところは名古屋市内には少ない。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。また、景観を意識した環境美化のためだけに、倒木、朽ち木や落葉などをむやみに取り除くのではなく、少しでも自然の状態を維持するように心がける。

【特記事項】

DNA分析の結果、*N. oscitans*には複数種が含まれるため、*N. sp.*とした(川瀬ほか, 2014)。

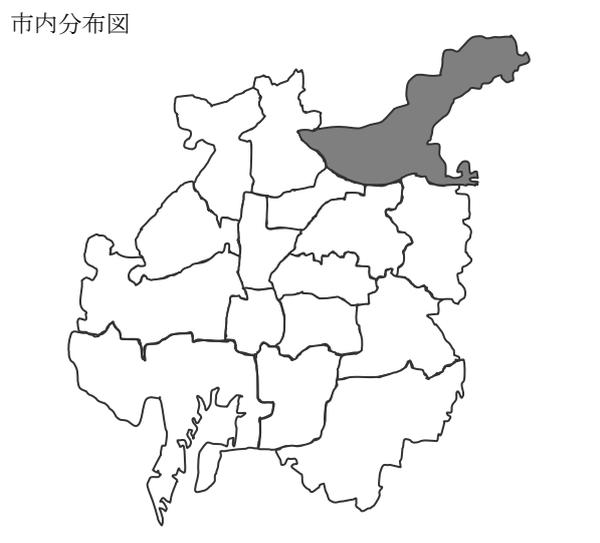
Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ332-14、採集地: 守山区小幡緑地、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘・西尾和久・森山昭彦・市原 俊, 2014. 名古屋で発見されたピロウドマイマイ類. なごやの生物多様性, 1:1-14.

【関連文献】

- 早瀬善正・多田 昭, 2005. 愛知県産のピロウドマイマイ属について. かきつばた, (31):8-19.
- 早瀬善正・多田 昭, 2008. 中部地方に分布するピロウドマイマイ属. かきつばた, (33):17-21.
- 早瀬善正・多田 昭, 2009. 東北地方に分布するピロウドマイマイ属. かきつばた, (34):14-19.
- 早瀬善正・多田 昭, 2010. 関東地方に分布するピロウドマイマイ属. かきつばた, (35):19-27.
- 川瀬基弘, 2013. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- 多田 昭, 2005. 中国地方産ピロウドマイマイ属貝類. まいご, (13):12-25.



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マルスダレガイ科>

イヨスダレガイ *Paphia (Neotapes) undulata* (Born, 1778)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県でも潮下帯の環境が著しく悪化していて、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は三河湾や伊勢湾で操業する底引き網漁船（トリガイ桁網）によって近年でも生貝が採集されるが、個体数は少ない。近年三河湾湾口部、知多半島伊勢湾側をドレッジにより調査したが、生貝は採集されなかった（木村，2000）。2008年名古屋港沖合で生貝が採集された。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや 2010 の評価区分に従った。

【形態】

殻長約4cmで殻は前後に長い楕円形。殻はやや薄く、膨らみは弱い。殻表には光沢があり、殻頂部以外には赤紫褐色の放射状の網目模様がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深6~10mの泥底から生貝が比較的多数採集された。

【県内の分布】

名古屋港沖合のほか、西條ほか（2008）に関わる中部国際空港セントレア周辺海域調査において、本種のまとまった個体群を2012年頃まで潜水調査で確認している。

【国内の分布】

房総半島、能登半島以南~琉球列島。

【世界の分布】

太平洋、インド洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。現在でも生貝は採集されているが個体数は少ない。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

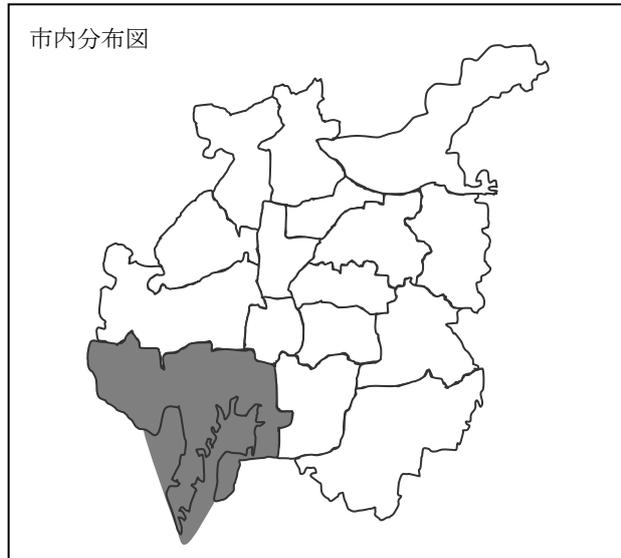
川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.
 西條八東・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008. 中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化. 海の研究，17(4):281-295.

【関連文献】

奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.
 西條八東・八木明彦・梅村麻希・寺井久慈・川瀬基弘・松川康夫・佐々木克之，2004. 中部空港島周辺における底質・底生動物を中心とした水域環境変化に関する研究. プロ・ナトゥーラ・ファンダ第13期助成成果報告書，pp.3-16.



イヨスダレガイ
愛知県三河一色、市原 俊 撮影



市内分布図

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <盤足(ニナ)目 ヤマタニシ科>

ヤマタニシ *Cyclophorus herklotsi* Martens, 1861

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は、山地性種であり(川瀬ほか, 2012)、山地の落葉の下や小石の下などに生息する。2013年7月30日、守山区竜泉寺一丁目の雑木林(庄内川左岸)で名古屋市から初めて本種が発見された(川瀬・村瀬, 2014)。個体数も非常に少ない。

【形態】

殻高10mm、殻径13.5mm。濃い茶褐色で光沢があり、螺塔は低平な円錐形。螺管は急に太くなる。大層の周縁は円い。殻口は広い円形、その口縁はやや厚く、堅く、ひろがり反転する。臍孔は広大で、前面から各螺層の一部がみられる。蓋は多旋型の革質で、円く厚く、核は中央にある。軟体部は不規則な黒い縞模様があり、触角は漆黒色。



ヤマタニシ
守山区竜泉寺、2013年7月30日、川瀬基弘 撮影

【分布の概要】

- 【市内の分布】
守山区竜泉寺一丁目。
- 【県内の分布】
瀬戸市、田原市、三河地方の山地。
- 【国内の分布】
関東地方以西日本各地。
- 【世界の分布】
朝鮮半島南部

【生息地の環境／生態的特性】

山地の落葉の下や小石の下などに生息する。湿度の高いこのような環境に生息するが、やや乾燥しがちな場所からも発見されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

志段味地区や吉根地区など守山区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより生息環境が急激に減少した。

【保全上の留意点】

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

【特記事項】

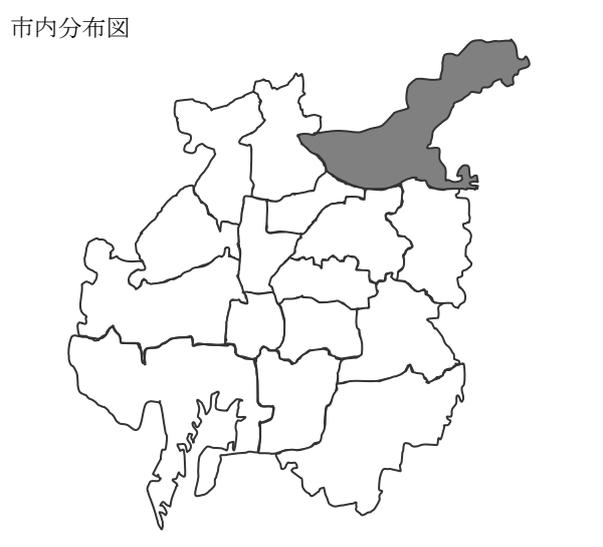
Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ437-14、採集地: 守山区竜泉寺、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

- 川瀬基弘・村瀬文好, 2014. 名古屋市初記録のヤマタニシとコベソマイマイ. かきつばた, (39):51.
- 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

【関連文献】

- 東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪府.
- 川瀬基弘, 2013. なごやで探そう!カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- 川瀬基弘, 2013. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝類. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- 川瀬基弘, 2014. 新都市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新都市の自然誌-昆虫・動物編一, pp.1-24. 新都市立鳳来寺山自然科学博物館.
- 川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 ヤマタニシ科>

ミジンヤマタニシ *Nakadaella micron* (Pilsbry, 1900)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

山地性種であり(川瀬ほか, 2012b)、緩やかな谷川沿いの落葉の下に生息する。名古屋市内の記録は熱田神宮のみであったが(守谷, 2004; 川瀬ほか, 2012a)、2012年に行われた名古屋市内の陸貝一斉調査で、名東区明徳公園のリター層から1個体のみが発見された(川瀬, 2013a, b)。

【形態】

殻は微小で、殻高 1.2mm、殻径 1.8mm、約 4 層。白く半透明で、殻表は滑らかな光沢がある。螺塔は低く、各層はよくふくらみ円い。縫合は深い。殻口は全縁で、ややうすい。臍孔は広く深い。蓋は多旋型で、円くてうすく、黄色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

熱田区熱田神宮の本殿東方の窪地斜面の落葉下、名東区明徳公園のリター層。

【県内の分布】

石巻山、嵩山、鳳来寺山麓、三河各地。

【国内の分布】

北海道以南、日本全国。

【世界の分布】

朝鮮、台湾(高雄州旗山)。



ミジンヤマタニシ
岐阜市上雑倉、2011年2月23日、市原 俊 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

山地性種であるため、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に生息している。リター層から発見されることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう!カタツムリ, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・守谷茂樹・石黒鎌三, 2012a. (8) 陸産貝類. 熱田神宮の生物調査と外来生物対策. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成23年度生物多様性保全推進支援事業), pp.136-140. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012b. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

守谷茂樹, 2004. 名古屋市の陸貝の現況 補足その1(熱田神宮). かきつばた, (30):23-26.

【関連文献】

川瀬基弘・村瀬文好・高柳茉友子・石黒鎌三, 2014. 9 陸産貝類調査 [II-4 熱田神宮の生物調査と外来生物対策]. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成25年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.134-143. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 ゴマガイ科>

ヒダリマキゴマガイ *Diplommantina (Sinica) pusilla* (Martens, 1877)

【選定理由】

2012年に、市民参加型(参加者465名)による名古屋市陸貝一斉調査(市内全16区33地点)が開催され、天白区荒池のみで発見された種である(川瀬, 2013a, b)。山地性種であるため(川瀬ほか, 2012)、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に生息している。名古屋市内では他に熱田神宮からの記録があるが熱田神宮においても生息個体数は非常に少なく最近の調査でも稀にしか見つかっていない。2012年に、新たに中村区枇杷島町(庄内川左岸)の雑木林のリター層から1個体だけが発見された。2013年には名古屋城外堀から多数の個体が発見された。名古屋城外堀を除き市内各地の個体数は非常に少ない。

【形態】

殻は左巻で、殻高2mm、殻径1mm、5層。卵形。表面には斜めの肋条がある。淡い黄色で光沢がある。縫合は深い。初めの2層は平滑、第3層は急に大きくなり、第4層は第3層と同じ大きさ。最終層は小さくなる。殻口は斜位で円い。口縁は二層で外方へ広がる。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区荒池、中村区枇杷島町、熱田区熱田神宮、中区名古屋城外堀、緑区大高町鷺津。

【県内の分布】

犬山市、小牧市、豊田市、新城市、豊川市、田原市などの県内各地。

【国内の分布】

北海道、本州、八丈島、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮。

【生息地の環境／生態的特性】

山地性種であるため(川瀬ほか, 2012)、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に生息している。リター層や腐葉土層中から発見されることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

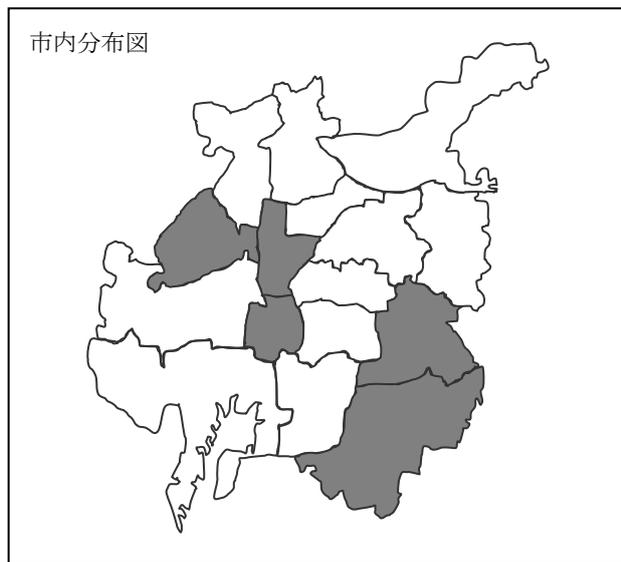
川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう!カタツムリ, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

【関連文献】

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流の河畔林に生息する陸産貝類. 矢作川研究, (16):11-26.
 守谷茂樹, 2004. 名古屋市内の陸貝の現況. かきつばた, (29):25-31.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 ワカウラツボ科>

カワグチツボ *Iravadia (Fluviocingula) elegantula* (A. Adams, 1863)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。名古屋市内では藤前干潟に健全な個体群が残っているが(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響しているため(早瀬ほか, 2014)、準絶滅危惧と判断した。

【形態】

殻は殻長約 5mm と小型で、長卵形。臍孔は狭いが開く、蓋は革質で薄い。近似種のカウラツボとは臍孔が開く点、殻が薄い点などで区別される。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の泥表面に比較的多数生息しているが(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)、生息範囲は狭い。

【県内の分布】

県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて7ヶ所程度である。生息地では群生して多産する。

【国内の分布】

北海道北部(クッチャロ湖)~九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、ロシア沿海州。

【生息地の環境/生態的特性】

県下では上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。藤前干潟ではエドガワミズゴマツボと同所的に生息している。

【現在の生息状況/減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ445-14、登録標本の採集地: 港区庄内川河口干潟、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

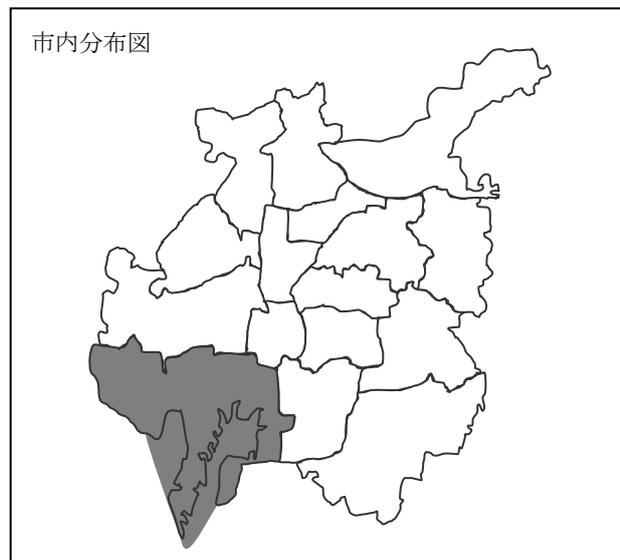
早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝5種. かきつばた, (39):31-36.
川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.

【関連文献】

福田 宏, 2012. ワカウラツボ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.38. 東海大学出版会, 秦野.
三浦知之, 2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック~全国版(南西諸島を除く)~, 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.



カワグチツボ
港区藤前干潟、2004年7月4日、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 ミズゴマツボ科>

エドガワミズゴマツボ *Stenothyra edogawensis* (Yokoyama,1927)

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。名古屋市内では藤前干潟に健全な個体群が残っているが(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響している(早瀬ほか, 2014)、準絶滅危惧と判断した。

【形態】

殻は殻長約 2mm と微小で、卵形。殻口は体層から狭まり円形。臍孔はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の泥表面に比較的多数生息しているが(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)、生息範囲は狭い。

【県内の分布】

県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在8ヶ所である。生息地では群生し、個体数は多い。

【国内の分布】

宮城県万石浦・若狭湾～九州。沖縄県から近似した個体が知られるが同種か否かは検討の余地がある(福田, 2012)。

【世界の分布】

日本固有種。朝鮮の記録はトライミズゴマツボの誤同定(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県下では、上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ434-14、採集地: 港区藤前干潟、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

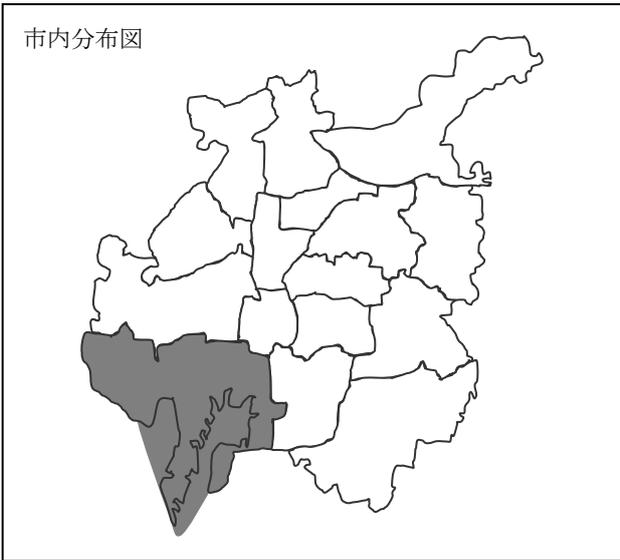
- 福田 宏, 2012. エドガワミズゴマツボ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.44. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
- 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
- 木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.

【関連文献】

- 三浦知之, 2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.
- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～, 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧



貝類

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 カワザンショウガイ科>

クリイロカワザンショウ *Angustassiminea castanea* (Westerlund, 1883)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではヨシ原湿地自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少している(木村・木村, 1999)。名古屋市内では藤前干潟と庄内川下流に分布しているが(川瀬ほか, 2009)、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響している(早瀬ほか, 2014)、準絶滅危惧と判断した。

【形態】

殻高約7mm、殻径約3mmの小型種。カワザンショウガイ科は小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は螺塔が高く、貝殻が濃い栗色であることが特徴である。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内に健全な個体群が分布しているが、生息範囲は狭い。

【県内の分布】

県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて、15ヶ所生息地がある。生息地では群生する。

【国内の分布】

陸奥湾～種子島。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。湿度が高いときにはヨシに登る。フトヘナタリと同所に見られることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地と上部の陸上植生の保全及び周辺水域の水質を保全する必要がある。

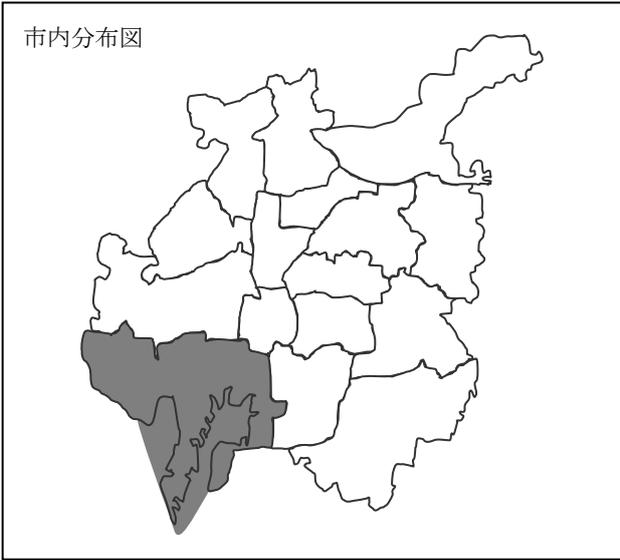
名古屋市ではレッドデータブックを作成し絶滅危惧種をリストアップしてきたが、これらの種が今尚もきわめて多種多数生息する庄内川河口域は名古屋市内に残存する最後の干潟貝類の好適生息環境(楽園)であり、ここに生息する一部の種だけに焦点を当て絶滅危惧種としてリストアップすることも重要ではあるが、もはや名古屋市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える(早瀬ほか, 2014)。

【引用文献】

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.

【関連文献】

福田宏, 2012. クリイロカワザンショウ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.46. 東海大学出版会, 秦野.



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 カワザンショウガイ科>

ツブカワザンショウ *Assiminea estuarina* Habe, 1946

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではヨシ原湿地やその周辺が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも減少した(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。名古屋市でも生息環境が確実に減少しており個体数の減少にも影響している(早瀬ほか, 2014)。

【形態】

殻高約 4mm の小型種。小型のカワザンショウガイと近似するが、本種は、殻質が厚く、螺塔は低く球形、狭いが臍孔が開く。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟のカキ礁(川瀬ほか, 2009)および庄内川河口域のヨシ原湿地や付近の転石周辺より少数ながら生きた個体が採集された。

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて5ヶ所生息地がある。

【国内の分布】

宮城県志津川湾~九州、奄美大島、沖縄島。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境/生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の砂利や転石上に生息する。

【現在の生息状況/減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地やその周辺が護岸工事などで破壊され、生息地が確実に減少している。

【保全上の留意点】

庄内川河口域は名古屋市内に残存する最後の干潟貝類の好適生息環境(楽園)であり、ここに生息する一部の種だけに焦点を当て絶滅危惧種としてリストアップすることも重要ではあるが、もはや名古屋市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまう庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える(早瀬ほか, 2014)。

【特記事項】

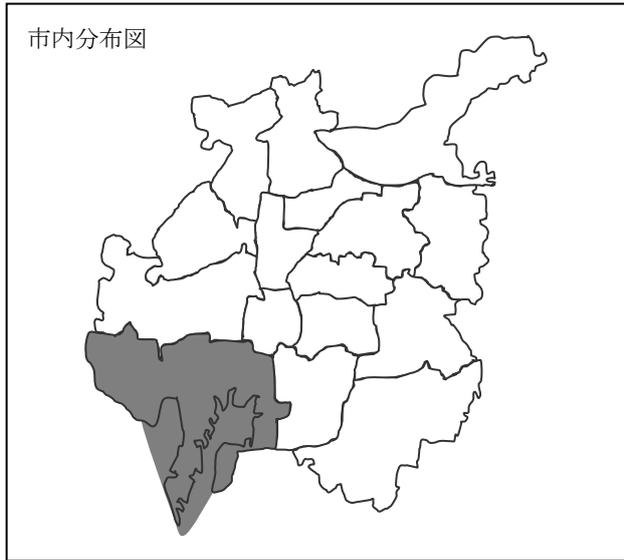
螺層上部に螺肋を持つことで別種とされていたヒメカワザンショウは、分子系統解析の結果本種と同種とされた(福田, 2012)。

【引用文献】

福田 宏, 2012. ツブカワザンショウ. 日本ペントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.48. 東海大学出版会, 秦野.
 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるヨシ原湿地の腹足類相. 日本ペントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 (執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



ツブカワザンショウ
藤前干潟、2003年8月19日、市原 俊 撮影



市内分布図

貝類 <盤足(ニナ)目 カワザンショウガイ科>

ヒナタムシヤドリカワザンショウ *Assiminea parasitologica* Kuroda, 1958

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではヨシ原湿地自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。名古屋市内では、藤前干潟と庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内に分布している(川瀬ほか, 2009: ムシヤドリカワザンショウとされているもの)。

【形態】

殻高約 6mm の小型種。カワザンショウガイ科は、小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は螺塔がやや高く、貝殻の色彩が赤く、縫合付近に黄白色の帯が入るので区別できる。臍孔はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内。

【県内の分布】

愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて 15ヶ所生息地がある。生息地では群生する。

【国内の分布】

本州～九州の太平洋岸、瀬戸内海、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。湿度が高いときにはヨシに登る。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらない(早瀬ほか, 2014)。

【特記事項】

川瀬ほか(2009)でムシヤドリカワザンショウとした種は本種の誤同定である。ムシヤドリカワザンショウは日本海側に生息し、太平洋側には生息していないため、これまでに記録された種はヒナタムシヤドリカワザンショウの可能性が高い(福田, 2012)。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ヒナタムシヤドリカワザンショウ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.48. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
- 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるヨシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
- 木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.



ヒナタムシヤドリカワザンショウ
庄内川河口、2008年11月12日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <翼舌目 イトカケガイ科>

セキモリ *Papyriscala yokoyamai* (Suzuki et Ichikawa, 1936)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の潮下帯砂泥底に棲む。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996；松岡ほか，1999）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では2008年に名古屋港沖で生貝と死殻が少数採集されている。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻高約1.5cmの低い塔型で殻は灰白色で螺層に濃褐色の色帯が2本ある。殻表は不規則にやや強い縦肋がある。臍孔は広く開く。蓋は濃褐色から黒色で革質。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深2~6mの砂泥底から生貝が1個体、死殻が少数ではあるが採集された。

【県内の分布】

豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996；松岡ほか，1999）。

【国内の分布】

房総半島、佐渡島~九州。

【世界及び国内の分布】

インド、西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息場所、生息数とも明らかに減少している。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されており、同様に保全することが必要である。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合，2000）や愛知県田原市高松の中部更新統（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友，(45):20-25.
 河合秀高，2000. 名古屋港浚渫地（金城埠頭）産貝類化石（3）巻貝（その2）. 化石の友，(47):46-49.
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

木村昭一，2012. セキモリ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.63. 東海大学出版会，秦野.



（執筆：木村昭一，加筆：川瀬基弘）

貝類 <翼舌目 イトカケガイ科>

クレハガイ *Papyriscala latifasciata* (Sowerby, 1878)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の干潟から潮下帯砂泥底に生息する。愛知県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）、日間賀島南沖などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996；松岡ほか，1999）。和田ほか（1996）では、希少とランクされている。

【形態】

殻高約 20mm の塔型で殻は淡褐色で体層に 3 本、各層 2 本の濃褐色帯をめぐらす。縦肋は白く細い。臍孔はやや広く開く。蓋は濃褐色から黒色で革質。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深 2~6m の砂泥底から新鮮な死殻が 1 個体ではあるが採集された。

【県内の分布】

豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）、日間賀島南沖などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996；松岡ほか，1999）。

【国内の分布】

房総半島、佐渡島~九州。

【世界及び国内の分布】

西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息場所、生息数とも明らかに減少している。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されているので、同様に保全することが必要であろう。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

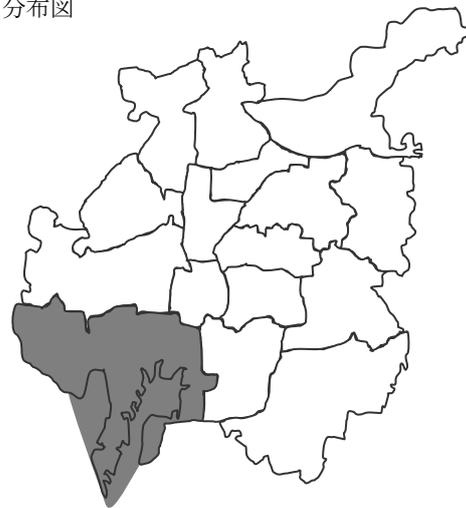
【関連文献】

木村昭一，2012. クレハガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.62. 東海大学出版会，秦野.



クレハガイ
愛知県蒲郡市、市原 俊 撮影

市内分布図



（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <異旋目 トウガタガイ科>

カキウラクチキレモドキ *Brachystomia bipyramidata* (Nomura, 1936)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種はマガキの体液を吸う外部寄生生活を行っており（三浦, 2008）、マガキのカキ礁中に見られる。しかし大規模なマガキ群集が存在しても、本種はマガキほど水質汚濁に対する抵抗性は強くないため、水質汚濁の進んだカキ礁では棲息が困難である。かつて港区藤前干潟のカキ礁ではマガキに寄生している本種を見つけることが出来たが、近年は生息を確認できない。2013年春の調査では、藤前干潟で本種を見つけることが出来ず、導流堤先端付近の庄内川河口右岸側のカキ礁からわずかな個体を発見した。市内では本種の個体数は確実に減少している。年変動を考慮し、準絶滅危惧に判断した。

【形態】

殻長約 4mm。殻はやや薄質、乳白色で黄褐色の殻皮を被る。成長線は粗く、湾曲する。軸唇には弱い襞が 1 個ある。外唇縁後端が浅く湾入する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

導流堤先端付近の庄内川河口右岸のカキ礁から生貝を 2 個体のみ発見した。

【県内の分布】

蒲郡市三谷町（木村, 2004）、西尾市幡豆町（早瀬ほか, 2011）。

【国内の分布】

松島湾、三河湾、瀬戸内海、有明海、富岡湾など（和田ほか, 1996）、東北～九州の潮間帯岩礁域や干潟。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

本種の属するトウガタガイ科の各種は、軟体動物、環形動物、星口動物の体液を吸引する自由生活型の外部寄生種であり、本種は潮間帯の干潟や岩礁のマガキ *Crassostrea gigas* の体液を吸って生活している。

【現在の生息状況／減少の要因】

藤前干潟、庄内川河口の底泥は強熱減量の値が高く（Umamura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少が要因である。

【保全上の留意点】

内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, (32):11-33.
 木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30):14-20.
 三浦知之, 2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.
 Umamura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

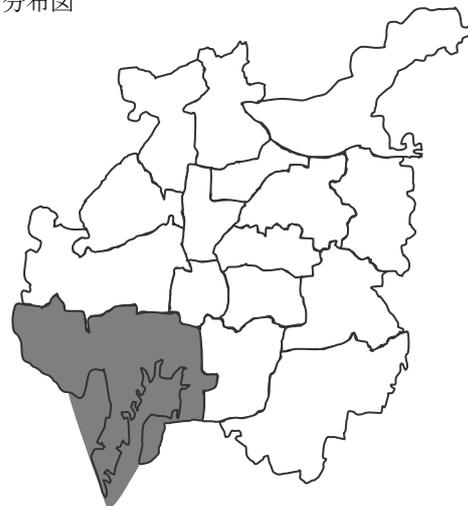
(執筆者 川瀬基弘)



カキウラクチキレモドキ

庄内川河口、2013年4月27日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <基眼(モノアラガイ)目 ヒラマキガイ科>

ヒラマキミズマイマイ *Gyraulus chinensis* Dunker, 1854

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	情報不足
環境省2014	情報不足

【選定理由】

名古屋市内のいくつかの水田から発見されたが、本種の生息する水田は限られており、市外の水田(川瀬ほか, 2011; 川瀬, 2014)に比べて水田毎の生息個体数が非常に少ない。水草の輸入に伴い近似した外国産種が移入されており、市内でも本属の外來種と考えられる個体が見つかっている。

【形態】

殻径 5mm 程度の扁平な平巻き形。周縁は円いか、わずかにキール状になる。本種はヒメヒラマキミズマイマイに比べて大型で同サイズのそれと比較すると巻き数が少ないことで区別できる。殻表は灰褐色や黄褐色を帯びた半透明で微細な成長脈がある。殻は付着物に覆われていることが多い。

【分布の概要】

【市内の分布】

市内分布図参照。ほぼ市内全域に生息すると考えられる。

【県内の分布】

県内全域。

【国内の分布】

北海道～九州、南西諸島までの日本全国。

【世界の分布】

中国、朝鮮など大陸に広く分布。

【生息地の環境／生態的特性】

日本各地の池沼や湖、水路や水田などの止水環境に生息するが、名古屋市内では主に水田の水草や水のある休耕田の植物などに付着していた。流れの速い水域には生息しない。また、汚濁の進んだ水域にはあまり生息していなかった。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内各地の水田に生息するが、本種の生息は特定の水田に限られ、全く生息していない水田も多い。また、水田毎の個体数は少ない。水質汚濁や冬季の乾田化などが減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

水質汚濁や冬季乾田化の防止。溜池では水草など、本種が付着できる水生植物が豊富な環境作りをする。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ424-14、GBJ425-14、GBJ426-14、GBJ428-14、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞享ほか(編), 新城市の自然誌—昆虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.

【関連文献】

川瀬基弘, 2010. 3貝類. なごやため池生きもの生き生き事業報告書, pp.69-72. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・森山昭彦・家山博史, 2012. 岐阜市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (54):33-42.

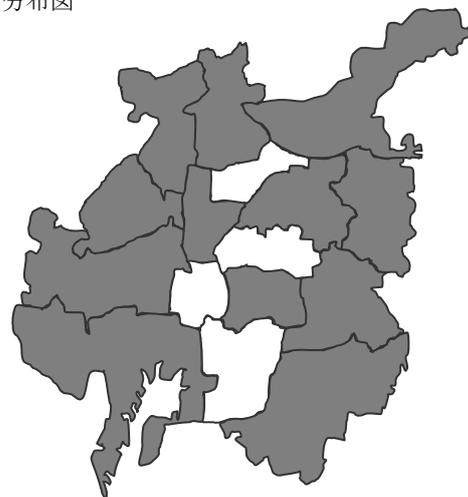
Mori, S., 1938. Classification of the Japanese *Planorbidae*. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2):279-300, pls.12-18.



ヒラマキミズマイマイ

豊田市東大見町、2012年8月16日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 ヒラマキガイ科>

ヒラマキガイモドキ *Polypylis hemisphaerula* (Benson, 1842)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は、ヒラマキミズマイマイやヒメヒラマキミズマイマイとともに愛知県内各地の水田に生息しているが、名古屋市内のこれらの微小淡水貝は詳細な調査がなされていなかった。今回の調査で市内の主要な水田を概ね調査したが、本種が発見されたのは守山区太田井の水田のみであった。年による消長が著しく、今後新たに別の場所で発見されたり個体数が増加する可能性もあるが、現時点で生息地、個体数とも限られている。

【形態】

殻径 5mm 程度の平巻き形。体層の底面は平らで、臍孔は急激に落ち込み狭く深い陥没となる。螺塔は緩やかな弧を描き、殻頂部は浅く陥没する。螺管下面からは畝状の内彫刻が数本透視できる。螺管内の反対側にも同様な内突起がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区太田井の水田。

【県内の分布】

美浜町、日進市、岡崎市、西尾市、豊田市、新城市、田原市など県内各地（湖沼や水田の水草に付着して生活する）。

【国内の分布】

北海道以南、本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

湖沼の水草や水田の稲など水生植物に付着して生活する。停滞性水域に生息するため、流れのある河川や水路にはほとんど生息していない。

【現在の生息状況／減少の要因】

例えば、岐阜市内では水質の綺麗な水田から汚濁の進んだ市街地の水田まで幅広く生息しているが（川瀬ほか、2012）、極端に汚濁の進んだ水田ではやや個体数が少ない傾向にあった。過去の名古屋市内の情報がないうえ、もともと生息地と個体数少なかった可能性も否定できないが、市内の水田は水質汚濁が進んでおり、本種が生息できる環境は確実に減少している。

【保全上の留意点】

水質汚濁や冬季乾田化の防止。溜池では水草など、本種が付着できる水生植物が豊富な環境作りをする。

【特記事項】

ヒラマキガイ科の巻貝は、外来種が海外の水草に付着して観賞魚とともに輸入されており、それらが市内の溜池などに帰化している可能性が高く、今後は水田などでも同科の外来種が発見される機会が増えると考えられる。

【引用文献】

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・森山昭彦・家山博史, 2012. 岐阜市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (54):33-42.

【関連文献】

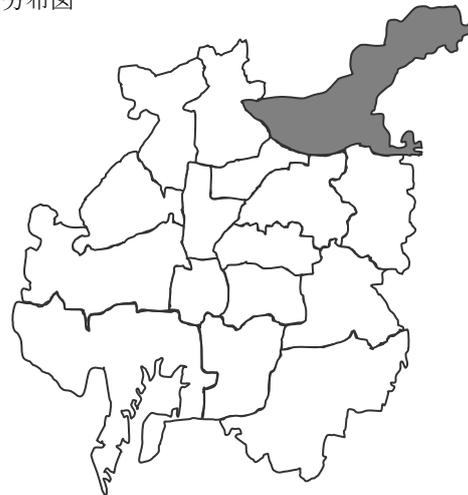
川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.

Mori, S., 1938. Classification of the Japanese Planorbidae. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2):279-300, pls.12-18.



ヒラマキガイモドキ
豊田市蕪木町、2014年9月27日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 タワラガイ(ネジレガイ)科>

タワラガイ *Sinoennea iwakawa* (Pilsbry, 1900)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

2012年に、市民参加型(参加者465名)による名古屋市陸貝一斉調査(市内全16区33地点)が開催され、その際名古屋市から初めて発見された種である(川瀬, 2013a, b)。山地性種であるため(川瀬ほか, 2012)、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に生息している。発見された細根公園(緑区)は、一般公開される比較的最近まで手つかずの状態の自然が残っていたため本種が生き残っていたと考えられる。個体数は少なく、現時点で名古屋市内からの記録は細根公園のみであるため、今後の環境改変によって個体数は減少していく可能性が高い。

【形態】

殻高4mm、殻径1.5mm。殻は昔の米俵に似た白色蛹形で微小。体層に続く3層の殻幅はほとんど同じ。各螺層には多数の板状の強い縦肋がある。殻口外唇には2個、軸唇上にも1個の結節状突起がある。軟体部は灰白色。

【分布の概要】

【市内の分布】

細根公園(緑区)。

【県内の分布】

石巻山、嵩山(野々部ほか, 1984)、豊田市各地(川瀬, 2012)、新城市副川諏訪神社(川瀬, 2014)など。

【国内の分布】

関東地方以西、四国、九州、屋久島、奄美大島。

【世界の分布】

朝鮮済州近郊。

【生息地の環境/生態的特性】

県内の分布域では、リター層中や腐葉土層中から発見されることが多いが、腐肉食性あるいは肉食性の陸貝とされており、大型陸貝の死殻の中から発見されることもある。

【現在の生息状況/減少の要因】

自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

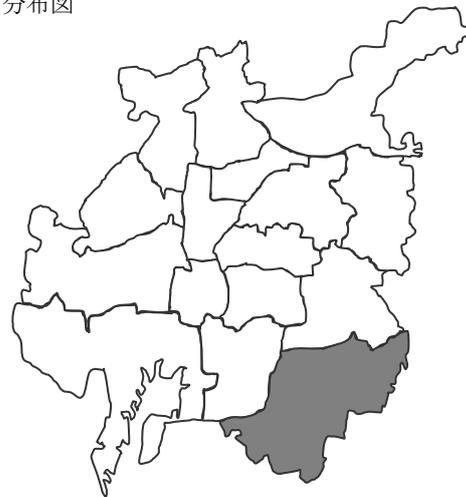
川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
 川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう!カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きもの一斉調査2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新城市の自然誌-昆虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.
 野々部良一・高桑弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤尚(編), 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会.

(執筆者 川瀬基弘)



タワラガイ
 緑区細根公園、2012年10月6日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

ヒメカサキビ *Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry, 1901)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

高座結御子神社、八竜緑地、相生山緑地、小幡緑地公園、東山公園などの比較的自然度の高い雑木林や緑地公園などで生息が確認されたが、個体数は少なく、宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化により生息地や個体数は減少していると考えられる。

【形態】

殻は微小で殻高 2.2mm、殻径 3mm 程度。淡い褐色で半透明。カサキビより著しく低い円錐形。螺層は緩やかに膨れる。体層の周縁角は鋭く突起している。殻表は繊細な糸状縦脈と多少不明瞭な螺状脈を現す。殻口はやや菱形、その周縁は薄い。軸唇はやや垂直にわずかに広がる。臍孔は狭く開いている。軟体は淡灰～赤褐色。触角は黒褐色。



ヒメカサキビ
豊田市野原町、2009年7月6日、西尾和久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

高座結御子神社(熱田区)、八竜緑地(守山区)、相生山緑地(天白区)、小幡緑地公園(守山区)、東山公園(千種区)。

【県内の分布】

豊田市や新城市など県内各地。

【国内の分布】

本州、三宅島、八丈島、四国、九州。

【生息地の環境／生態的特性】

湿度の保たれたリター層、落葉下などに生息する。岐阜市の全域調査では、本種の分布は北部から中部の山地に集中し南部の平地、市街地には分布しない(川瀬, 2014)。豊田市では自然度の高い平地を除き、山地に分布記録が多い(川瀬, 2012)。このように本種は山地性種であり、本種の分布は比較的自然度が高い指標になる。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したとおり、宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【特記事項】

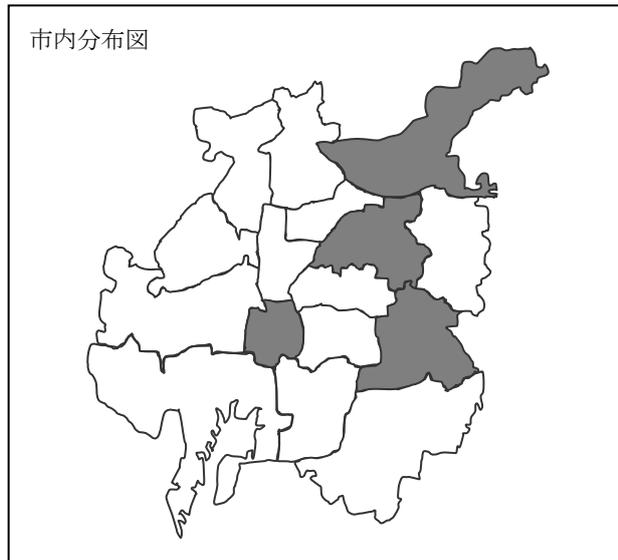
Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ439-14、採集地: 天白区相生山緑地、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

- 東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪.
- 川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
- 川瀬基弘, 2014. 11 貝類. 岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～, pp.197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課.

【関連文献】

- 川瀬基弘, 2012. 自然豊かな名古屋 41 種の陸貝を発見. 生きものシンフォニー5号. なごや生物多様性センター, 名古屋.
- 川瀬基弘, 2013. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- 川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

ウメムラシタラ *Coneuplecta (Sitalina) japonica* Habe, 1964

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

平地性～山地性種であり低標高の比較的自然度の高い森林の落葉下での記録が多い。やや乾燥に弱いため、湿度のある環境を好むようである。名古屋市内では生息記録が少なく、局所的に大量発生する例が知られているが、大量発生は一時的ですぐに激減、消滅することが多い。本調査では守山区と天白区から生貝を発見しているが、それぞれの生息地において個体数は少なかった。中区の護国神社では過去に多くの個体が記録されたことがあるが今回の調査では確認できなかった。

【形態】

殻は微小で、殻高約 1.2mm、殻径 1.8mm 程度。螺塔が低く、巻数は少なく、低い円錐形。縫合はくびれ、各層には段差を有し、3本程度の螺状肋を持つ。体層底部は平たく、周縁の角は尖らない。殻は淡黄褐色。殻口は肥厚・反転せず、内部に歯はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区相生山緑地、中区護国神社、守山区竜泉寺、緑区大高町鷺津など。

【県内の分布】

豊田市内の山地各地、新城市副川諏訪神社、豊橋市石巻町石巻山など。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

巨文島(韓国)。

【生息地の環境／生態的特性】

平地性～山地性種であり低標高の比較的自然度の高い森林の落葉下での記録が多い。また、自然度の高い緑地公園、寺社林や河畔林のリター層や腐葉土層にも生息している。比較的乾燥に弱く、湿度のある環境を好むようである。極めて局所的に大量発生することが多いが、一時的であることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【特記事項】

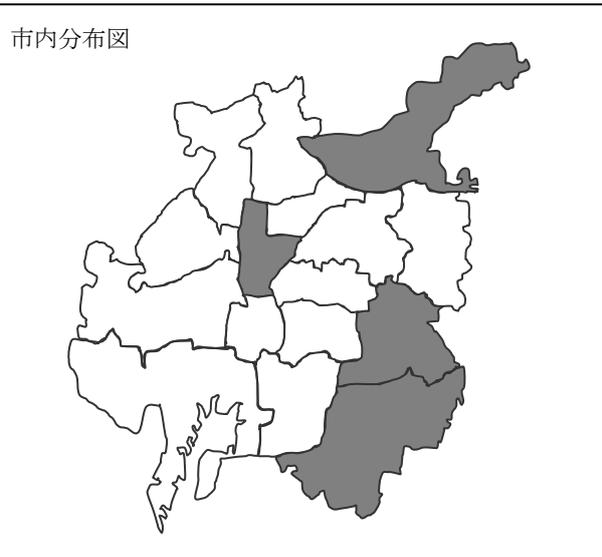
Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ444-14、登録標本の採集地: 名古屋市天白区相生山緑地、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【関連文献】

川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.



ウメムラシタラ
天白区相生山緑地、2014年5月24日、川瀬基弘 撮影



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

ヒラベッコウガイ *Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry, 1900)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	情報不足
環境省2014	情報不足

【選定理由】

山麓～平地に生息する種であり、例えば、愛知県豊田市(川瀬, 2012)や岐阜県岐阜市(川瀬ほか, 2012)などでは市内各地に分布するものの各地の個体数は極めて少なく、稀にしか見つからない。そのため分布情報も少なく、環境省や愛知県では情報不足にランクされている。名古屋市内では2012年に大規模な一斉調査が行われたが(川瀬, 2013a,b)、本種の発見には至らず、2013年に守山区吉根の荒地(庄内川左岸)で新鮮な死殻1個体のみが発見された。

【形態】

殻はやや小形で、殻高5mm、殻径10mm程度。半透明、淡い黄褐色で光沢が強い。螺塔は低く扁平で、わずかに緩やかに突出する。各層は緩やかに広がり、体層は著しく広くなり、その幅は次体層の倍である。周縁は円い。殻表は滑らかで、繊細な成長線と細密な螺線によって彫刻されている。殻口はわずかに斜位で広い新月形、その周縁は鋭く尖る。殻軸は前方へ広がる。臍孔は狭く、その幅は殻径の1/10ぐらいである。



ヒラベッコウ
豊田市大滝町、2011年10月10日、西尾和久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

2013年に守山区吉根の荒地(庄内川左岸)で新鮮な死殻を1個体のみ確認した。

【県内の分布】

長久手町、瀬戸市、豊田市、新城市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州とその属島。

【生息地の環境／生態的特性】

落葉樹林などの比較的自然度の高い雑木林に生息している。ある程度の湿度を保ったリター層や朽ち木の中からも発見され、乾燥にはあまり強くない。

【現在の生息状況／減少の要因】

自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような劣悪な環境が増加している。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。景観に重視した倒木や朽ち木の撤去を避け自然の状態を維持することが重要である。

【引用文献】

川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
 川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう!カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ナンバンマイマイ科>

コベソマイマイ *Satsuma myomphala* (Martens, 1865)

【選定理由】

本種は山麓から平地に生息し、国内の分布域では南の方が小型化する傾向があり多産する地域もあるが、東海地域では比較的個体数が少なく希少な種である。愛知県では稀にしか見つからず、例えば豊田市では生息地は極めて限局的であり(川瀬, 2012)、個体数も非常に少ない。今回の調査では名古屋市守山区吉根の雑木林で、生貝を発見したが個体数は非常に少なかった(川瀬・村瀬, 2014)。

【形態】

殻は大形でやや薄く、殻高 30mm~35mm、殻径 40~50mm。螺塔は低く、淡い黄褐~赤褐色。周縁に赤褐色の色帯がある。縫合は浅い。殻口は斜位でやや広い半円形。外唇はうすくわずかに反転する。臍孔は閉じる。軟体の背面はアメ色。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区吉根の荒地(庄内川左岸)。

【県内の分布】

野々部ほか(1984)によれば、県下では豊田地方に稀産と記されている。近年、豊田市小原地区四季桜公園や石野地区東広瀬町で生貝を確認している(川瀬ほか, 2012)。

【国内の分布】

本州(中部以西)、四国、九州。山口県見島(鯖島)には矮小型が分布する。

【生息地の環境/生態的特性】

山麓から平地に生息し、個体数は非常に少ないが、豊田市や岐阜市では河畔林の雑木林で発見されている。

【現在の生息状況/減少の要因】

守山区の志段味地区や吉根地区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより生息環境が破壊されたか、もしくは消失した。

【保全上の留意点】

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ438-14、登録標本の採集地: 名古屋市守山区吉根、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
- 川瀬基弘・村瀬文好, 2014. 名古屋市初記録のヤマタニシとコベソマイマイ. かきつばた, (39):51.
- 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類. 矢作川研究, (16):11-26.
- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚(編). 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

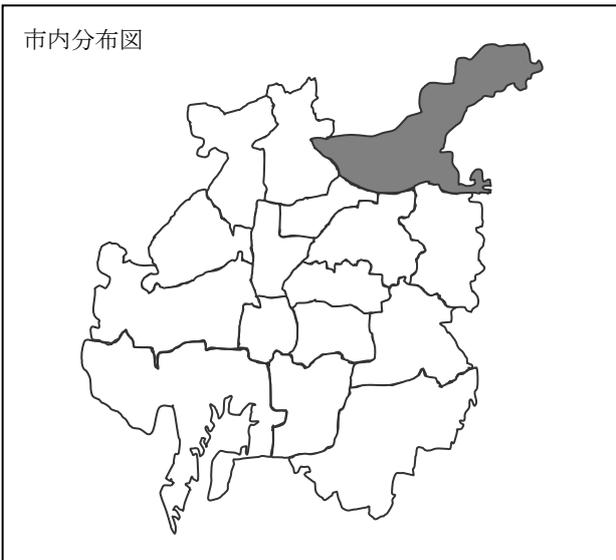
川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



コベソマイマイ
守山区吉根、2014年1月23日、村瀬文好 撮影



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ナンバンマイマイ科>

ニッポンマイマイ *Satsuma japonica* (Pfeiffer, 1847)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本州各地の山地から平地の雑木林や周辺の草むらなどに生息するが、名古屋市内の分布は極めて限られており、発見された2ヶ所ともに生息個体数はとても少なかった。本種が生息する守山区(川瀬, 2013)の環境が破壊されれば市内から絶滅する可能性もある。

【形態】

殻は薄く半透明で黄褐色～濃褐色の山形に尖った円錐形。カドバリニッポンマイマイ、ヌノメニッポンマイマイ、マルニッポマイマイ、コニッポンマイマイなど亜種または型に分けられる。雑木林周辺の草むらなどで見られる。守山区で発見された個体は、ある程度周縁角が発達するカドバリニッポンマイマイ型 *Satsuma japonica carinata* の個体であった。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区上志段味東谷山(瀬戸市との境界付近の雑木林)と守山区竜泉寺1丁目付近(庄内川左岸の雑木林)。

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

本州に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

守山区上志段味東谷山(瀬戸市との境界付近の雑木林)と守山区竜泉寺1丁目付近(庄内川左岸の雑木林)の2ヶ所のみで発見されている。いずれも雑木林であり、倒木や朽ち木を起こして発見された。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区の志段味地区や吉根地区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより生息環境が破壊されたか、もしくは消失した。

【保全上の留意点】

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ436-14、採集地: 守山区竜泉寺、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013. 名古屋市内でニッポンマイマイを発見. 生きものシンフォニー7号. なごや生物多様性センター, 名古屋.

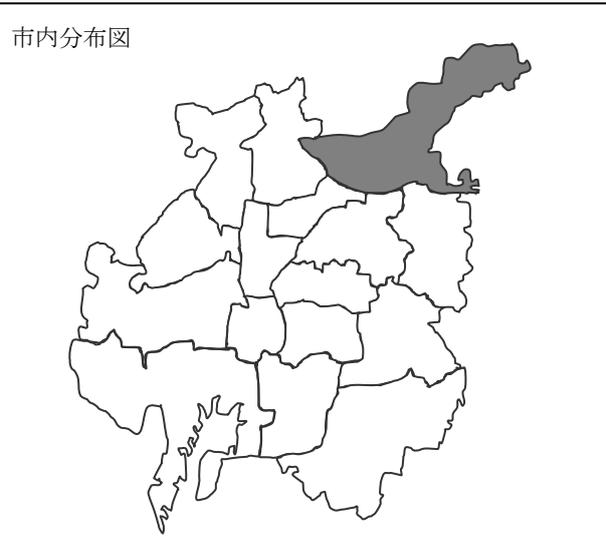
【関連文献】

- 川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
- 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新城市の自然誌—昆虫・動物編—, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
- 川瀬基弘, 2014. 11 貝類. 岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～. pp. 197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課.
- 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類. 豊橋市自然史博研報, (21):31-43.
- 川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.

(執筆者 川瀬基弘)



ニッポンマイマイ
守山区上志段味東谷山、2013年1月9日、川瀬基弘 撮影



市内分布図

貝類 <柄眼(マイマイ)目 オナジマイマイ科>

オオケマイマイ *Aegista vulgivaga* (Schmacker et Boettger, 1890)

【選定理由】

本種は山地性種であり(川瀬ほか, 2012)、溪流沿いの緩やかな斜面や石灰岩地帯に多く生息する。名古屋市内では、本種が生息できる自然度の高い雑木林は少なく、生息地、個体数ともに減少している。市中区三の丸一丁目の護国神社と守山区の庄内川河畔林にはある程度の個体群が維持されているが、分布域は狭い。また、2013年には瑞穂区村上町の民家の庭でも本種の生体が発見されており、絶滅を免れた個体が飛び的に生き残っていると考えられる。

【形態】

殻高 11~15mm、殻径 20~30mm 程度。殻は低く扁平なレンズ形をした螺塔。殻色は黄褐色から鈍い褐色。周縁角は鋭くとがり、殻表に鱗片状の剛毛を放射状にもち、臍孔は広く深い。殻口は菱形。その上縁は薄く、下縁は厚く白色で光沢がある。軟体は淡褐色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

名古屋城外堀(中区)、護国神社(中区)、瑞穂区村上町、守山区竜泉寺。

【県内の分布】

豊田市、新城市、田原市、岡崎市、豊橋市、豊川市など県内各地に広く分布する。

【国内の分布】

本州(関東、越後、佐渡以南)、中部、近畿、中国、四国地方。

【生息地の環境/生態的特性】

本種が好む溪流沿いの緩やかな斜面や石灰岩地帯は名古屋市内に存在しないが、やや自然度の高い雑木林(名古屋城外堀や守山区竜泉寺)に生息している。

【現在の生息状況/減少の要因】

中区三の丸の護国神社と守山区の庄内川河畔林にはある程度の個体群が維持されているが、分布域は狭く限られており、本種が生息できるような湿度の保たれた自然度の高い雑木林は名古屋市にはあまり残されていない。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【特記事項】

愛知県下では本種が棲息する好環境が各地に残されており生息場所、個体数ともに多いが、都市化が進んだ名古屋市内ではこのような好環境が激減した。

【引用文献】

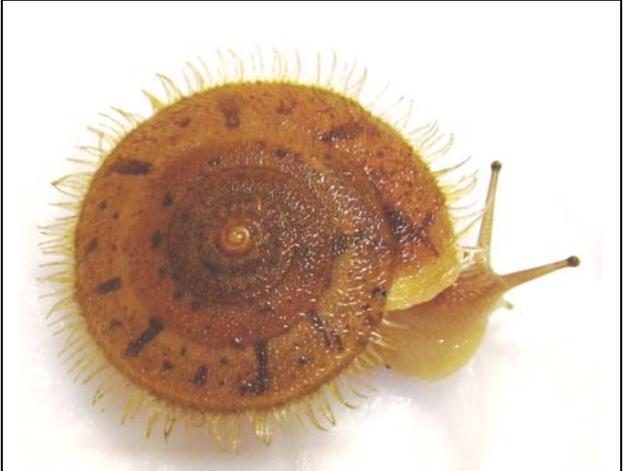
川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

【関連文献】

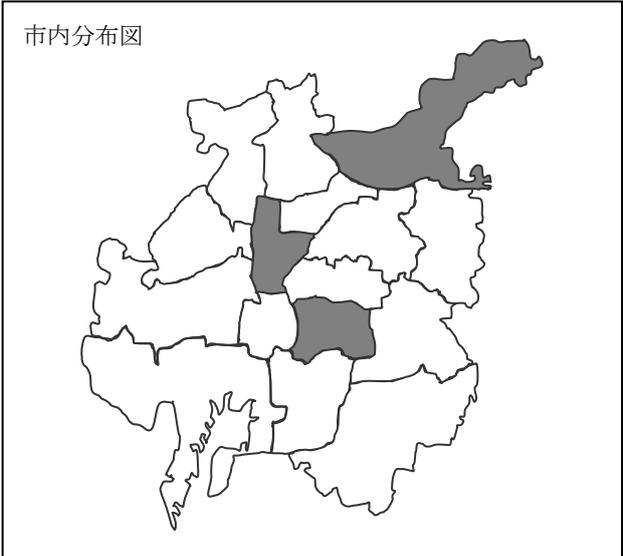
川瀬基弘, 2012. 自然豊かな名古屋 41 種の陸貝を発見. 生きものシンフォニー5号. なごや生物多様性センター, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会.
 川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



オオケマイマイ
 中区護国神社、2012年10月6日、川瀬基弘 撮影



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <イガイ目 ハボウキガイ科>

タイラギ *Atrina pictinata* (Linnaeus, 1767)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底に突き刺さるように深く埋没し、後端だけを出して生息する。愛知県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部の渥美湾で海水浴客が誤って踏んで足をけがするほど多産した(愛知県科学教育センター, 1967)。しかし、近年三河湾奥部では死殻すら採集できない。三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっているが、その量は年々減少している。和田ほか(1996)では危険にランクされている。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で生貝と死殻が少数採集されている。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻長25cmを越える大型種。長い三角形の殻で、黒褐色。殻はやや厚いが脆い。貝殻中央部の貝柱は大きく美味で「たいらがい」の通称で呼ばれる水産有用種である。本種はいわゆるタイラギの有鱗型で、無鱗型のズベタイラギに比べ鱗片状突起が顕著である。



タイラギ
長崎県島原市、市原 俊 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深2~5mの泥底から生貝が1個体、死殻が少数採集された。

【県内の分布】

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺の潮下帯。西條ほか(2008)によるセントレア周辺海域の調査では、継続調査時に2010年の潜水調査で本種の生貝を確認した。

【国内の分布】

本州~九州。

【世界の分布】

中国大陸沿岸の類似種との関係は不明で、分布範囲も未解明である(山下・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているので、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

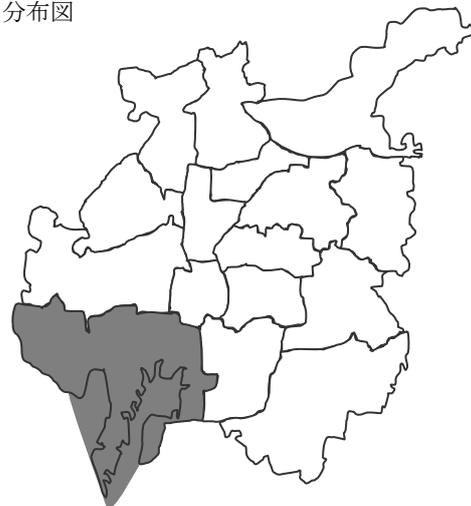
水産資源保護協会(1997)では減少にランクされている。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫, 2008. 中部国際空港島建設による水質, 底質, 底生生物群集の劣化. 海の研究, 17(4):281-295.
 水産資源保護協会, 1997. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(IV), 126pp.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 山下博由・木村昭一, 2012. タイラギ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.114. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

市内分布図



貝類 <マルスダレガイ目 ツキガイ科>

ツキガイモドキ *Lucinoma annulatum* (Reeve, 1850)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されるが、個体数は少ない(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で生貝が少数採集されている。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻長約30mmで殻は類円形で膨らみは弱い。殻表は間隔の広い板状の輪肋がある。殻は白色であるが、生時や新鮮な死殻には茶褐色の殻皮がある。殻頂は小さく低い。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深2~15mの泥底から生貝が少数個体、死殻が多数採集された。

【県内の分布】

上述したように、生息場所、生息数が減少している。2003年の潜水調査でセントレア周辺海域から生貝1個体を採集した。

【国内の分布】

日本海、南西北海道以西。

【世界の分布】

アラスカ、カリフォルニア。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、イセシラガイなどと共に本種の化石記録がある(川瀬, 2013)。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)~鶴飼修司コレクションの貝類化石~. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
 中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.

【関連文献】

奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 西條八東・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫, 2008. 中部国際空港島建設による水質, 底質, 底生生物群集の劣化. 海の研究, 17(4):281-295.



ツキガイモドキ
産地不詳、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

ヒメシラトリ *Macoma incongrua* (Martens, 1865)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の奥部の泥干潟から潮下帯に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村, 2000）、豊川河口域（松岡ほか, 1999）、蒲郡市などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。名古屋市内では庄内川河口から名古屋港沖合まで生息しているが、生息数が少なく、絶滅が危惧される。

【形態】

殻長約2cmで殻は卵形でこの類としては膨らみがやや強い。殻はやや薄く白色、殻頂部が紅彩される個体が多い。殻表には薄い殻皮をもつ。後端は裁断状。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟、新川河口域、庄内川河口域の泥質干潟より少数ながら生きた個体が採集された。また、2008年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深2~6mの砂泥底から生貝が少数、新鮮な死殻が多数採集された。

【県内の分布】

汐川、東幡豆、三河一色、神野新田、河和、師崎、矢作川など。

【国内の分布】

北海道~九州。

【世界及び国内の分布】

サハリン、アラスカ、カナダ。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯から潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬, 2013）。

【引用文献】

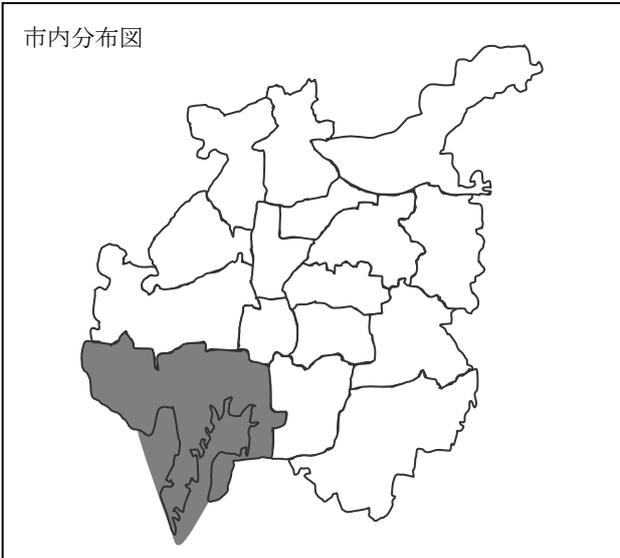
藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.
 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)~鶴飼修司コレクションの貝類化石~. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己, 1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (9):15-24.

【関連文献】

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, (32):11-33.
 川瀬基弘, 2002. 矢作川河口域における干潟の底生生物相. 矢作川研究, (6):81-98.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.



ヒメシラトリ
庄内川河口、2008年3月24日、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

ゴイサギガイ *Macoma tokyoensis* Makiyama, 1927

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集され、健全な個体群が残されているが（中山，1980；木村，1996；木村，2000）、名古屋港沖合では死殻は多いが生貝の個体数は少なく、絶滅が危惧される。

【形態】

殻長約5cmで、殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色で成長脈に沿って色彩の濃淡がある。殻周辺部の殻表にはやや厚い殻皮を持つ。後背縁は張り出して後端は少しがかる。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深10～15mの泥底から生貝が少数個体、死殻が多数採集された。

【県内の分布】

上述のほか、2011年にセントレア周辺海域で生貝を確認した。

【国内の分布】

北海道南西部～九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合・千葉，1996）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

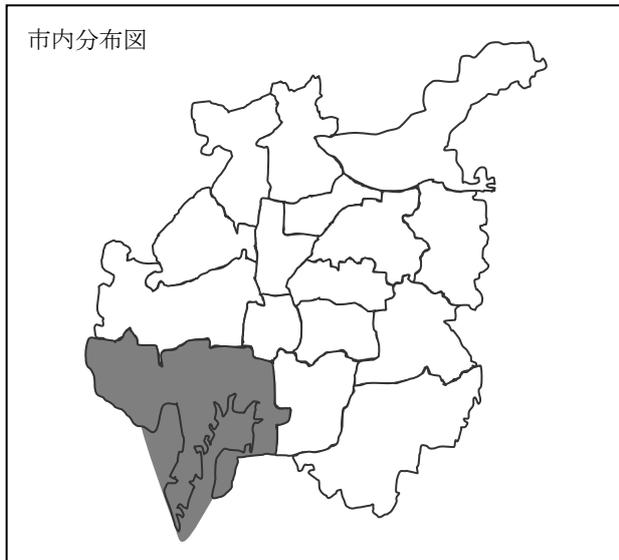
蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
 河合秀高・千葉正己，1996. 名古屋港13号地浚渫地より産出した貝類化石(1) 二枚貝・角貝. 化石の友, (43):21-25.
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.

【関連文献】

奥谷喬司(編)，2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 西條八東・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008. 中部国際空港島建設による水質、底質、底生生物群集の劣化. 海の研究, 17(4):281-295.



ゴイサギガイ
産地不詳、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

ユウシオガイ *Moerella rutila* (Dunker, 1860)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾の最も奥部の砂泥干潟に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、豊川河口域（松岡ほか，1999）、蒲郡市などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では2013年に庄内川河口干潟で少数の生貝を発見した。

【形態】

殻長 15～20mm で殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色、黄色、橙色など個体変異がある。後端は裁断状。トガリュウシオガイに似るが殻頂の成長脈が弱く密であることで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟（川瀬ほか，2009）や庄内川河口域の泥質干潟より少数ながら生きた個体が採集された。

【県内の分布】

汐川干潟、豊川河口域、三河一色、東幡豆（早瀬ほか，2011）、蒲郡市。

【国内の分布】

陸奥湾～九州。

【世界及び国内の分布】

朝鮮半島、中国大陸、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

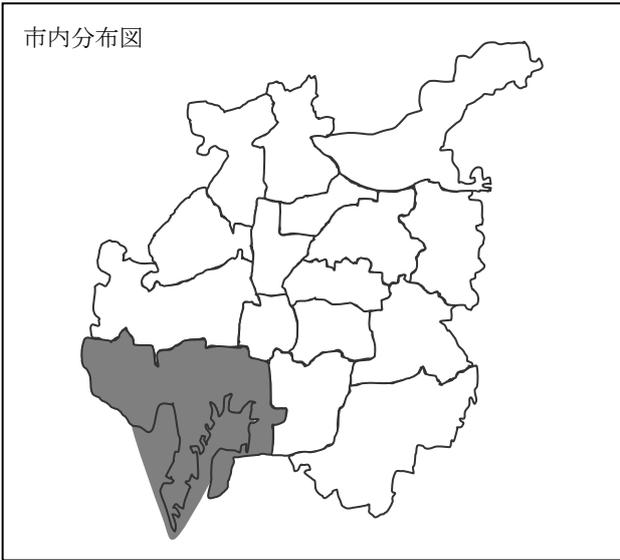
内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子，2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.
 早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士，2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告，(32):11-33.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報，(19):11-20.
 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

木村昭一，2012. ユウシオガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.126. 東海大学出版会，秦野.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告，(22):31-64.



（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

サクラガイ *Nitidotellina hokkaidoensis* (Habe, 1961)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾の潮間帯から潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部から湾口部にかけての広い範囲で打ち上げられる貝としてごく普通で、また多産したが（愛知県科学教育センター，1967）、現在では打ち上げられる海岸も激減し、明らかに生息場所、生息数とも減少している。近年でも三河湾湾口部の一部では健全な個体群が残っているが、そのような場所は少ない（木村，1996；木村，2000）。市内では2008年に名古屋港沖で生貝が少数採集されたが、2013年の港区の干潟調査では本種を発見することができなかった。

【形態】

殻長約2cmで殻は長い卵形で膨らみは非常に弱く扁平。殻は薄く桃色で殻表は平滑で光沢がある。稀に白色個体が出現する。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深2~6mの砂泥底から生貝が少数、新鮮な死殻が多数採集された。

【県内の分布】

東幡豆、寺部（早瀬ほか，2011）。2002~07年にかけての中部国際空港セントレア東の水深4m付近の潜水調査では、生貝が多数発見されている。

【国内の分布】

北海道南西部~九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、ニューカレドニア。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

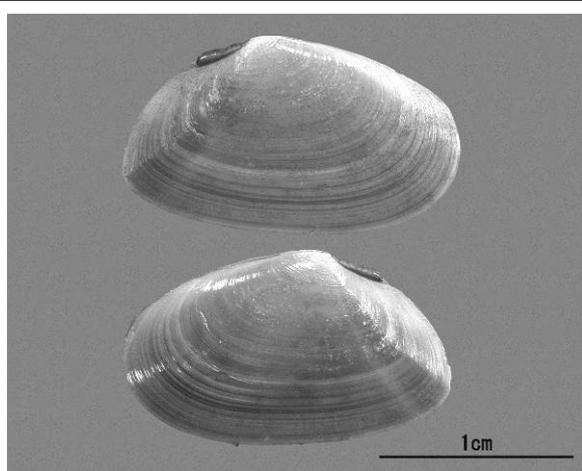
愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

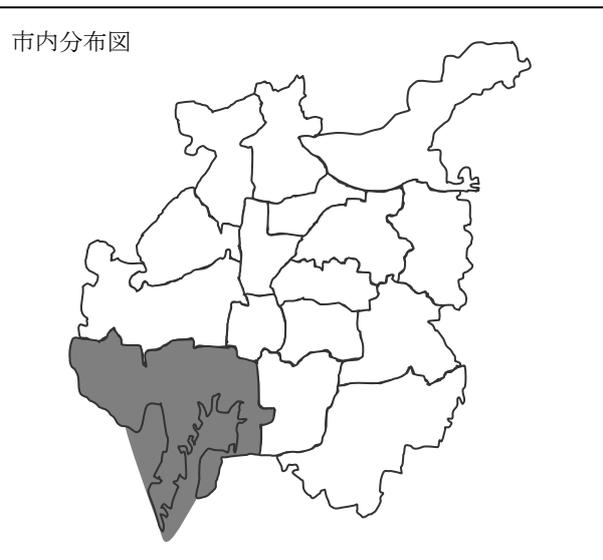
愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
 早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士，2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告，(32):11-33.
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会。
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.

【関連文献】

木村昭一，2012. サクラガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.126. 東海大学出版会，秦野。
 西條八東・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008. 中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化. 海の研究，17(4):281-295.



サクラガイ
 名古屋港沖水深6m、2008年10月9日、木村昭一 撮影



市内分布図

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 シオサザナミガイ科>

イソシジミ *Nuttallia japonica* (Reeve, 1857)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

潮間帯から水深 10m の砂泥底に生息し、愛知県下では比較的
多産する地域もある。名古屋市の藤前干潟では死殻が多数打ち
上がっていることがあるが、生貝は稀にしか見つからない。藤
前干潟、庄内川河口干潟、新川河口干潟で生貝を確認したが、い
ずれも個体数は少なかった。底泥は強熱減量
の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状
態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息
が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干
潟自体の減少により本種の個体数は確実に減
少していると判断した。

【形態】

殻長約 43mm、殻高約 30mm。殻は薄く、
卵形で膨らみは弱い。殻表は平滑で殻皮を被
る。左殻が右殻より膨らみ、右殻は偏平。套
線湾入はやや深く、やや尖る。殻頂付近には
数本の放射状の白帯がある。内面は紫色。

【分布の概要】

【市内の分布】

新川河口、庄内川河口、藤前干潟の砂泥底
の深さ 50cm 程度に棲息(川瀬ほか, 2009)。

【県内の分布】

神野新田、東幡豆、三河一色、矢作川河口、
汐川干潟、伊良湖岬、美浜町、日間賀島など
県内各地。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

サハリン、朝鮮半島、中国大陸沿岸。

【生息地の環境／生態的特性】

潮間帯～水深 10m ほどの砂泥底に潜って
棲息する。水管を伸ばして水中の懸濁物を捕
食する濾過摂食者。藤前干潟では砂泥底の深
さ 50cm 程度に潜っている。矢作川河口域で
は、アサリの棲息帯より深い砂底に潜ってお
り、30～50cm まで砂泥を掘ると比較的沢山
の生貝を見つけることが出来た。

【現在の生息状況／減少の要因】

藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く、潮
流が停滞するときは貧酸素状態が形成されや
すい。干潟自体の減少、水質や底質の汚濁が
個体数の減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

干潟環境の保全。水質や底質の汚濁防止。

【引用文献】

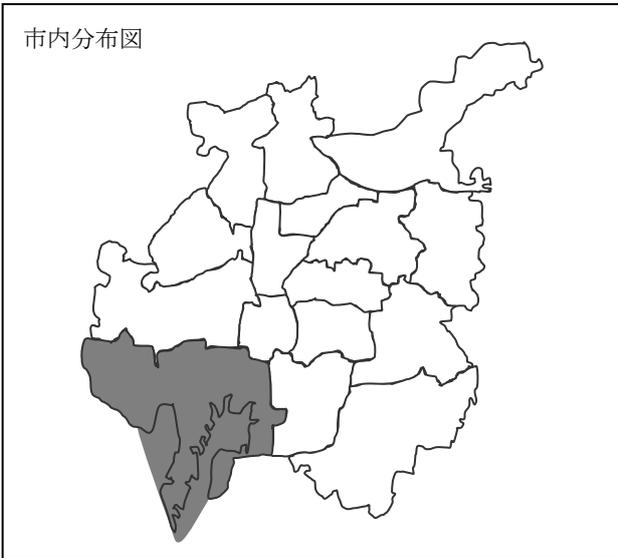
川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.

【関連文献】

川瀬基弘・梅村麻希・八木明彦, 2009. 干潟に生息する二枚貝類の炭素・窒素除去. 第 8 回 海環境と生物および沿岸環境
修復技術に関するシンポジウム 発表論文集, pp.67-72. 海底環境研究会, 静岡.
早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた,
(39):31-36.
八木明彦・大八木麻希・川瀬基弘・横山亜希子, 2014. 藤前干潟の底泥・海水における炭素・窒素の除去－潮溜まり・底泥
間隙水・二枚貝中心として－. 陸の水, (64):1-9.



イソシジミ
新川河口干潟、2004年6月5日、市原 俊 撮影



市内分布図

(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マテガイ科>

マテガイ *Solen (Solen) gordonis* Yokoyama, 1920

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

潮間帯の砂底にやや深く潜って生息し、名古屋市を除く愛知県下では各地で比較的普通に見られる。名古屋市の藤前干潟では極めて稀に生貝が発見されるが、死殻もほとんど見かけない。藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により本種の個体数は確実に減少していると判断した。

【形態】

殻は薄質、細長い円筒形。殻頂は前端近くにあり、背腹縁は平行。前端はやや斜め裁断状、後端は直角に裁断状。殻の前後端は紡錘形に広く開口。殻表は平滑。前筋痕、後筋痕ともに細長い。套線は腹縁から離れる。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区藤前干潟の砂泥底で極めて稀に見つかることがある（川瀬ほか, 2009）。

【県内の分布】

六条干潟、美浜町、セントレア周辺海域、三河一色、東幡豆、矢作川河口など県内各地に棲息する。

【国内の分布】

北海道南西部～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸沿岸。

【生息地の環境／生態的特性】

潮間帯の砂底にやや深く潜って生息する。干潮時に本種の巣穴に食塩をふりかけると、巣穴から飛び出す性質をもつ。

【現在の生息状況／減少の要因】

藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。なお、藤前干潟の底質は砂質部分が少なく泥質が優占するため、砂質を好む本種は生息しにくいと考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により本種の個体数は確実に減少していると判断した。

【保全上の留意点】

水質や底質の汚濁防止や砂粒子の流出防止。

【特記事項】

愛知県各地の潮間帯に生息しているが、近年個体数が減少している地域が目立つ。

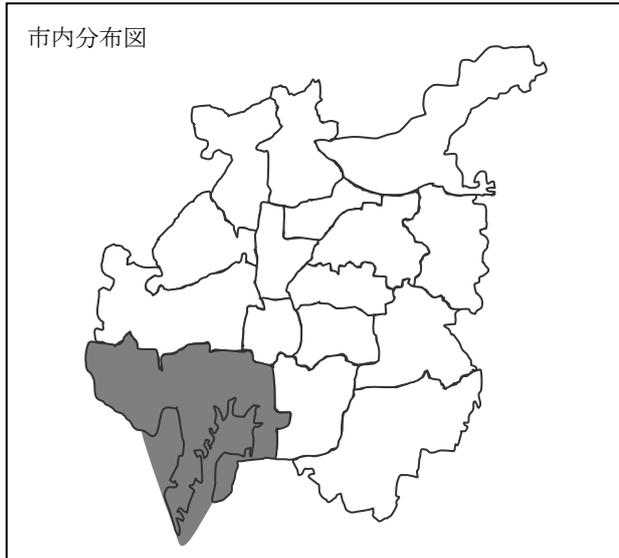
【引用文献】

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
Umemura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.

【関連文献】

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, (32):11-33.
川瀬基弘, 2006. 矢作川河口域における絶滅のおそれのある貝類. 矢作川研究, (10):75-84.
奥谷喬司 (編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
山本茂雄 (編), 2007. 海のふれ健康診断報告書, 90pp. 伊勢・三河湾流域ネットワーク山川里海 22 海健康診断手法開発チーム, 名古屋.

(執筆者 川瀬基弘)



貝類 <マルスダレガイ目 フナガタガイ科>

ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum* (Reeve, 1843)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

津軽以南の河口の汽水域にかなり普通に生息し、また比較的汚染にも強い貝であったが、大都市近郊の河川の河口では水の汚濁のためにほとんど絶滅している（和田ほか，1996）。また、外来種のコウロエンカワヒバリガイの急増に反比例して本種が減少する事例がある（福田・福田，1995）。名古屋市港区藤前干潟では、水質汚濁に加えてコウロエンカワヒバリガイが増え本種の生態的地位が失われつつある。

【形態】

殻は中型で、殻長40mm前後、厚質でやや堅固。長楕円形で膨らみはやや弱い。後端は裁断状。殻表は平滑、背縁部で成長線がやや立ち上がって粗くなる。主歯は横に倒れて2本、離れて弱い後側歯がある。前後の筋痕はほぼ円形。套線は湾入しない。

【分布の概要】

【市内の分布】

新川河口、庄内川河口、藤前干潟のカキ礁で確認した（川瀬ほか，2009）。

【県内の分布】

矢作川河口（鳥居ほか，2012）など県内各地に生息し、カキ礁を構成する。

【国内の分布】

津軽半島以南。

【世界の分布】

台湾、中国大陸南岸。

【生息地の環境／生態的特性】

藤前干潟や庄内川河口域の底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすい。水質や底質の汚濁も目立つ。

本種は、転石裏側やカキ礁中に足糸で附着して棲息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

新川・庄内川河口、藤前干潟では個体数が少なく（川瀬ほか，2009）、外来種のコウロエンカワヒバリガイが転石やカキ礁に多数附着し、本種の生態的地位が奪われている。

【保全上の留意点】

コウロエンカワヒバリガイの増加や水質汚濁を防止する。

【特記事項】

愛知県原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬ほか，2015）。

【引用文献】

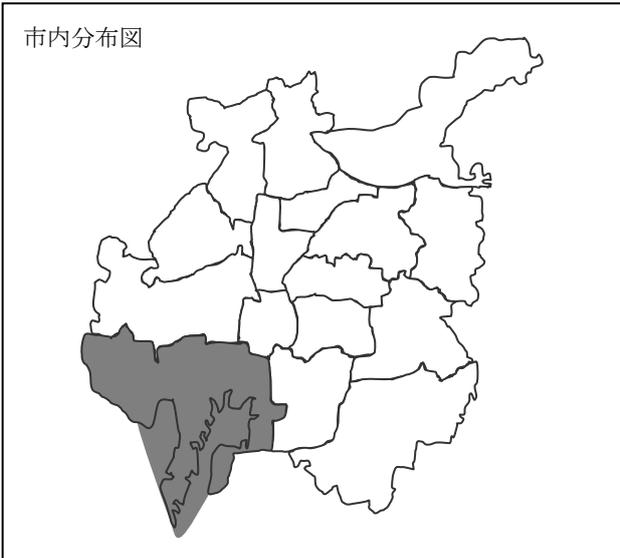
福田 宏・福田敏一，1995. 阿知須干拓にコウロエンカワヒバリガイ出現. 山口の自然，(55):16-20.
 川瀬基弘・市原 俊・河合秀高，2015. 中部更新統渥美層群の軟体動物化石. 瑞浪市化石博物館研究報告，(41): 51-131.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報，(19):11-20.
 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物，3:9-49. 西三河野生生物研究会.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.



ウネナシトマヤガイ
藤前干潟、2007年7月22日、市原 俊 撮影



市内分布図

（執筆者 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 マルスダレガイ科>

オキシジミ *Cyclina sinensis* (Gmelin, 1791)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

潮間帯から水深 20m の砂泥底に生息し、愛知県下では比較的多産する地域もある。藤前干潟、庄内川・新川河口干潟で生貝を確認したが、消長が著しく、2002～03 年や 2006～07 年は個体数が激減していた（川瀬ほか，2009）。底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により個体数は減少していると判断した。

【形態】

殻長約 45mm。殻はやや厚質、類円形、よく膨らむ。殻表は細かい成長脈が不規則にあり、低く不明瞭な放射肋があり、両者が交わり布目状。小月面を欠く。鉸板は厚く広い。3 主歯があり、側歯はない。套線は三角形状に深く湾入。腹縁内面は細かく刻まれる。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟、庄内川河口干潟、新川河口干潟（川瀬ほか，2009）。

【県内の分布】

前芝、矢作川河口、汐川干潟、三河一色など県内各地。

【国内の分布】

陸奥湾～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸南岸。

【生息地の環境／生態的特性】

藤前干潟、庄内川河口干潟、新川河口干潟では、泥質が少なく砂質の優占する底質に 10cm 程度潜っている。

【現在の生息状況／減少の要因】

年による消長が著しく、激減する年が何度か確認されているため、継続調査が必要である。水質や底質の汚濁が減少要因の一つと考えられる。

【保全上の留意点】

水質や底質の汚濁を防止する。

【特記事項】

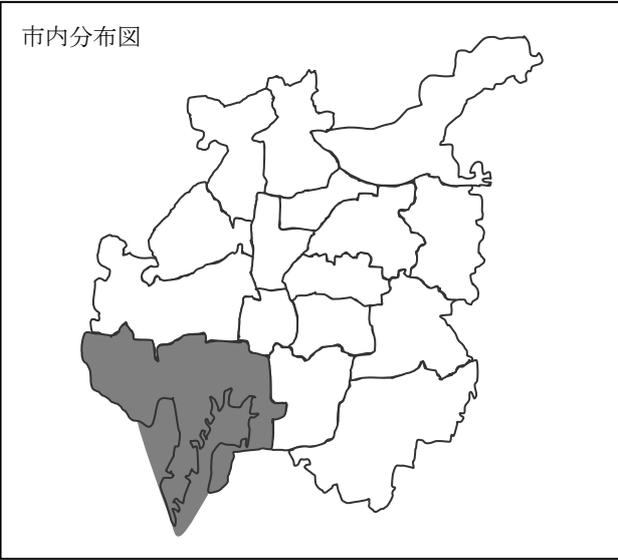
名古屋南区鶴里周辺の完新統に本種の化石記録がある（蜂矢・田中，1998）。

【引用文献】

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
 Umemura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.

【関連文献】

川瀬基弘，2002. 矢作川河口域における干潟の底生生物相. 矢作川研究, (6):81-98.
 川瀬基弘・梅村麻希・八木明彦，2009. 干潟に生息する二枚貝類の炭素・窒素除去. 第 8 回 海環境と生物および沿岸環境修復技術に関するシンポジウム 発表論文集, pp.67-72. 海底環境研究会, 静岡.
 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物, 3:9-49. 西三河野生生物研究会.
 八木明彦・大八木麻希・川瀬基弘・横山亜希子，2014. 藤前干潟の底泥・海水における炭素・窒素の除去－潮溜まり・底泥間隙水・二枚貝中心として－. 陸の水, (64):1-9.



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <オオノガイ目 オオノガイ科>

オオノガイ *Mya (Arenoma) oonogai* Makiyama, 1935

【選定理由】

本種は内湾奥部の泥干潟に深く潜って生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、一色干潟などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。名古屋市内では藤前干潟や庄内川河口に生息しているが、生息数が少なく絶滅が危惧される。藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。

【形態】

殻は大型で殻長約 10cm、長い卵形で、後端は細くなり開く。殻色は白色から灰褐色で、生きている時は褐色の殻皮を被る。内面は白色。殻質は薄質でもろい。水管は太く長いのでこの部分が食用になる。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟、新川河口干潟、庄内川河口域の泥質干潟より少数ながら生きた個体が採集された。

【県内の分布】

汐川干潟、東幡豆、矢作川、一色干潟などの三河湾奥部。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

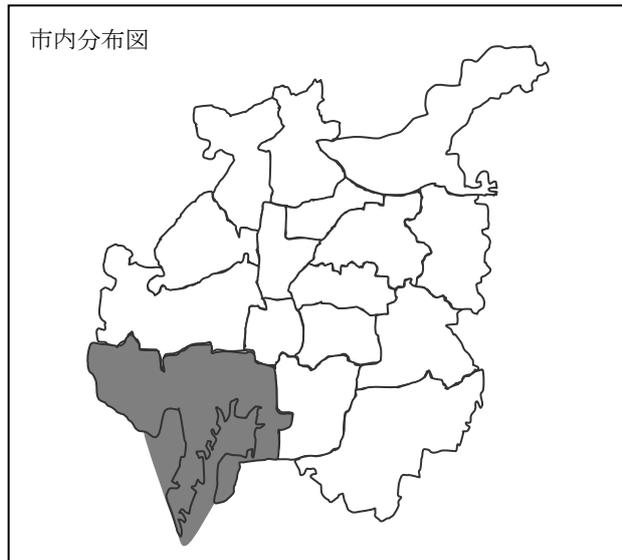
藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.
Umemura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.

【関連文献】

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32):11-33.
川瀬基弘，2002．矢作川河口域における干潟の底生動物相．矢作川研究，(6):81-98.
川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19):11-20.
木村昭一・山下博由，2012．オオノガイ．日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.167．東海大学出版会，秦野．
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典，2013．干潟生物調査ガイドブック～全国版（南西諸島を除く）～，269pp．日本国際湿地保全連合，東京．

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧



貝類

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <ウミタケガイモドキ目 オキナガイ科>

ソトオリガイ *Laternula marilina* (Reeve, 1863)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の河口域や奥部の泥干潟に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、豊川河口域（松岡ほか，1999）、矢作川河口域（鳥居ほか，2012）などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。名古屋市内では庄内川河口域に生息しているが、生息数が少なく絶滅が危惧される。一方、藤前干潟では比較的多産する（川瀬ほか，2009）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻長 45mm、殻は長楕円形で膨らみは強い。左殻が右殻より少し大きく、前後端は開く。殻は非常に薄く、白色半透明。内面には真珠光沢がある。弾帯受けの前に殻帯がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口域の泥質干潟より生きた個体が採集されたが、個体数は少ない。藤前干潟の泥質部分では個体数が多く、強熱減量が高い値を示す泥底にも生息する。

【県内の分布】

汐川干潟、豊川河口、矢作川河口、三河一色など。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

中国、東南アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子，2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報，(19):11-20.
 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.
 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物，3:9-49. 西三河野生生物研究会.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

川瀬基弘，2002. 矢作川河口域における干潟の底生動物相. 矢作川研究，(6):81-98.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006. 伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告，(22):31-64.



(執筆 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 シロネズミガイ科>

ヒナツボ *Berthais egregia* (A. Adams, 1863)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は瀬戸内海を模式産地とし、和歌山県から九州の内湾域の潮下帯に生息することが知られているが、ほとんど生貝が採集された記録がなく(和田ほか, 1996)、河合(2009)が金城ふ頭造成時にサンドポンプで得られた新鮮な死殻の採集を報告するまで、愛知県からの産出の記録自体がなかった。小型種かつ希少種であるため、本種の情報が少なく、今回は情報不足と評価された。和田ほか(1996)では、希少とランクされている。

【形態】

殻高約 5mm で、貝殻は白色で細長い紡錘型。縫合部で強くくびれ、各層は肩部がやや角張る。殻表には肩部で湾曲する細長い縦肋と微細な螺肋がある。臍孔は閉じる。

【分布の概要】

【市内の分布】

金城ふ頭造成時に周辺水域よりサンドポンプで新鮮な死殻が1個体のみ採集された。

【県内の分布】

上記のとおり、金城ふ頭周辺水域のサンドポンプで得られた新鮮な死殻が1個体以外に生貝の記録はない。化石記録については**【特記事項】**を参照。

【国内の分布】

和歌山県田辺湾、佐賀県伊万里湾、熊本県天草富岡など、伊豆半島～九州西岸の潮下帯(水深 10～50m)。

【世界の分布】

記録なし。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

情報不足である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある(川瀬, 2013)。渥美層群豊橋層高松シルト質砂岩部層の *Tonna Bed* ヤツシログイ層から 50 個体ほど発見されているが、全種の産出個体数から判断すると極めて稀産であり、当時から生息個体数は少なかった可能性がある。

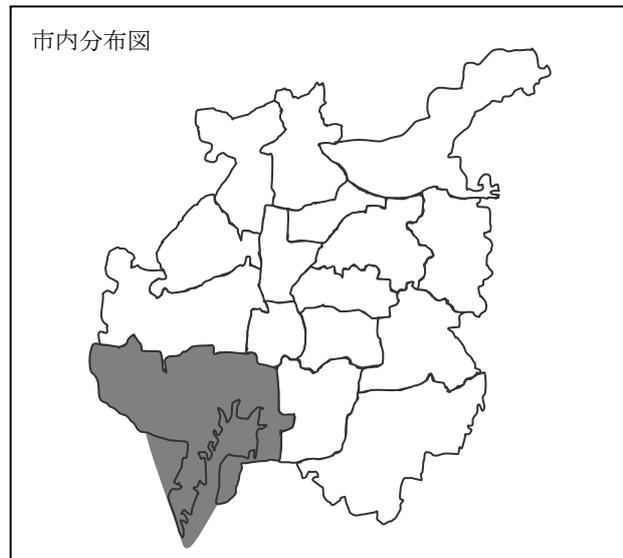
河合(2009)では、本種と共に、タクミニナ、ツキガイモドキ、ウラカガミ、ハナグモリが記録されている。

【引用文献】

河合秀高, 2009. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝. かきつばた, (34):20.
 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp, 東海大学出版会, 東京.



貝類

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ミジンマイマイ科>

ミジンマイマイ *Vallonia pulchellura* (Heude, 1822)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本州、四国、九州の平野部から海岸の比較的自然度の高い自然林に分布するが生息地は限定されている。千葉県から四国、九州の6県では平野部や離島の海岸林の改変によって、生息地が狭められており、絶滅危惧I類から準絶滅危惧種に選定されている。愛知県内からは早瀬・木村(2011)で記録されるまで、生息記録はなかった(野々部ほか, 1984)。愛知県内で本種と同所的に生息していた種はコハクガイやチャコウラナメクジなど外来移入種であった(早瀬・木村, 2011)。愛知県内の個体群は、移入個体群の可能性もある。その後の調査で名古屋市各地から発見されている(川瀬, 2013a, b)。

【形態】

殻高約1mm、殻径約2mmの平巻き状。殻は白～淡橙色の半透明で細かい縦肋が密にある。殻口は肥厚し反転する。臍孔は広い。

【分布の概要】

【市内の分布】

木ヶ崎公園周辺(東区)、高座結御子神社(熱田区)、相生山緑地(天白区)、山崎川(瑞穂区)、熱田神宮公園(熱田区)、横井山緑地(中村区)、名城公園(北区)、戸田川緑地(港区)、金城ふ頭中央緑地(港区)など。

【県内の分布】

上記のほか、豊田市高橋地区扶桑町。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

アジア、ヨーロッパに近似種が分布するが分類学的検討が十分に行われていない。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

情報不足である。

【特記事項】

市内での分布情報が増え、国内移入種の可能性が高くなったが(川瀬, 2013a, b)、アジア、ヨーロッパに分布する近似種との分類学的検討が十分に行われていないため、今回は引き続き情報不足に位置づけた。

【引用文献】

早瀬善正・木村昭一, 2011. 名古屋港周辺の陸産貝類相, 特に新たな外来移入種メリケンスナガイ(新称)について. ちりぼたん, 41(2):48-59.
 川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう!カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きもの一斉調査2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度 環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213, なごや生物多様性保全活動協議会.
 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋市.

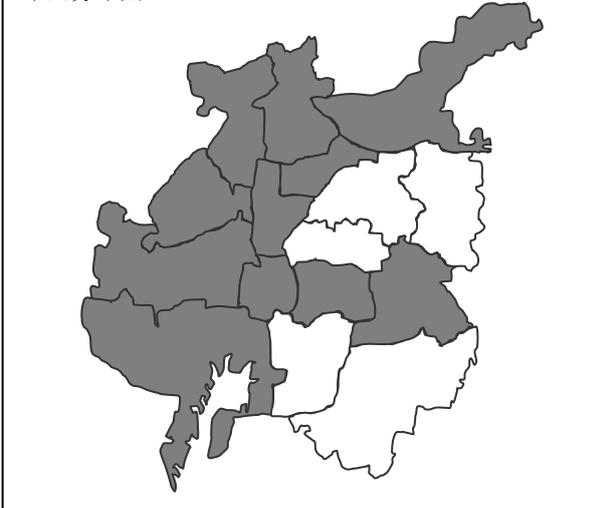
【関連文献】

川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類. 豊橋市自然史博研報, (21):31-43.
 川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.



ミジンマイマイ
岐阜市日置江, 2011年3月7日, 川瀬基弘 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

オオウエキビ *Trochochlamys fraterna* (Pilsbry, 1900)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	国リスト
環境省2014	情報不足

【選定理由】

2012年に行われた「なごや生きもの一斉調査」の陸貝調査では市内各地から本種が発見されたが、一部の生息地を除き生息個体数は少なかった。特に死殻1個体だけしか発見されなかった地点が多くあった(川瀬, 2013a,b)。適度な湿度を保った腐葉土やリター層が豊富な雑木林は、本種がせい生息するための好環境であるが、市内からはこのような環境が減少している。また、本種に同定される個体には複数種が含まれている可能性があるなど、分類学的に未解決部分がある。

【形態】

殻は微小で、殻高3mm、殻径2mm程度。淡い黄褐色。円味のある円錐形。縫合は深く、螺層はよく膨れる。体層の周縁角は鋭い。殻底は緩やかな弧状となる。殻口はほぼ菱形、その周縁は薄く鋭い。軸唇は少し斜めに広がり、臍孔の一部を覆う。臍孔は狭く小さく開く。

【分布の概要】**【市内の分布】**

木ヶ崎公園周辺(東区)、興正寺公園(昭和区)、高座結御子神社(熱田区)、相生山緑地(天白区)、城山八幡宮(千種区)、小幡緑地公園(守山区)、猪高緑地(名東区)、戸田川緑地(港区)、氷上姉子神社(緑区)、細根公園(緑区)など市内各地。

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

本州～九州。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は山麓地の湿った環境下に生息する。名古屋市内の本種が発見された場所の多くは、神社や緑地公園など、適度な湿度を保った腐葉土やリター層であった。乾燥に対する抵抗性は強くない。

【現在の生息状況／減少の要因】

自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような劣悪な環境が増加している。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ, 29 pp, なごや生物多様性保全活動協議会。
川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度 環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213, なごや生物多様性保全活動協議会。

【関連文献】

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類. 豊橋市自然史博研報, (21):31-43。
川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬学園紀要, (7):12-17。
守谷茂樹, 2004. 名古屋市内の陸貝の現況, かきつばた, (29):25-31。

(執筆者 川瀬基弘)

